山寺遺跡

——国道299号線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書——

1989

茅野市教育委員会

山寺遺跡

——国道299号線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書——

1989

茅野市教育委員会

序　　文

このたびの山寺遺跡の発掘調査は、国道299号線の道路改良工事に伴い、諏訪建設事務所からの委託を受け、茅野市教育委員会が実施したものであります。

山寺遺跡の考古学的調査は、昭和33・34年に豊平村誌編纂事業の一環として行なわれて以来、茅野市教育委員会でも昭和59年に緊急発掘を実施したところであります。それらの考古学的成果は、山寺の口碑や歴史的環境と合わせ、山寺を中心とした八ヶ岳山麓の古代・中世史を研究する上に貴重な歴史的資料であります。

さらに、またこのたびの発掘調査では、多数の遺物と共に、今までこの地方では知られていなかった中世の屋敷の存在を思わせる掘立柱建物址等が発見され、山寺遺跡に新たな知見が加えられました。そのことの詳細については本書に記されていますが、それらの学術的成果が、今までの考古学的成果と共に、これからの八ヶ岳山麓の歴史の研究に裨益するところとなれば幸いであります。山寺遺跡は八ケ岳山麓の古代から中世にかかるいくつかの問題を蔵する遺跡として注目されていますが、このたびの発掘調査は、この問題の解明のうえからも、その重要性がさらに明らかとなった調査でありました。

終わりに、今回の事業を進められました調査委員会をはじめ，現場での発掘から遺物整理作業、そして報告書の刊行までご尽力いただいた調査団の関係者に深く感謝申し上げる次第であります。

平成元年３月

茅野市教育委員会

教育長　小島与四男

例　　言

1．本書は国道299号線道路改良工事に係る長野県茅野市山寺遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は諏訪建設事務所からの委託を受け、茅野市教育委員会が山寺遺跡調査委員会を設置して行なったのものであり、調査委員会等の名簿は発掘調査関係者名簿として別掲してある。

3．発掘調査は昭和63年10月19日から11月１日まで行ない、出土品の整理及び報告書の作成は昭和63年11月２日から平成元年３月まで茅野市尖石考古館において行なった。

4．発掘現場における記録は鵜飼幸雄・守矢昌文・矢嶋恵美子・武居八千代が行なった。遺物整理は上記４名のほか小平　恭・小平みえ・小平ふじ子・小平ちえ子が行ない、遺構実測図の整理及び遺物の実測と図の作成は主として守矢が行ない、武居が補佐した。

5．本書の原稿は鵜飼と守矢で分担したが、第II章第２節については牛山市彌氏（茅野市博物館協議会委員）に依頼した。執筆の分担は次のとおりである。第Ｉ章・第II章第１節・第VII章鵜飼幸雄、第II章第２節牛山市彌、第III章～第VI章守矢昌文。

6．出土品・諸記録は茅野市尖石考古館で保管している。

発掘調査関係者名簿

1．調査委員会

委　員　長　今井千浩（教育委員長）

副委員長　中村米二（教育委員長職務代理）

委　　員　小川善弘（教育委員）　宮下　基（教育委員）　小島与四男（教育長・調査団長）
宮坂和茂（教育次長）　藤森則之（建設部長）　吉川喜清（会計課長）

会計監事　小川善弘　吉川喜清

2．調査団

調査団長　小島与四男（茅野市教育長）

調査担当者　鵜飼幸雄（茅野市教育委員会学芸員・日本考古学協会員）

調　査　員　守矢昌文（茅野市尖石考古館学芸員・日本考古学協会員）　小林深志（茅野市八ヶ岳総合博物館学芸員）

調査補助員　武居八千代（長野県考古学会員）　矢嶋恵美子（長野県考古学会員）

発掘参加者　牛山市彌・牛山徳博・小平みえ・小平ふじ子・小平ちえ子・矢崎つな子・原　敏江

3．事務局

事務局長　小島与四男（教育長）　事務局次長　宮坂和茂（教育次長）
事務局課長　長田　篤（社会教育課長）　五味　孝（建設課長）
事務局係長　岩波吉春（社会教育係長）　小平静彦（関連係長）　事務局員　鵜飼幸雄・永田直也（社会教育係）

目　　次

序　文

例　言

第Ⅰ章　調査経緯……1

第１節　調査にいたるまでの経過……1

第２節　発掘調査の経過……1

第Ⅱ章　遺跡概観……3

第１節　遺跡の環境……3

第２節　山寺の口碑……6

第Ⅲ章　遺跡の層序……10

第Ⅳ章　検出された遺構……13

第１節　中世・近世の遺構……13

１．掘立柱建物址……13

２．竪穴状遺構……27

３．井戸址……28

４．土　壙……30

５．溝　址……33

６．暗渠址……36

第Ⅴ章　検出された遺物……37

第１節　中世以前の遺物……37

第２節　中世以降の遺物……37

１．中世の陶磁器類……37

２．近世の陶磁器類……41

３．石製品……48

４．銭　貨……52

５．金属製品・土製品……53

第Ⅵ章　調査の成果と課題……55

第１節　山寺遺跡における中世遺構の変遷について……55

第２節　山寺遺跡出土の中世陶磁器について……59

第Ⅶ章　結　　語……61

挿図目次

第１図　遺跡位置図（1/100,000）……4
第２図　遺跡周辺の地形と発掘区（1/1,000）……5
第３図　遺跡を中心とした小字図（1/2,000）……9
第４図　遺跡の層序（1/90）……10
第５図　発掘区内遺構分布図（1/120）……11・12
第６図　建物址の各種柱穴（1/40）……13
第７図　第１号建物址（1/80）……14
第８図　第２号建物址（1/80）……15
第９図　第３号建物址（1/80）……16
第10図　第４号建物址（1/80）……18
第11図　第５号建物址（1/80）……21・22
第12図　第６号建物址（1/80）……24
第13図　第７号建物址（1/80）……25
第14図　第８号建物址（1/80）……26
第15図　第１号竪穴状遺構（1/60）……28
第16図　第１号・２号井戸址（1/60）……29
第17図　Ｂ－９・Ｃ－９グリッド周辺の遺物出土状況（1/40）……31
第18図　第１号～６号・８号・９号土壙（1/60）……32
第19図　中世・近世の遺構（溝址平面図1/240・溝エレベーション1/120）……34
第20図　第１号暗渠址（平面図1/80・断面図1/40）……36
第21図　中世土器（かわらけ・1/3）……38
第22図　中世土器（内耳土器・１～８は1/6、９～12は1/3）……39
第23図　中世舶載磁器（青磁坏・碗他・1/3）……40
第24図　中世陶器（美濃・瀬戸皿他・1/3）……41
第25図　中世陶器（常滑系甕・１は1/6他は1/3）……42
第26図　中世陶器（常滑系甕・11は1/3、12は1/６）……43
第27図　近世陶磁器（1/3）……43
第28図　近世陶器（擂鉢・1/3）……44
第29図　中世・近世の石製品（石臼・石擂鉢・1/6）……49
第30図　中世・近世の石製品（石擂鉢他・1/6）……50
第31図　中世・近世の石製品（砥石・硯・1/2）……51

第32図　中世・近世の石製品（1/3）……51
第33図　石製品（石英他・1/1.5）……52
第34図　中世銭貨（1/1.5）……52
第35図　中世・近世の金属製品・土製品（錫杖・鉄釘他・1/2）……53
第36図　建物址棟の方位分類図……55
第37図　中世・近世の遺構（1/240）……56
第38図　中世遺構の変遷図……58

表　目　次

第１表　第１号建物址柱穴一覧表……15
第２表　第２号建物址柱穴一覧表……16
第３表　第３号建物址柱穴一覧表……17
第４表　第４号建物址柱穴一覧表……19
第５表　第５号建物址柱穴一覧表……20・23
第６表　第６号建物址柱穴一覧表……24
第７表　第７号建物址柱穴一覧表……25・26
第８表　第８号建物址柱穴一覧表……27
第９表　中世・近世土壙一覧表……33
第10表　溝址一覧表……35・36
第11表　中世・近世陶磁器観察表……45・46・47
第12表　石臼観察表……48
第13表　石擂鉢・大凹石観察表……48
第14表　砥石観察表……50
第15表　出土銭貨一覧表……53

写真図版目次

図版第１　１．遺跡遠景（南方向から）　２．調査区全景（南方向から）
図版第２　３．遺構全景（西方向から）　４．第１号・第２号建物址周辺（西方向から）
図版第３　５．第３号建物址・第１号井戸址（西方向から）　６．第５号建物址・溝址（西方向から）
図版第４　７．第１号井戸址（南方向から）　８．第２号井戸址・第３号溝址（南方向から）
図版第５　出土陶磁器類（１）
図版第６　出土陶磁器類（２）
図版第７　出土陶磁器類（３）
図版第８　出土陶磁器類・銭貨・石製品・金属製品
図版第９　出土石製品

第Ⅰ章　調査経緯

第1節　調査にいたるまでの経過

国道299号バイパス新設工事に係わる山寺遺跡の保護についての現地協議が、県教育委員会文化課、茅野市教育委員会、諏訪建設事務所、茅野市建設課の4者でなされたのは昭和62年10月21日である。協議の結果は、今回のルートが旧佐久諏訪電気鉄道敷地と重なる部分が多いため、山寺遺跡の保護については試掘調査を実施し、遺跡の状況等を把握したうえで再度協議を行ない、それによって保護措置を決定する。そのための試掘調査にかかる経費は諏訪建設事務所で対応し、試掘調査は茅野市教育委員会が実施すること、という内容であった。

県教育委員会からの昭和62年11月2日付62教文第7－138号により、山寺遺跡の保護については、10月21日の協議結果をふまえ、試掘調査費140,000円で茅野市教育委員会が主体者として実施するという計画書が示された。これを受け、茅野市教育委員会では昭和63年度に山寺遺跡の試掘調査を実施することとした。

昭和63年度に入り、7月に至って茅野市教育委員会では山寺遺跡試掘調査団を編成し、7月7日から試掘調査を行なうこととした。試掘調査の結果、市道より東側の、旧佐久諏訪電気鉄道敷地に接する南側の旧地形をとどめる部分から、中世に属す陶磁器片や宋銭と共に溝状・ピット状等の落ち込みや集石が検出され、ルート内に中世を主とする埋蔵文化財の包蔵することが明らかとなった。試掘調査の成果は『山寺遺跡試掘調査報告書』として県教育委員会・諏訪建設事務所へ提出した。

8月に入り、県教育委員会より、山寺遺跡の保護については諏訪建設事務所からの委託費により、茅野市教育委員会が主体となり、300㎡以上を1,575,000円で発掘調査を行なうという調査計画書が示された。これを受け、茅野市教育委員会では10月に入って山寺遺跡調査委員会・山寺遺跡発掘調査団を設置し、10月19日から山寺遺跡の発掘調査に入った。

第2節　発掘調査の経過

発掘調査は、昭和63年7月7日より9日まで行なわれた試掘の成果を基に公図1812－1、1813－4、1815－1番を対象に行なわれた。

調査区は道路敷地内に限定されるため、座標軸に沿った形で決定せず、道路センターを基線として2m×2mのグリッドを設定した。このグリッドは試掘時のグリッド配置と同様である。

調査日誌

10月19日（水）　午前中に機材を運搬し、調査区隣接地にプレハブ小屋を設置する。

10月20日（木）　本日より発掘調査を開始する。調査区全体に雑草が繁茂するために草苅作業を行なう。草苅作業後、重機により表土剥ぎ。表土剥ぎの終了した部分より杭打ちを行ない、遺構確認に入る。

10月21日（金）　作業は昨日の継続作業。C－6より宋銭。C－9、D－8より石擂鉢、石臼が出土する。A～D－8周辺に集石が検出され、この周辺より陶器片が出土する。

10月22日（土）　昨日に続き遺構確認作業。調査区全域に柱穴状のピットが検出され、又東西方向に溝が検出される。

10月24日（月）　遺構確認作業を終了し、柱穴状ピットの掘り下げを行なう。

10月26日（水）　遺構の掘り下げ作業の継続。井戸2の掘り下げ、内部に石臼片や礫が詰め込まれたような状態で出土する。下部へ行くにつれ湧水が見られ、掘り下げを断念する。

10月27日（木）　遺構の掘り下げ作業、特に柱穴を中心に行なう。井戸2脇の浅い掘り方内より錫杖の頭部が出土する。また、C－7ピット内よりガラス小玉が出土する。

10月28日（金）　ほぼ柱穴状ピットの掘り下げが完了する。竪穴状遺構1の掘り下げを行なう。調査区全域の清掃作業を行ない、写真撮影終了後測量の段取りに入る。

10月29日（土）　寒い一日で測量に手間どる。発掘機材の一部を撤収する。

10月31日（月）　遺構平面測量と、エレベーション図の作成。柱穴状ピットのレベリング作業。平面図を基に建物址のピット確認を行ない再点検。

11月1日（火）　遺構平面図の再点検を行ない、調査をこれで全て終了する。

第II章　遺跡概観

第1節　遺跡の環境

山寺遺跡は、茅野から北八ヶ岳の麦草峠を越えて佐久方面へ通ずる国道299号線沿いの山寺集落にあり、茅野駅から約4.8ｋｍの距離にある。

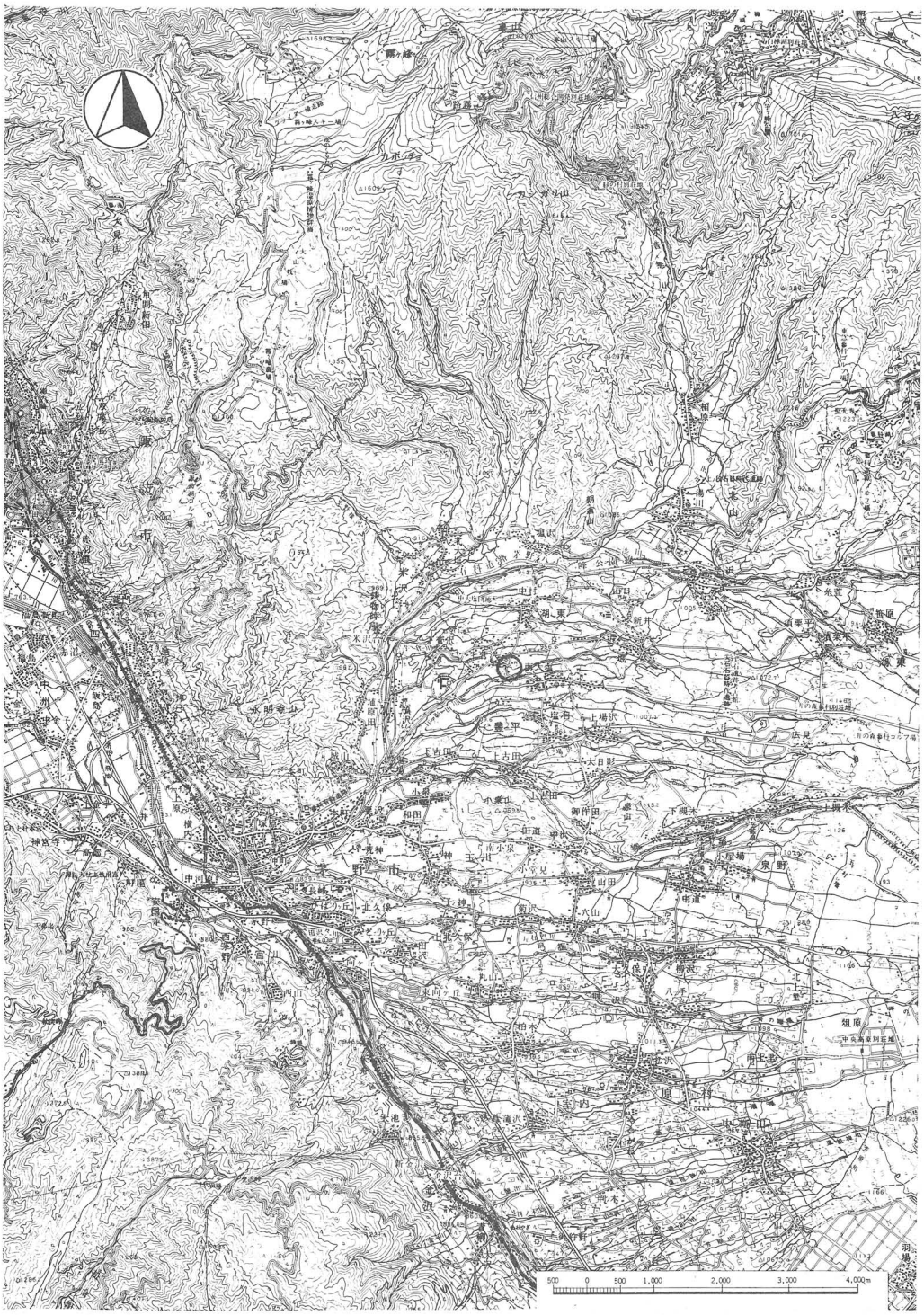
山寺遺跡の位置する八ヶ岳山麓は、山麓が北西に緩く傾斜した面をなしている。このため、八ヶ岳の山中や山麓に発した河川は山麓を解析して西に流れ、東西に長い渓谷となって発達し、山麓を東西に長いいくつかの長峰状台地に区分している。山寺遺跡の所在する台地も南を日影田川、北を菅沢の谷によって区分されており、その先端は、地理的に、また交通上からも八ヶ岳山麓への扇の要となる「鬼場」付近まで伸びて上川に断ち切られている。

山寺遺跡は山寺集落の位置する台地の南緩斜面にある。ここは、斜面裾が日影田川へ向かって強く張り出した小丘状の地形と、そこからの湾曲した地形とが一体となった、台地の地形に変化のある場所である。現在この斜面は、宅地のほか畑と水田として耕作され、水田は日影田川へ向かって階段状に開かれている。遺跡付近の各所には湧水があり、特に白山社南裾が著しい。また、市道より西のルート内に当たる湾曲した地形に位置する水田では、試掘穴に水が湧き溜まって調査が不可能であった。湧水が豊富であり、風当たりも弱く日当たりの良い場所であることが、八ヶ岳山麓でも早くから開かれた土地となった所以であるといわれている。

今回の発掘地点は、白山社前の市道に接する東側の土地である。ルート内はすでに北側２分の１ほどが旧佐久諏訪電気鉄道敷地として掘り切られており、中には池のように水が溜まっていた。発掘地点の標高は915m～920mである。

遺跡の所在する山寺は南大塩の一部で、南大塩の旧郷といわれ、南大塩の産土神である白山神社と八幡社が台地の南斜面に約500m隔てて位置している。『豊平村誌』(1966)によると、この白山神社は一名白山大権現ともいい、山寺「一寺六坊」の諸坊の守護神として祀られたものであるという。付近一帯には大坊屋敷・仁王堂・セガキ山・経塚などの地名もある。また、白山神社の西に続く毘沙門堂には木彫の古い掛仏、室町時代の作と推定され、市指定文化財である木造毘沙門天像が祀られれいる。毘沙門堂の庭には付近から発見された中世の五輪塔や石塔・碑等が集められ、この地の歴史の古さをしのばせている。

白山神社と八幡社の間の南斜面からは土師器・須恵器等が出土することで早くから知られていた。明治年間には白山神社付近の畑から土師器５個が発見されたことが記録され、その後も各所から耕作に伴って土師器類や石組カマドも発見されたようである。昭和32年には平安時代の竪穴住居址１ヶ所が発掘され、翌33・34年には２ヶ所、計３ヶ所の竪穴住居址と井戸址１ヶ所が豊平村誌編纂事業の一環として発掘調査されている（宮坂1968)。井戸址はそれ以前にも旧佐久諏訪電



第１図　遺跡位置図（1/100,000）

第２図　遺跡周辺の地形と発掘区（1/1,000）

気鉄道工事の際にも発見されたらしく、また豊平村誌調査後の水田造成工事に際しても発見されたようである。その後、昭和56年に行なわれた宅地造成に伴う緊急調査では、八幡社と白山神社のほぼ中間の南斜面から平安時代の竪穴住居址2ヶ所が発掘されている（宮坂1982）。

付近の平安時代の遺跡として注目されるのは権現林遺跡である。権現林遺跡は南隣の台地上にあり、昭和12年の林道拡張工事の際に土壙と考えられる遺構から内面黒色の高台付埦6個、杯状と皿状のカワラケが各1個発見された。このうち高台付埦の4個には「直」の墨書があり、その意義と共に山麓牧の存在の問題と関連して注目された（宮坂1938・矢崎1941）。そのほか、山寺と同一台地の西に位置する長倉からも土師器数点が発見されているほか、高尾戸・上半田・中ツルネ・神立林の諸遺跡も平安時代の遺跡として記録されている。

また、最近の『茅野市史』上巻（1986）では、信濃16牧の1つ山鹿牧を旧豊平村・湖東村地域に該当させており、その管理者の居住地を山寺地籍に想定していることも、山寺の歴史的環境と合わせ注意されるところである。

第2節　山寺の口碑

南大塩の由来　蓼科山・八ヶ岳の西山麓に展開する、標高800mから1,100mの台地には、農耕を主とする大小いくつもの集落が散在している。茅野市域に属するこの地帯を、いつの頃からか山浦とよびならわしているが、どうして山浦とよぶようになったのかよくわかっていない。

この山浦地域の集落は、江戸期に入り諏訪藩の食糧増産政策により開拓された多くの新田村と、それ以前に成立していた数少ない古村の二つに大別される。古村については成立年代も不明で、現在の集落からかなり離れている畑や林から、土師器や須恵器が発掘されていることから、長い年月の間に人家は集合離散をくりかえし、集落の位置も移動しながら現在に及んでいるようである。

そんな古村の一つに、現在の茅野市豊平地区の南大塩区がある。古文書に南大塩の名がみえるのは武田勝頼時代からであり、それ以前の事は正確には知ることはできないが、諏訪社の「神事次第旧記」や社の式年造営の記録には、平安時代末には諏訪社の重要な神事や設役を大塩南方（大塩ひる沢）が勤めたことがのっている。この大塩南方が南大塩に変わったのはいつからかよくわからないが、近隣の集落である福沢や中村が古くは、大塩福沢、大塩中村とよばれていたので、大塩牧が衰退した時、牧の支配がなくなり、それぞれに独立し名称も変わったものであろう。

また、南大塩の集落の中心に広い範囲にわたり大塩の字名が残り、付近に駒頭、野馬捕等の牧にちなんだ字名も残っていることから、東鑑にある大塩牧、延喜式の山麓牧、ひいては和名抄の中心的な集落であったであろうとされている。

時代はくだるが慶長19年、諏訪頼水が定めた諏訪社の祭祀組織である「御頭郷制度」の親郷を勤めたのは、山浦地域では南大塩しかないことからしても、南大塩は山浦地域の中心的な性格を持つ古い集落であったとみてよいであろう。

南大塩の集落の沢一つへだてた北側に、つい最近まで30戸くらいしかなかった小さい集落があり山寺とよばれている。一見異なった集落に思われがちであるが、南大塩の産土神は山寺に鎮まっており、かつての南大塩の中心はこの山寺の地であったが、広い耕地を求めて人家が移動して、現在の南大塩の集落が形成され山寺はさびれてしまったものともいわれ、南大塩と山寺は同一のものである。

山寺の口碑　南大塩とその付近の集落には山寺について次のような口碑が伝えられている。

山寺の白山社は現在は南大塩の産土神として鎮座しているが、古くは白山大権現ともひる沢の社とも称し、祭神は十一面観音で嘉禎(1237)以前の社であるが創立年代はわかっていない。白山社は半島系帰化人と関係深い性格を持つ社であるので、山鹿牧、大塩牧が盛であった頃、駒の飼育の技術者として招かれた帰化人が祀りはじめたものであろうともいわれているがよくわかっていない。

山寺には古い大きな寺があったといわれているが、この寺は白山神社に所属する寺であったのか、寺が隆盛になるにしたがい白山社が寺を守護する社となったのか甚だ雑然としてよくわからない。

寺については、大同年間高徳な大師が錫をこの地に掛け、密教を説き寺は隆盛をきわめ一時は七堂伽藍を具備する程になり、総本寺を大坊と称した。隆盛をきわめた寺運も、なにかの事情により衰退し、諏訪上社の神宮寺がおこるに際し、多くの坊は神宮寺に移された。

明治の廃仏棄釈の時、神宮寺から普賢堂に安置の毘沙門天・不動尊の木像及び仁王を、由来山寺より移転したものであると寺記にあるから、引き取るよう通知があったが、すでに山寺の寺は消滅してなく、安置する場所もないので引取を断念した。現在眞志野の善光寺の仁王が山寺より下がったものと伝えられている。

また弘仁6年（815）伝教大師（最澄）が東国に仏教を布教の際、信濃国大山寺の正智禅師が200部の写経に助力し、上野国浄土院に送ったと、諏訪明神絵詞にある信濃国の大山寺は山寺の寺であったともいわれている。

白山社は寺がなくなってからも、大塩南方の地域内にできた堀、須栗平等多くの集落の共同の産土神として崇敬されていたが、須栗平は白山社を分祀し、塩ノ日、上場沢の産土神である豊郷神社はひる沢の水神を分けたと伝えられ、現在は南大塩だけの産土神になったが、堀区で御柱年には白山社二の御柱を奉仕する旧慣を残している。

以上が口碑の大略であるが、口碑は長い年月の間に幾度も修正粉飾が加えられており、山寺の口碑についても、いずれが真実でありいずれが虚であるかを見定めることはむずかしい。山寺の口碑の場合は全部がでたらめであるとはいいきれない。なにか真実らしい影が散見できるのが特長であるといえるであろう。傍証となるように文献を詳細に紹介すればよいのであるが、「神事次第旧記」には6月15日の大塩ひる沢の神事が白山社で仏式に行なわれたとの記載があり、天正16年（1588）の「上下宮寺社領指出」には山寺に新光寺（現在南大塩の心光寺）仏眼坊、法寿坊、全照

坊（如法院の善膳坊、旧蹟年代記の全勝坊）、養泉坊、東円坊、円成坊の一寺六坊があったとある。このような山寺についての記録が古い文書にいくつかある事をつけ加えて終わりとする。

豊平村誌編纂委員会　1966　『豊平村誌』

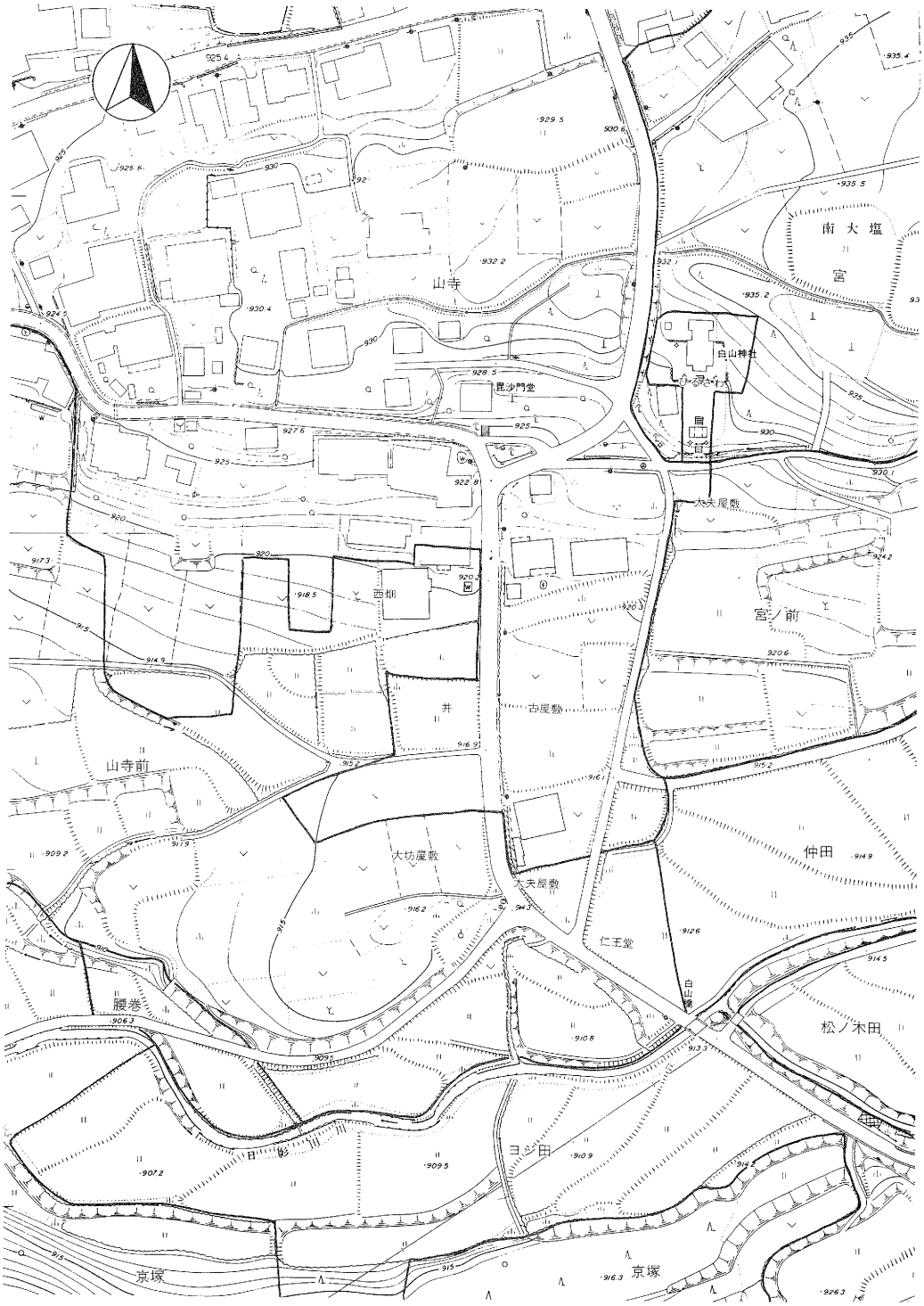
宮坂虎次　1968　「長野県茅野市山寺遺跡について」　『信濃第20巻第４号』

宮坂虎次　1982　『山寺遺跡』　茅野市教育委員会

宮坂英弐　1938　「信濃国諏訪郡大塩部落小字権現林出土の埴部土器報告」　『歴史地理72－１』

矢崎射川城　1941　「墨書『直』ある土師器」　『信濃文壇10－６』

矢崎孟伯　1986　「古代の牧と交通」　『茅野市史』上巻



第3図　遺跡を中心とした小字図（1/2,000）

第Ⅲ章　遺跡の層序

調査区全体が近世、近代に於ける耕作、開田等で攪乱されており、基本的な層序を把握することはできなかった。また、中世～近世に亘る遺物等も混然とした状態で出土しており、層序による時期区分をすることはできなかった。

第Ⅰ層……色調は黒色を呈し、若干の粘性をもち、しまりが良い。現在の耕作土に当たる。

第Ⅱ層……色調はⅠ層よりも灰色をおび、内部に小礫を含有し、ややザラつく。

第Ⅲ層……色調は黄褐色を呈する。漸移層。

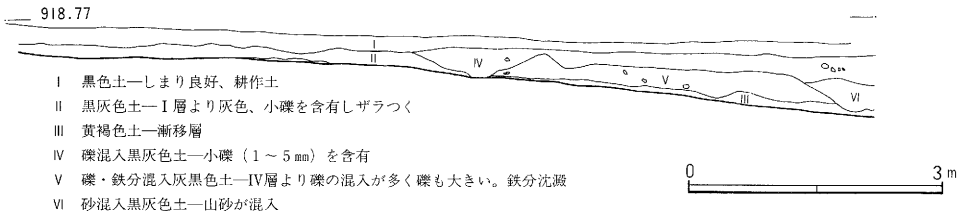
第Ⅳ層……色調は黒灰色を呈し、１～５㎜大の小礫を含有し、ザラつく。

第Ⅴ層……色調は灰色の強い黒色を呈し、Ⅳ層よりも大きい礫を含有する。水田の床土として埋め立てられたものか、内部に鉄分の沈澱が見られる。

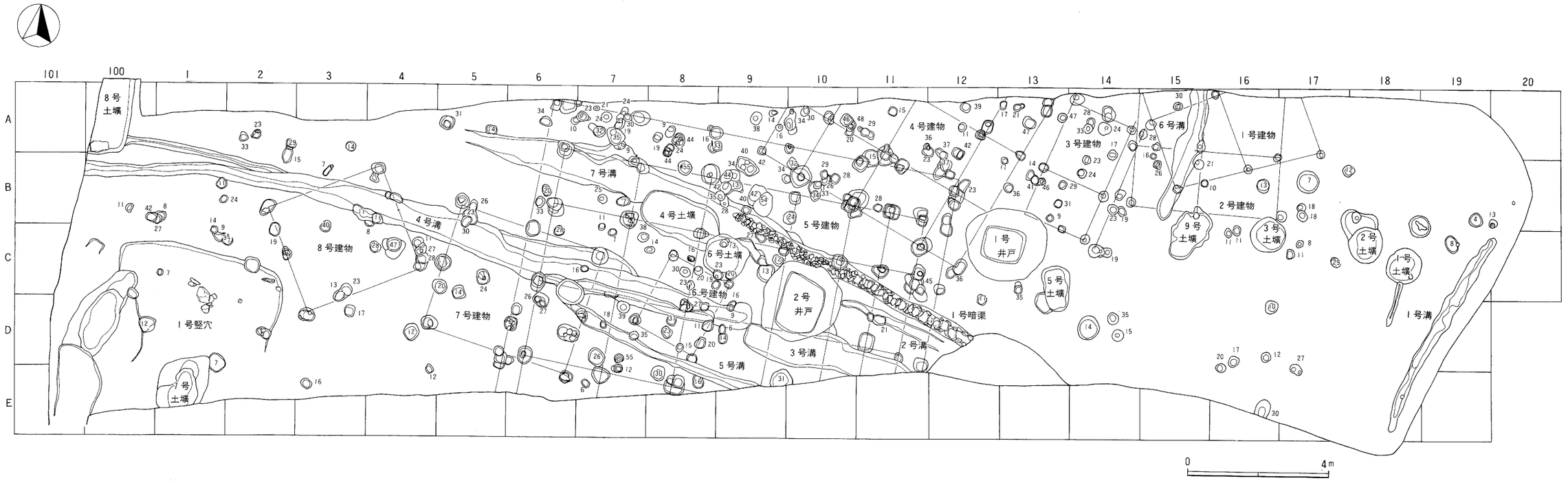
第Ⅵ層……色調はⅣ層に近い状態であるが、山砂を含有し、ザラつく感を受ける。土層下部より18世紀～19世紀の肥前系磁器皿が出土している。

全体の土層は調査区の北側で約40cm、南側で約90cmを測り、地山は北側から南側に傾斜していることがわかる。土層の状況より考えると、Ⅱ層、Ⅴ層は耕作土であり、段状に２枚の耕地があったことを物語っている。これを耕地拡張のために、Ⅳ層をもって埋め、１枚の耕地を造成し、現在の耕地を作り出している。この造成がいつ頃行なわれたのかについては適確な根拠を見い出すことはできなかったが、Ⅵ層が段状に２枚の耕地を作り出す時点で埋めた土と考えられ、その層内より18世紀～19世紀の肥前系磁器皿が出土していることより、Ⅰ層・Ⅳ層はそれ以降の層であるため、19世紀以降耕地拡張が行なわれたものと考えられる。

遺物の含有層はⅡ層とⅤ層が中心で、中世～近世の遺物が混在する形で出土している。



第４図　遺跡の層序（1/90）


101
100
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
A
B
C
D
E
8号土壙
7号溝
4号溝
4号土壙
6号土壙
6号建物
8号建物
7号建物
4号建物
5号建物
3号建物
6号溝
1号建物
2号建物
9号土壙
3号土壙
2号土壙
1号土壙
1号溝
1号井戸
2号井戸
5号土壙
1号暗渠
2号溝
3号溝
5号溝
1号竪穴
1号土壙
0
4m

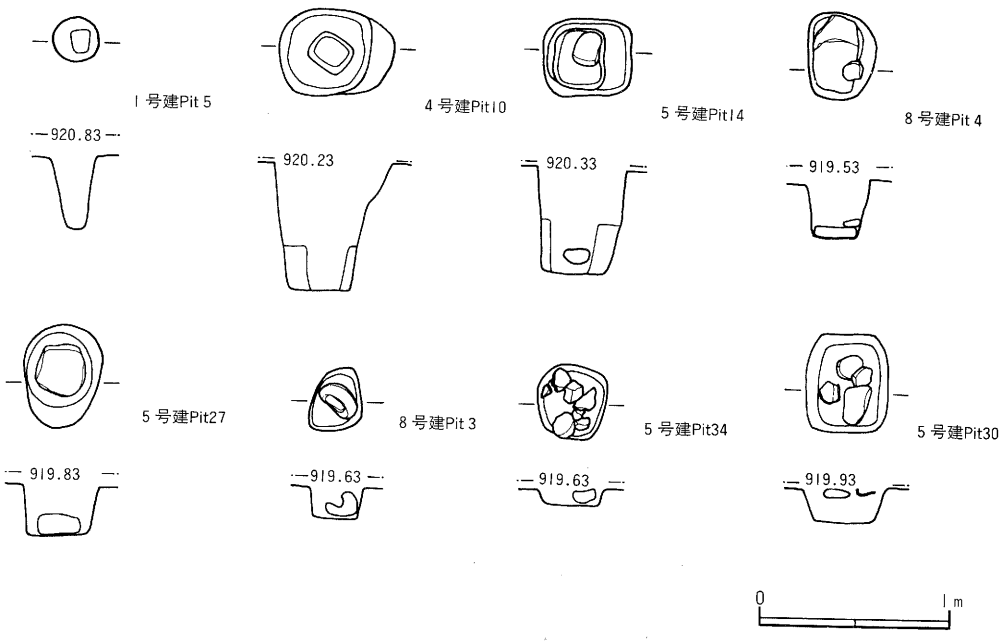
第IV章　検出された遺構

第１節　中世・近世の遺構

発見された遺構は掘立柱建物址、竪穴状遺構、井戸址、溝址、暗渠址、土壙がある。これらの遺構の所属時期については、調査区全体が近世・近代に於ける耕作や、開田等で、攪乱が著しく、面的な把握が出来なかったこともあり、その特定がむずかしかった。伴出遺物等より、井戸址・暗渠址・溝址等の一部が近世に属するものの、他の遺構、特に建物址については明確な時期を特定し得る資料は得られなかったが、各遺構の重複関係より推察すると、おおむね中世～近世前半に属するもののようである。

１．掘立柱建物址

調査区全域に亘って柱穴状のピットが305ヶ所検出された。これら柱穴状ピットは平面形状が、円形(不整円形を含む)、楕円形、隅丸方形等のものが認められ、直径20～50cm、深さ20～60cm程のものが主体を占める。規模の小さな、20～30cm前後のものは、Ａ・Ｂ－13～17グリッド周辺に、40～50cmの規模の大きなものは、Ｂ・Ｅ－６～11グリッド周辺に見られた。数ケ所に柱痕が検出され、そのほとんどが径15～20cmのものである。ピット底面に石を埋設し、根石とするもの15、柱の根固めとして石詰めをするもの９、根固めに粘土・ロームブロック等を埋め戻すもの16が検



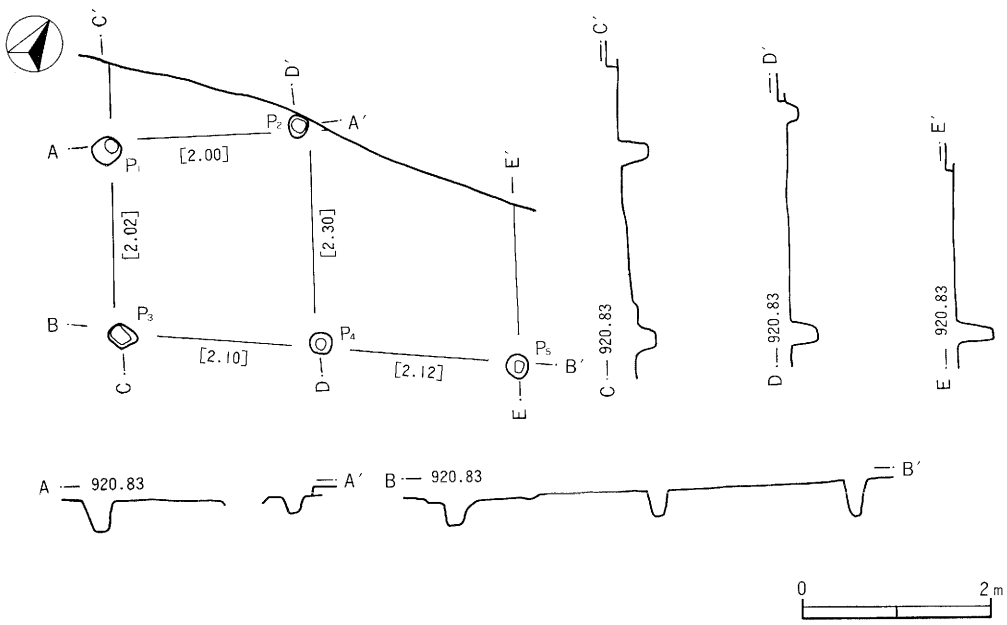
第６図　建物址の各種柱穴（1/40）

出され、これらは主に規模の大きな建物址に伴う柱穴に見られた。

これらの柱穴状ピットは、調査区内から満遍なく検出されるのではなく、ある一定の部分に集中する傾向が認められた。特にA～E－5～12グリッド周辺に密に分布し、この部分に建物址が存在することが認められた。

柱穴状ピットは集中が著しく、調査時に於いて個々を結び建物址を把握することは難をきたしたが、平面図作製時に於いて8棟の建物址の存在が明確となった。

第1号建物址（第7図、図版第2）



第7図　第1号建物址（1/80）

検出状況　A－15～17、B－15・16グリッド周辺より、径25cm、深さ30～75cmのピット群が集中して検出された。これらのピット群がほぼ一間間隔に並ぶことより、建物址の存在が明確となった。建物址の北側は調査区外となるため全体の把握に至ってはいない。第2号・3号建物址と重複する。

遺構の構造　全体の約1/2が調査区外に位置するために建物址の規模は把握できなかった。

検出された柱穴は5ヶ所であり、P_3は第6号溝址と重複する。その為に桁行、梁行の全様を特定することはできなかったが、柱間隔、P_3～P_5列の東西方向に連なる柱穴が検出できなかったことなどより、P_3～P_5方向が梁行方向となる可能性が強く、梁行2間の総柱建物址が想定できる。

棟方位はN－29°－Wである。柱間は梁行で2cmの差があり、南西方向が張り出す形で歪む。

柱穴は不整円形若しくは方形を呈する。平面規模は，最大で径31cmを測り、平均では25cm前後である。深さにはバラつきが見られるが、総じて浅く、柱痕等は検出されていない。

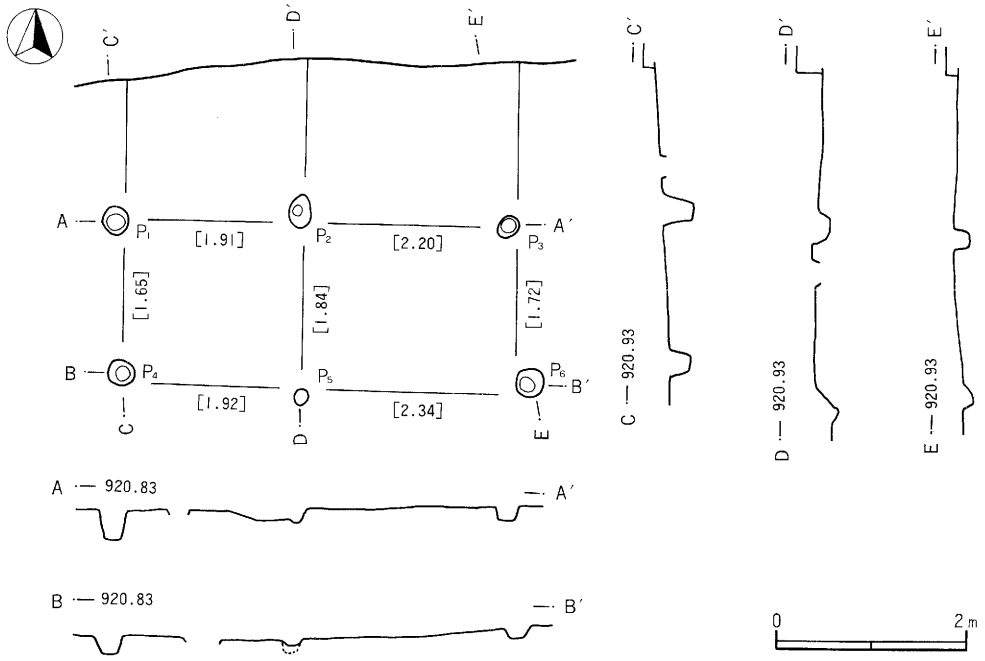
建物址の規模、柱間の状況や柱穴のあり方より本址は簡単な構造をもつ建物であったと考えられる。

遺物の出土状況　柱穴内より遺物の出土はない。

第1表　第1号建物址柱穴一覧表

柱穴No.	平面形	上下	規模（cm）	上下	柱痕(cm)	深さ（cm）	備考
P1	方形		31 × 28			31	
	不整楕円形		15 × 13				
P2	不整円形		21 × 27			14.5	
	方形		15 × 13				
P3	不整方形		23 × 28			16	溝6重複
	方形		13 × 11				
P4	不整円形		25 × 24			27	
	不整円形		11 × 12				
P5	不整円形		23 × 26			38	
	不整方形		9 × 13				

第2号建物址（第8図、図版第2）



第8図　第2号建物址（1/80）

検出状況　A－15・16、B－15・16グリッドに第1号建物址と重複する形で検出された。北西側を第3号建物址と、P_2が第6号溝址、P_5を第9号土壙と重複し、建物址の北側が調査区外となるために全容を把握することはできなかった。

遺構の構造　建物址の一部が調査区外に延びるために規模を把握することはできなかった。

検出された柱穴は6ヶ所である。建物規模の全容が不明確なために桁行、梁行を把握することはできなかったが、現在確認されている東西方向の柱穴に並ぶ柱穴が検出できなかったこともあ

り、棟方向は、N－3°－Wとなろう。東方向より考えると、梁行2間の総柱建物址が想定できる。

柱間は梁行南辺で42cmの差があり、棟が21cm西方向へずれている。

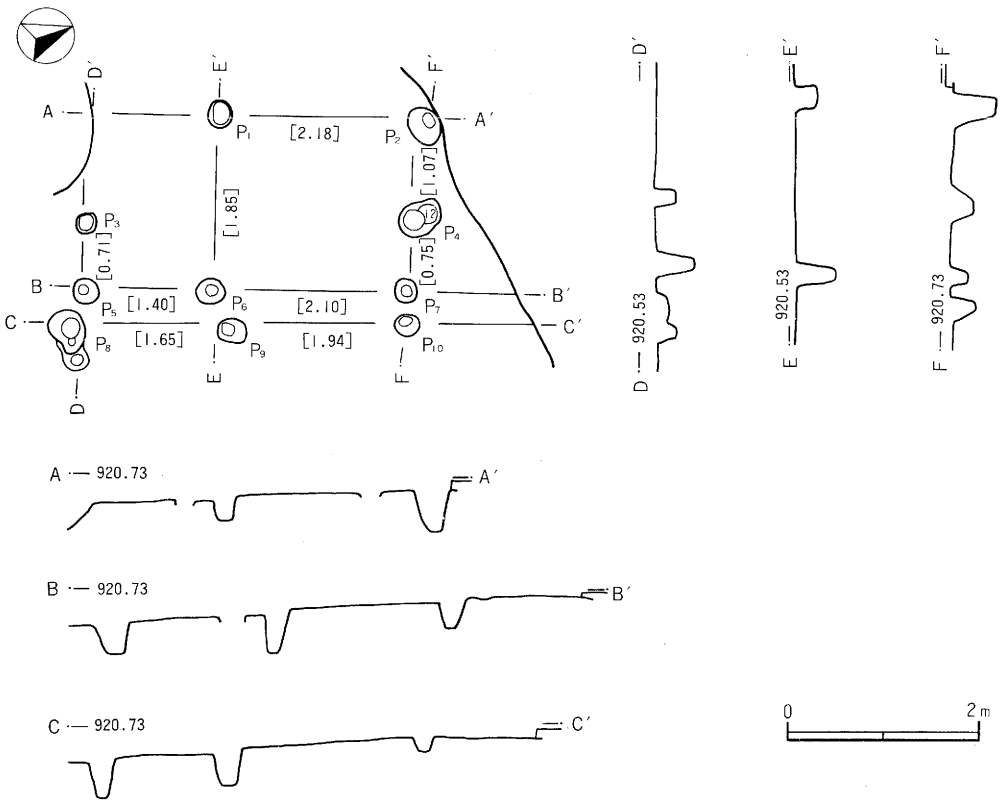
柱穴は不整円形若しくは不整方形で深さも12～20cmと浅く、柱痕等は検出されていない。

遺物の出土状況　柱穴内より遺物の出土はない。

第2表　第2号建物址柱穴一覧表

柱穴No.	平面形 上	平面形 下	規模(cm) 上	規模(cm) 下	柱痕(cm)	深さ(cm)	備考
P1	不整円形	不整円形	25 × 27	17 × 17		16	
P2	不整楕円形	円形	25 × 37	9 × 10		20	溝6重複
P3	不整楕円形	円形	21 × 26	14 × 14		15	
P4	不整方形	不整円形	27 × 28	15 × 16		15	
P5				17 × 17		12	土壙9重複
P6	不整方形	不整円形	29 × 30	13 × 18		13	

第3号建物址（第9図、図版第3）



第9図　第3号建物址（1/80）

検出状況　本址はA－14・B－14グリッドに柱列が検出され建物址の存在が予想された。精査に伴いその構造が明らかになってきたが、他の建物址とは異なり東西辺へ延びる柱穴は検出されず、南北方向へ延びる長屋状の特異な構造をもつ建物址と判明した。北側が調査区外となるために全容の把握には至ってはいない。北東方向を第1号・第2号建物址と重複する。

遺構の構造　本址は北側が調査区外に位置するため規模を把握することはできなかった。しかし、検出された10ヶ所の柱穴配列より考えると棟方向はN－17°－Eである。棟方向より考えると、梁行2間、桁行3間以上、東廂の建物址を想定でき得る。

柱間は桁行東辺で70cm、廂部は29cmを測りほぼ平行である。梁行北辺で32cmの差が7cm、棟が東方向へ16cmズレている。桁行に70cmもの差が生じており、$P_1-P_2-P_7-P_6$に囲まれた範囲は、$P_1-P_6-P_5$に囲まれた範囲の1.5倍の面積をもつ。全長では桁行より廂が9cm長い。尚、桁行と廂の間隔は35cmを測る。

柱穴の平面形が不整円形を呈するものが主体を占め、第1号、第2号建物址と同様な傾向を示す。径も28～49cmとバラつくが、30cm前後のものが中心である。深さも17～48cmと幅がある。柱痕等は検出されていない。桁行、梁行、廂のあり方より本址は、他の建物址と構造が異なるものと考えられる。

遺物の出土状況　本址に直接関わるような遺物の出土はない。

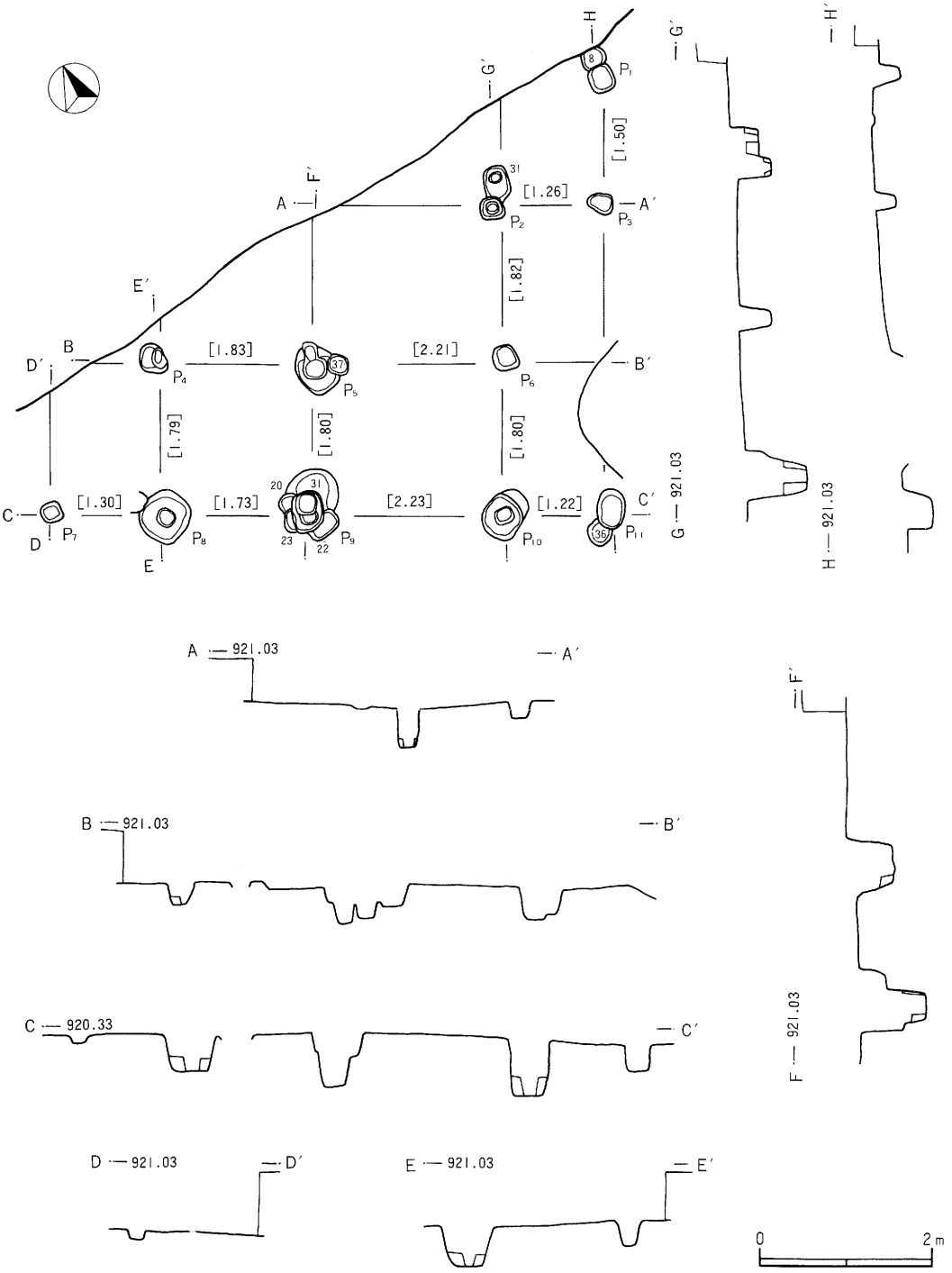
第3表　第3号建物址柱穴一覧表

柱穴No.	平面形 上/下	規模(cm) 上/下	柱痕(cm)	深さ(cm)	備考
P_1	不整円形	27 × 29		25	
	不整円形	24 × 24			
P_2	不整楕円形	32 × 43		45	
	楕円形	12 × 14			
P_3	方形	21 × 21		17	
	方形	15 × 16			
P_4	不整楕円形	36 × 49		22	重複
	円形	23 × 24			
P_5	円形	25 × 28		43	
	円形	9 × 11			
P_6	不整円形	29 × 30		45	
	円形	12 × 13			
P_7	円形	23 × 25		27	
	円形	12 × 13			
P_8	不整円形	35 × 49		31	重複、1個柱穴重複、廂柱
	円形	20 × 20			
P_9	不整楕円形	25 × 31		48	廂柱
	方形	13 × 13			
P_{10}	不整円形	25 × 28		17	廂柱
	楕円形	9 × 14			

第4号建物址（第10図、図版第2）

検出状況　A－10、B－10、B－11グリッド周辺に多くのピット群が検出され、これらが建物址に関わる可能性があり、構造のしっかりしている柱穴の柱間隔を調査することにより、本址の存在が明確となった。南側を第5号建物址と重複し、北側約1/2を調査区外に位置しているために、全体の把握には至っていない。

遺構の構造　北側約1/2を調査区外に位置するために規模を把握することはできなかった。しか



第10図　第４号建物址（1/80）

し、検出された11ヶ所の柱穴配列より考えると棟方向N－23°－Eで、桁行4間、梁行2間、東西辺に廂をもつ総柱建物が推定でき得る。

桁行の柱間は、東辺で2cmを測りほとんど誤差がない。梁行は南辺で50cmの差があり、棟は西方向へ50cmズレる。廂は西側に1.3m、東側に1.26～1.22m張り出す。

柱穴は6本（P_2・P_4・P_5・P_8・P_9・P_{10}）が粘土・ロームブロックを用いた根固めをもつ。5ヶ所に建て替えによると思われる重複が認められた。P_9は、第5号建物址と重複しているが、調査所見によれば、本址の柱穴が第5号の柱穴に重なる形であった。平面プランは方形が主体を占め、廂柱に関わる柱穴は楕円形になるものが見られた。規模は北側の柱穴は比較的小規模なのに対し、南側は径48～60cmと大きな傾向を示した。深さは76～9cmと様々で、概して廂柱のものが浅い。柱痕は6ヶ所の柱穴（P_2・P_4・P_5・P_8・P_9・P_{10}）に認められ、径14～25cmを測る。

遺物の出土状況　P_1内より内耳土器片が出土しており、本址は中世に帰属する遺構であろう。

第4表　第4号建物址柱穴一覧表

柱穴No.	平面形 上下	規模（cm） 上下	柱痕（cm）	深さ（cm）	備考
P_1	方形	30 × 33		30	1個柱穴重複、廂柱、内耳土器片
	方形	22 × 27			
P_2	方形	28 × 30	16 × 14	43	1個柱穴重複、根がため
	方形	21 × 21			
P_3	不整楕円形	25 × 31		22	廂柱
	不整楕円形	17 × 24			
P_4	不整方形	32 × 38	18 × 22	28	根がため
	不整方形	24 × 25			
P_5	不整円形	48 × 60	26 × 24	43	根がため
	方形	37 × 42			
P_6	方形	29 × 30		31	建物址5柱穴と重複
	方形	19 × 22			
P_7	方形	25 × 25		9	廂柱
	方形	13 × 15			
P_8	方形	61 × 60	21 × 23	43	根がため
	方形	48 × 46			
P_9	方形	37 × 48	25 × 24	76	建物址5柱穴P_{13}と重複、根がため
	方形	32 × 42			
P_{10}	方形	46 × 50	19 × 20	69	根がため
	方形	38 × 41			
P_{11}	楕円形	33 × 48		32	1個柱穴重複、廂柱
	楕円形	24 × 36			

第5号建物址（第11図、図版第3）

検出状況　第4号建物址の精査に伴い南側に建物が重複することが判明した。しかし、A～E－6～11グリッドの広範囲に亘る規模の大きな建物址で、多くの遺構と重複し、南側1/3を調査区外に位置することより全容を把握することはできなかった。

遺構の構造　南側1/3を調査区外に位置するために規模を把握することはできなかったが、検出された柱穴配列より考えると、東西南北辺に廂をもつ、桁行6間、梁行4間の総柱大形建物址が想定でき、検出された建物址中で最も大形である。

棟方向はN－85°－Wを測る。桁行の柱間は北辺で1.43mの差があり、P_{13}－P_{14}－P_{15}間は他の部分より桁行が短い。梁行の柱間は西辺で63cmの差があり、P_{19}～P_{25}～P_{27}～P_{31}に囲まれた範囲

はP_9～P_{15}～P_{19}～P_{25}の範囲約1.4倍あり、建物の間取りを考える上で興味深い。廂は桁行北辺より全長で1.05m長い。北辺桁行柱と廂柱、東辺梁行柱と廂柱の配列はほぼ一致するが、西辺梁行柱の配列にはズレがあり、特にP_8－P_{18}－P_{33}間は廂の柱間が長い。この在り方は入口部と関連するものであろうか。

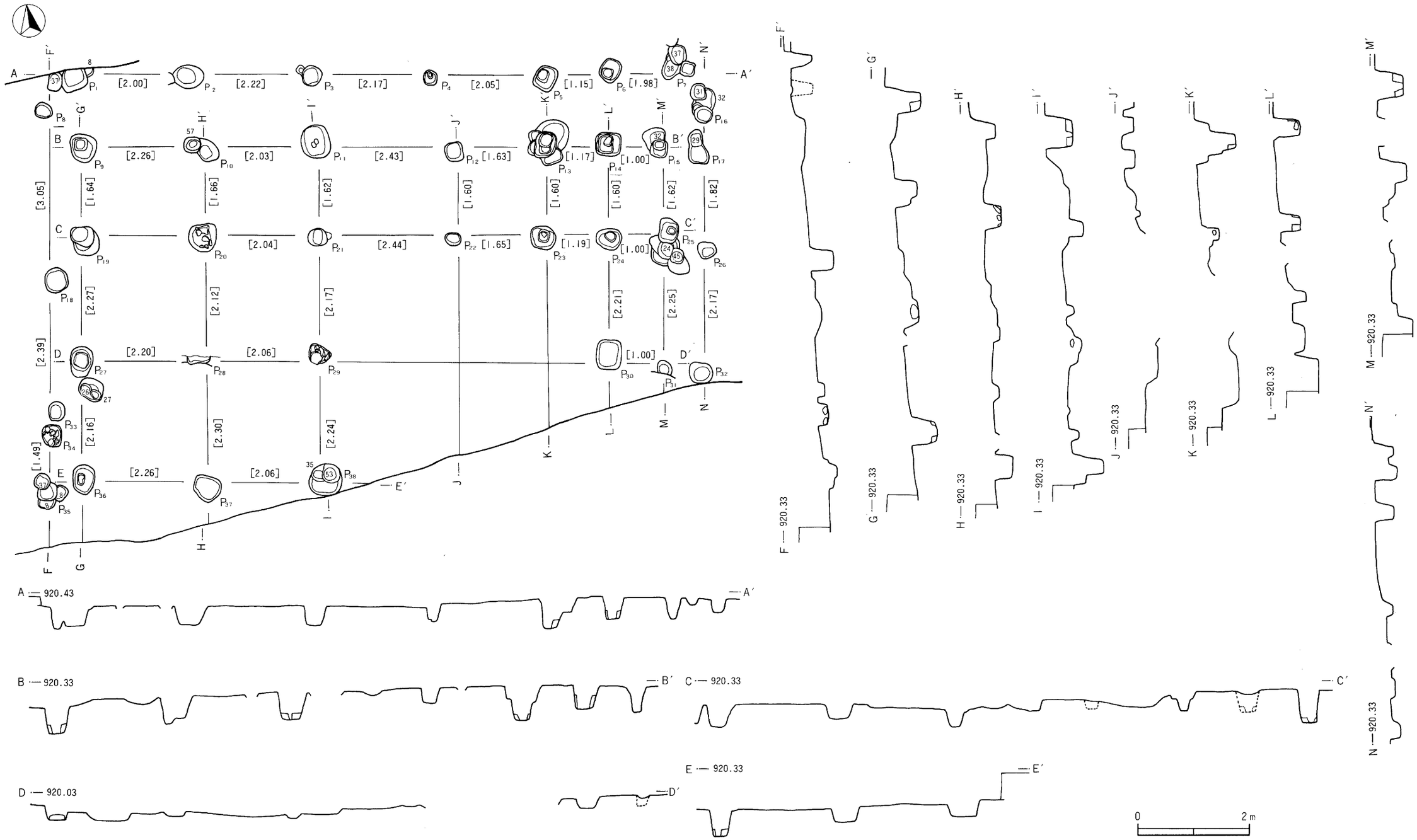
柱穴は38本が検出されている。粘土・ロームブロックを用いた根固めがなされる柱穴は11本（P_5・P_6・P_9・P_{11}・P_{13}・P_{14}・P_{15}・P_{23}・P_{24}・P_{25}・P_{36}）、石による根固めをもつ柱穴は3（P_{20}・P_{30}・P_{34}）、根石が埋設される柱穴2（P_{27}・P_{29}）がある。根固めがなされる柱穴は北辺に、根石をもつ柱穴は南辺に偏在する傾向が看取できた。平面プランは不整方形、方形が主体を占めた。深さは8～65cmとばらつきが見られるが、地形の傾斜に沿って浅くなる傾向がみられ、各々が50cm前後の深さをもっていたと思われる。柱痕が認められた柱穴は10ヶ所あり径20cm前後の柱痕が検出されている。

本址はその構造等より、大形の建物址で主屋としての性格を有するものである。

遺物の出土状況　本址の柱穴4ヶ所より内耳土器片、かわらけ、灰釉陶器、常滑系甕片が出土している。特にP_{30}に根固め石の代用として常滑系甕片（第25図1）が用いられていた。これらの出土遺物より本址は中世中頃に帰属するものであろう。

第5表　第5号建物址柱穴一覧表

柱穴No.	平面形	上下	規模（cm）	上下	柱痕(cm)	深さ（cm）	備考
P_1	不整方形		41 × 49			33	2個柱穴重複、廂柱
	不整方形		30 × 35				
P_2	不整楕円形		42 × 56			30	4個柱穴重複、廂柱
	楕円形		26 × 32				
P_3	不整円形		32 × 37			33	廂柱
	不整円形		26 × 27				
P_4	方形		28 × 26			32	廂柱
	方形		17 × 18				
P_5	方形		39 × 45		19 × 21	51	1個柱穴重複、根がため、廂柱
	方形		30 × 35				
P_6	方形		37 × 42		18 × 20	37	根がため、建物址4 P_5重複、廂柱
	方形		30 × 36				
P_7	方形		25 × 25			30	3個柱穴重複、廂柱
	方形		16 × 19				
P_8	不整楕円形		28 × 32			34	廂柱
	不整楕円形		19 × 27				
P_9	不整方形		48 × 50		22 × 23	65	溝7重複、根がため
	不整方形		37 × 34				
P_{10}	不整楕円形		35 × 48			42	1個柱穴重複、内耳土器片
	不整楕円形		20 × 25				
P_{11}	方形		53 × 60		10 × 10	50	根がため
	方形		35 × 51				
P_{12}	方形		33 × 35			30	
	方形		24 × 28				
P_{13}							建物址4柱穴P_9と重複
P_{14}	方形		44 × 47		27 × 34	44	根がため、根石
	方形		33 × 39				
P_{15}	方形		31 × 31		19 × 22	48	1個柱穴重複、根がため
	方形		24 × 23				
P_{16}	不整方形		29 × 32			43	2個柱穴重複、廂柱
	不整方形		19 × 23				
P_{17}	不整楕円形		37 × 57			32	重複、廂柱
	不整円形		28 × 30				



第11図　第５号建物址（1/80）

柱穴No.	平面形	上下	規模(cm)	上下	柱痕(cm)	深さ(cm)	備考
P18	不整円形		42 × 45			45	廂柱
	不整円形		33 × 36				
P19	不整方形		38 × 42			42	1個柱穴重複
	不整方形		25 × 28				
P20	不整円形		49 × 50			38	根がため石
	不整方形		37 × 32				
P21	方形		30 × 35			26	土壙4重複
	方形		27 × 17				
P22	不整楕円形		23 × 48			12	暗渠1重複、硯片
	不整楕円形		15 × 23				
P23	不整方形		42 × 48		20 × 20	34	暗渠1重複、内耳土器片、かわらけ、常滑片、灰釉片
	不整方形		32 × 38				
P24	不整楕円形		40 × 47		17 × 20	36	根がため
	不整楕円形		28 × 37				
P25	方形		35 × 43		15 × 17	59	3個柱穴重複、根がため
	方形		29 × 30				
P26	不整方形		31 × 32			22	廂柱
	不整方形		15 × 21				
P27	不整長方形		41 × 55			30	溝4重複、根石
	円形		35 × 37				
P28	方形?					8	溝4重複
	方形?						
P29	不整方形		35 × 42			28	根石、根がため石
	不整方形		26 × 34				
P30	方形		45 × 54			22	溝3重複、根がため石、常滑片
	方形		33 × 44				
P31	不整円形		29 × 29			14	溝3重複
	円形		17 × 19				
P32	方形		37 × 42			13	廂柱
	方形		24 × 30				
P33	方形		30 × 33			10	廂柱
	方形		19 × 25				
P34	方形		35 × 40			18	廂柱、根がため石
	方形		28 × 34				
P35	方形		33 × 35			18	3個柱穴重複、廂柱
	方形		24 × 24				
P36	不整方形		39 × 51		14 × 21	27	根がため
	不整方形		31 × 39				
P37	不整方形		47 × 50			27	内耳土器片
	不整方形		33 × 41				
P38	方形		57 × 59			19	2個柱穴重複
	方形		43 × 46				

第6号建物址（第12図、図版第3）

検出状況　C－8、D－8グリッド周辺より径20cm、深さ25～15cm前後のピット群が集中し検出された。この中より一間間隔に並ぶ部分が検出され、本址の存在が明確となった。建物址第5号と重複する。

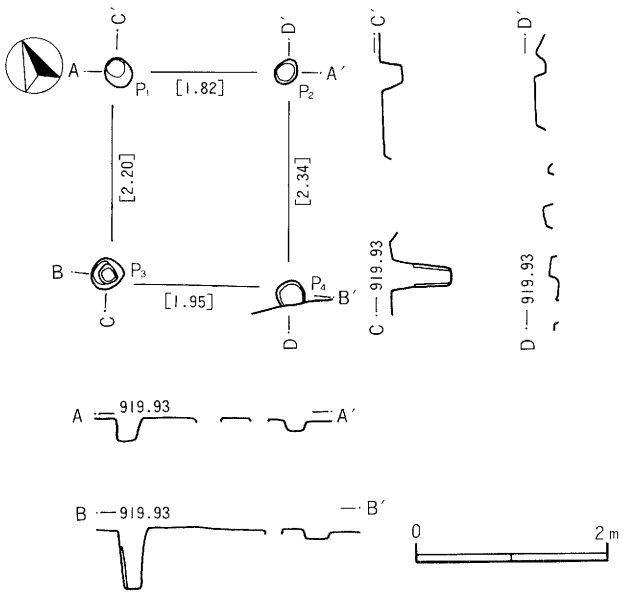
遺構の構造　建物址の規模は1間×1間の小規模な側柱建物である。P_1（P_2）、P_3（P_4）方向が、P_1（P_2）、P_2（P_4）方向よりも39cm長く、この方向が桁行と思われ、棟方向はN－20°－Eである。

柱間は梁行で13cm、桁行では14cmの差があり南西方向がやや張り出す。規模は桁行2.27m、梁行1.88m、面積約4.27m²である。

柱穴は不整円形のプランを呈し、径22～31cmの小形のものである。深さはバラつきが見られ、P_3は特に63cmと深い。P_3は18cm×18cmの柱痕が柱穴ほぼ中央より検出されている。柱脇には粘土・ロームブロックを用い根固めが行なわれていた。

建物址の規模、柱穴の深さにばらつきが見られる点などより簡単な構造の建物が想定でき得る。

遺物の出土状況　本址に直接関わるような遺物の出土はない。



第12図　第6号建物址（1/80）

第6表　第6号建物址柱穴一覧表

柱穴No.	平面形	上下	規模（cm）	上下	柱痕(cm)	深さ（cm）	備考
P1	不整円形		28 × 31			24	
	不整円形		18 × 18				
P2	不整楕円形		22 × 29			12	
	不整円形		21 × 18				
P3	不整円形		32 × 34		18 × 18	63	根がため、木柱
	方形		18 × 18				
P4	円形		29 × 30			7	
	円形		24 × 24				

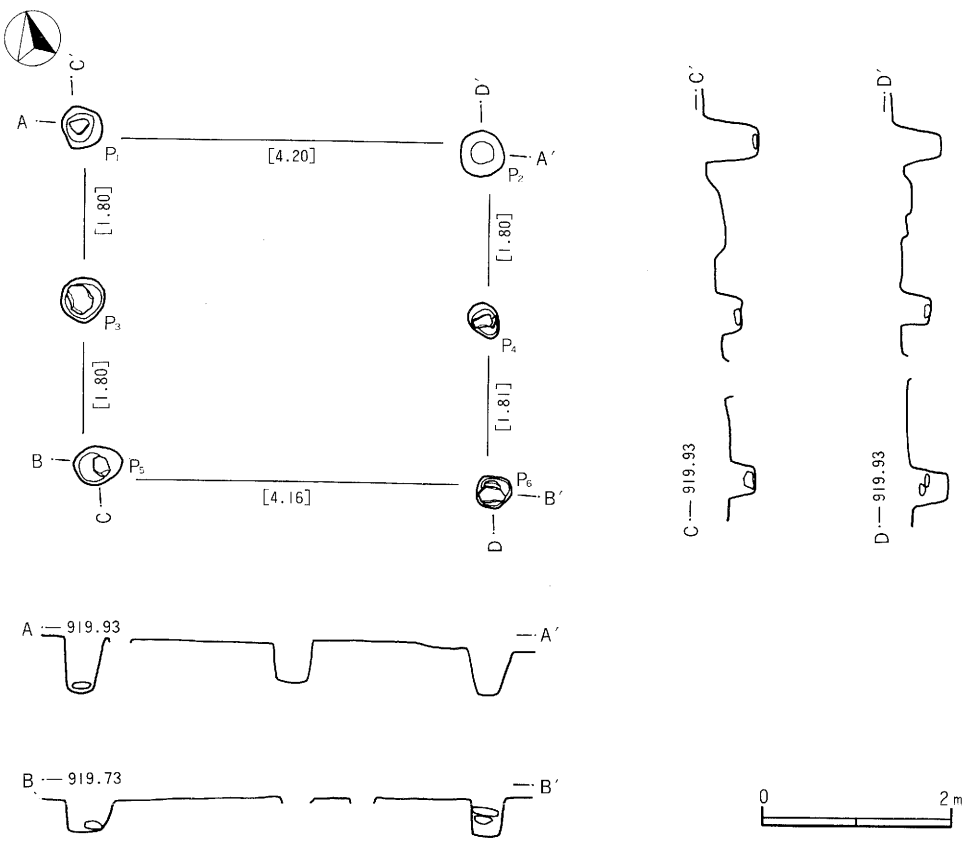
第7号建物址（第13図、図版第2）

検出状況　B－5、C－5，C－4グリッドより根石をもつ柱穴が検出され、これらが一定の間隔で配されていることより、周辺に建物址が存在することが判明した。北側を第4号溝址と、東側を第5号建物址を重複する。

遺構の構造　本址に関わる柱穴は6ヶ所で建物の全容を把握し得た。棟方向はN－80°－Wを示す。構造は桁行1間、梁行2間の側柱建物である。

桁行の柱間は南北辺で4cmの差でほぼ等間である。梁行の柱間は東辺で1cm、西辺で等間で誤差はほとんどなく、平面形はほとんど歪みがない。規模は桁行4.18m、梁行3.605m、面積約15.07㎡である。

柱穴は5本（P_1・P_3・P_4・P_5・P_6）に根石が埋設されており、安山岩の偏平な面を据えている。P_6の場合、柱の高さ調整のためか根石が2点用いられている。平面プランは不整円形が主体



第13図　第７号建物址（1/80）

を占め、規模も38～49cmとばらつきが少ない。深さは55～21cmと様々で、地形の傾斜に沿って浅くなる傾向が看取でき、基本的には各々50cm前後の深さをもっていたと思われる。柱痕は検出されていない。

柱構造もしっかりしており、柱間に歪みがないことなどより、本址はかなりしっかりした構造をもつ建物址であった可能性が強い。

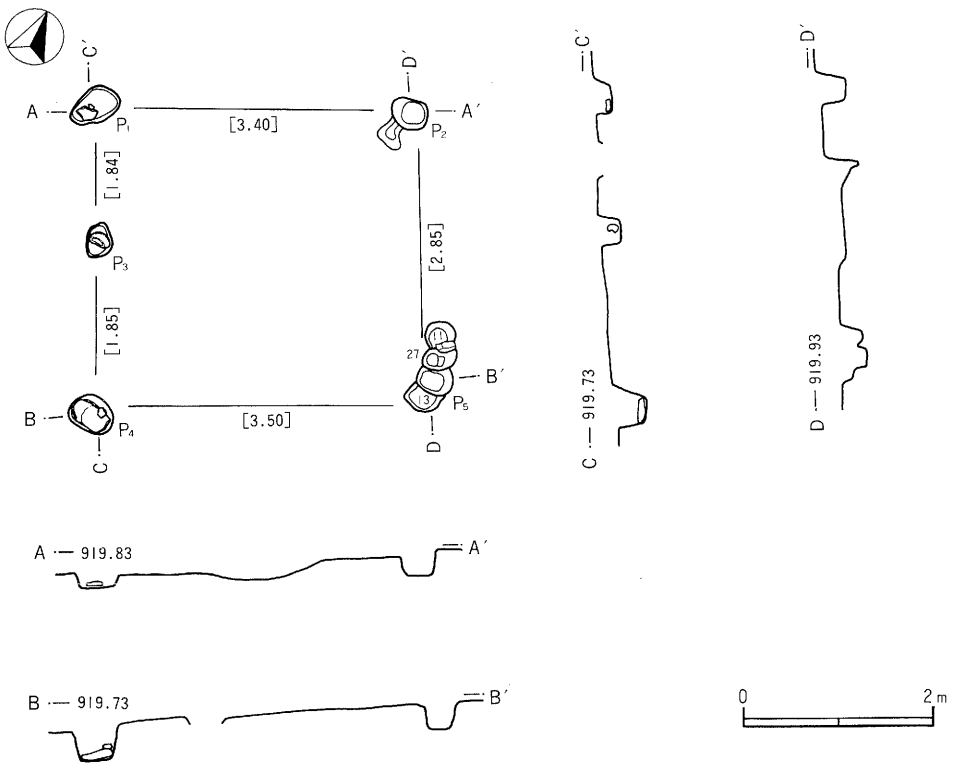
遺物の出土状況　P_2底面上24cmより、ガラス小玉、P_3より内耳土器片、P_5よりかわらけ、瀬戸・美濃系陶器片が出土しており、これらの出土遺物より本址は中世後半に帰属するものである。

第７表　第７号建物址柱穴一覧表

柱穴No.	平面形 上/下	規模(cm) 上/下	柱痕(cm)	深さ(cm)	備考
P_1	不整円形	42 × 43		55	根石
	不整円形	27 × 30			
P_2	円形	47 × 48		54	溝４重複、ガラス小玉
	円形	24 × 24			
P_3	不整円形	45 × 47		21	根石、内耳土器片
	不整円形	34 × 36			
P_4	不整楕円形	30 × 41		28	溝５重複、根石
	不整楕円形	23 × 29			

柱穴 No.	平面形	上下	規模 (cm)	上下	柱痕(cm)	深さ (cm)	備考
P5	不整方形		39 × 49			29	根石、かわらけ、瀬戸・美濃系陶器片
	円形		28 × 30				
P6	不整方形		33 × 38			42	根石
	不整方形		29 × 30				

第8号建物址（第14図、図版第2）



第14図　第8号建物址（1/80）

検出状況　本址はB－2、C－2、C－3グリッドより根石をもつ柱穴が検出され、建物址の存在が明確となった。北側を第4号溝址と重複する。

遺構の構造　本址に関わる柱穴は5ヶ所検出された。東辺に柱穴があったと思われるが、第4号溝址と重複するために検出できなかったが、基本的には6本柱となろう。棟方向は、N－62°－Eを示す。構造は桁行1間、梁行2間の側柱建物で第7号建物址と同様である。

桁行の柱間は南北辺で10cmの差をもつ。梁行の柱間は西辺で1cmの差で、平面形はほとんど歪みがない。規模は桁行3.45m、梁行3.27m、面積11.28m²である。

西辺梁行側の柱穴3本（P_1・P_3・P_4）に根石が埋設されていた。P_1・P_4は偏平な安山岩が据えられ、P_3は大凹石を根石としていた。P_4の場合柱穴底面一杯に根石を据えていた。平面プラン

は不整円形が主体を占め、規模も54～57cmとある程度のバラつきがあるが、40cm前後のものが主体をなす。深さは13～28cmとなっているが、浅いものは検出面との関連から、基本的には28cm前後となろう。P_5は3個の柱穴と重複しており、建て替えが行なわれたと思われる。柱痕は検出されていない。

構造的にも第7号建物址と類似する部分が多く、同様な構造をもっていたものと類推でき得る。

遺物の出土状況　P_4内より内耳土器片と、内耳土器底部破片を再利用した土製方形板（第35図6）が出土している。これらより本址は中世に帰属する遺構であろう。

第8表　第8号建物址柱穴一覧表

柱穴No.	平面形	上下	規模（cm）	上下	柱痕(cm)	深さ（cm）	備考
P_1	不整楕円形		36 × 54			13	根石
	不整楕円形		29 × 44				
P_2	不整方形		31 × 39			28	
	方形		22 × 24				
P_3	不整楕円形		27 × 37			16	大凹石
	不整楕円形		19 × 31				
P_4	楕円形		38 × 49			27	根石、内耳土器片、土製方形板
	楕円形		21 × 30				
P_5	不整方形		34 × 39			28	3個柱穴重複
	方形		19 × 24				

2．竪穴状遺構

竪穴状遺構は1基検出されている。

第1号竪穴状遺構（第15図、図版第2）

検出状況　本址は調査区の西側隅C－100～2・D－100～2グリッドにかけて長方形の落ち込みが検出されその存在が明確となった。調査当初は平面プラン等より竪穴住居址を想定したが、炉・カマド等が検出されなかったことなどより竪穴状遺構として本址を取り扱った。

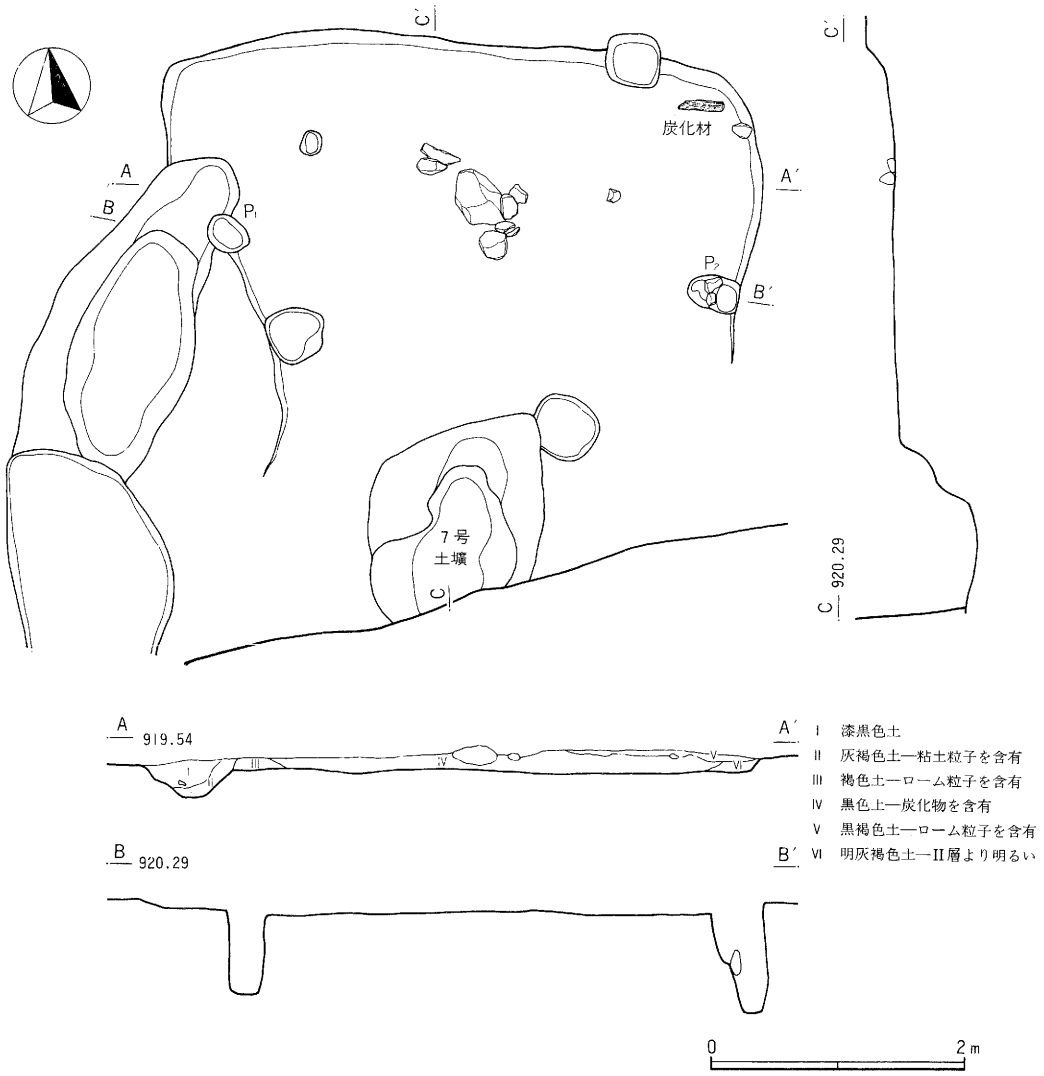
遺構の構造　本址は西側を溝状の大きな掘り込みに攪乱され、南側は斜面状のため壁が流出しており、平面プランの全容を把握することはできなかった。しかし、短辺に検出された柱穴（P_1・P_2）を棟持ち柱用のものとすると、長辺4.74m、短辺3.6mの、各コーナがやや張り出す隅丸長方形を呈するプランが想定でき、面積17.06㎡を測る。長軸方向は、N－82°－Wをさす。

覆土は3層からなる。Ⅳ層中床上4cmの部分に大小の礫8個がかたまって検出され、また、北東コーナ部床上7cmに長さ35cmの炭化材が検出されており、これらの状況より考えると、本址は人為的に埋められた可能性がある。

壁の立ち上がりは北側で14cmを測る。これが南側になるにつれ流出し不明瞭となる。

床面は地山のローム面を利用している。北東隅を除き全体的に軟弱な傾向を示し、若干だが凹凸の見られる部分もある。

柱穴は短辺のほぼ中央と思われる位置に2ヶ所と、柱穴状ピットが3ヶ所の計5ヶ所が検出された。直接本址に関わる柱穴は、その配置より考えて、P_1・P_2の2ヶ所である。P_1・P_2共に平面プランは不整楕円形を呈する。P_2は立て替えによると思われる重複をもち、根詰め用の石2点



第15図　第１号竪穴状遺構（1/60）

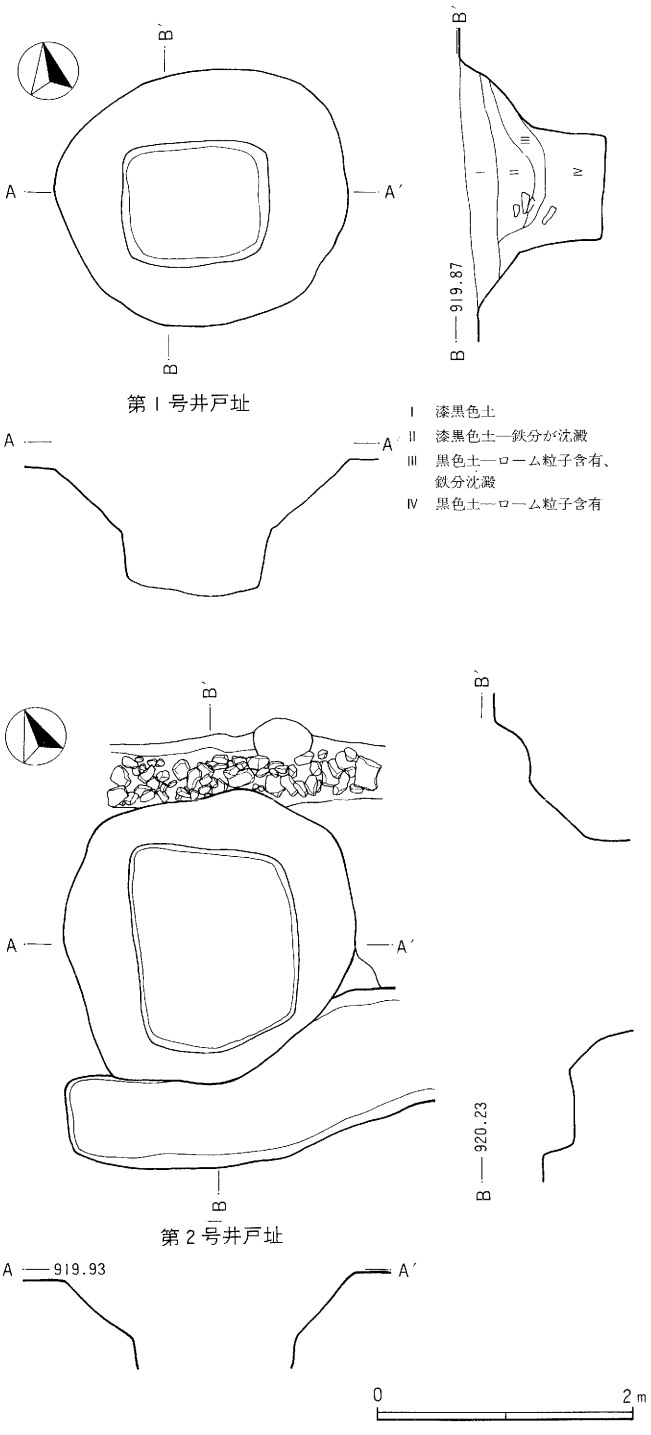
が検出された。P_1・P_2はその位置関係から棟持ち柱に関わる柱穴と考えられ、竪穴が上部構造をもっていたことが窺える。棟持ち柱用の柱穴しか検出されなかった点などを考えると、本址の上部構造は簡単なものであった可能性が高い。

遺物の出土状況　本址より検出された遺物は少量で、北東コーナ付近より内耳土器片が４、P_2内よりかわらけ片１が出土している。

これらの遺物より本址は中世に属するものとして捉えることができよう。

３．井戸址

井戸址は２基検出された。井戸址は建物址周辺に集中しており、建物址との関連の基に構築されたと思われるが、第２号井戸址の場合、建物址群よりも新しいものであり、これに溝址が伴う



第16図　第１号・２号井戸址（1/60）

ような形で構築されている。

構造は素掘りの掘り抜き井戸であり、井側に木組や石組などは認められず、また、覆屋等に関わる柱穴も検出されていない。平面形態は不整円形を呈し、断面形は底面から中程までが直に立ち上がり、開口部は漏斗状に開くものである。深さは割合浅目で地山層下約120cmで湧水がみられた。

井戸は、全て埋め戻された状態の層序を示し、特に第２号井戸址の場合内部に多量の礫や石臼破片が投げ込まれていた。

時期は内部より出土した遺物より中世・近世に廃絶されたことが窺える。

第１号井戸址

（第16図、図版第４）

検出状況　本址はＣ－12・13グリッドに位置する。遺構確認作業の段階に於いては土壙とされていたが、遺構の精査に伴い他の土壙と規模、構造に相違が見られ、また下部より水が湧き出したことなどより本址が井戸址であることが明確となった。

遺構の構造　掘り方上面は東西方向がやや拡がる不整円形を呈し、径20.4×25.1cmを測る。掘り方の深さは49cmを測る。断面は内彎気味に拡がる漏斗状を呈する。井戸本体の平面プラン

は短軸0.99×長軸1.19mの隅丸長方形を呈する。

掘り込みは直に近く、75cmを測る。底面は平坦で、この面より20cm上まで水が溜まった。

井側部の掘り方も割合丹念であったが木組や石組等はなされておらず、素掘りの掘り抜き井戸である。深さは1.24mと割合浅目のものである。

覆屋等に関わる柱穴は明確にならなかったが、周辺に深さ30cm前後の柱穴が南北方向に検出されている。

覆土は4層に分層でき、土層の観察より、本址は埋め戻されたものと考えられる。

遺物の出土状況　第Ⅰ・Ⅱ層内よりかわらけ片2（第21図1・6）灰釉陶器（平安時代）1が出土しており、本址は中世に属し埋め戻しも中世に行われたと考えられる。

第2井戸址（第16図、図版第4）

検出状況　本址はC－10・D－10グリッドに漆黒色土の落ち込みが検出され、その存在が明確となった。本址も第1号井戸址同様に遺構確認作業の段階に於いてその性格が判明せず、遺構精査に伴い井戸址であることが確認できた。

遺構の構造　掘り方の上面プランは南側が不整形となり、北東、北西隅にコーナをもつ不整方形を呈し、径2.31×2.21mを測る。これは第1号井戸址よりやや大きい。

掘り方の深さは53cmを測り、断面は内彎気味に拡がる漏斗状を呈する。井戸本体の平面プランは短軸1.33×長軸1.64mの不整隅丸長方形を呈する。

井側は直に掘られており、木組、石組などはなされておらず、素掘りの掘り抜き井戸である。湧水と覆土中に投げ込まれた多量の礫のために完掘できず、底面、深さの確認はできなかった。水の湧水面は、本址確認面下70cmであり、第1号井戸址より浅い位置に於いて湧水が見られた。本址は北側を第1号暗渠址と、南側を第3号溝址と重複している。調査の結果暗渠址は井戸址よりも新しいことが確認されたが、第3号溝址については、重複関係を明確にすることはできなかった。

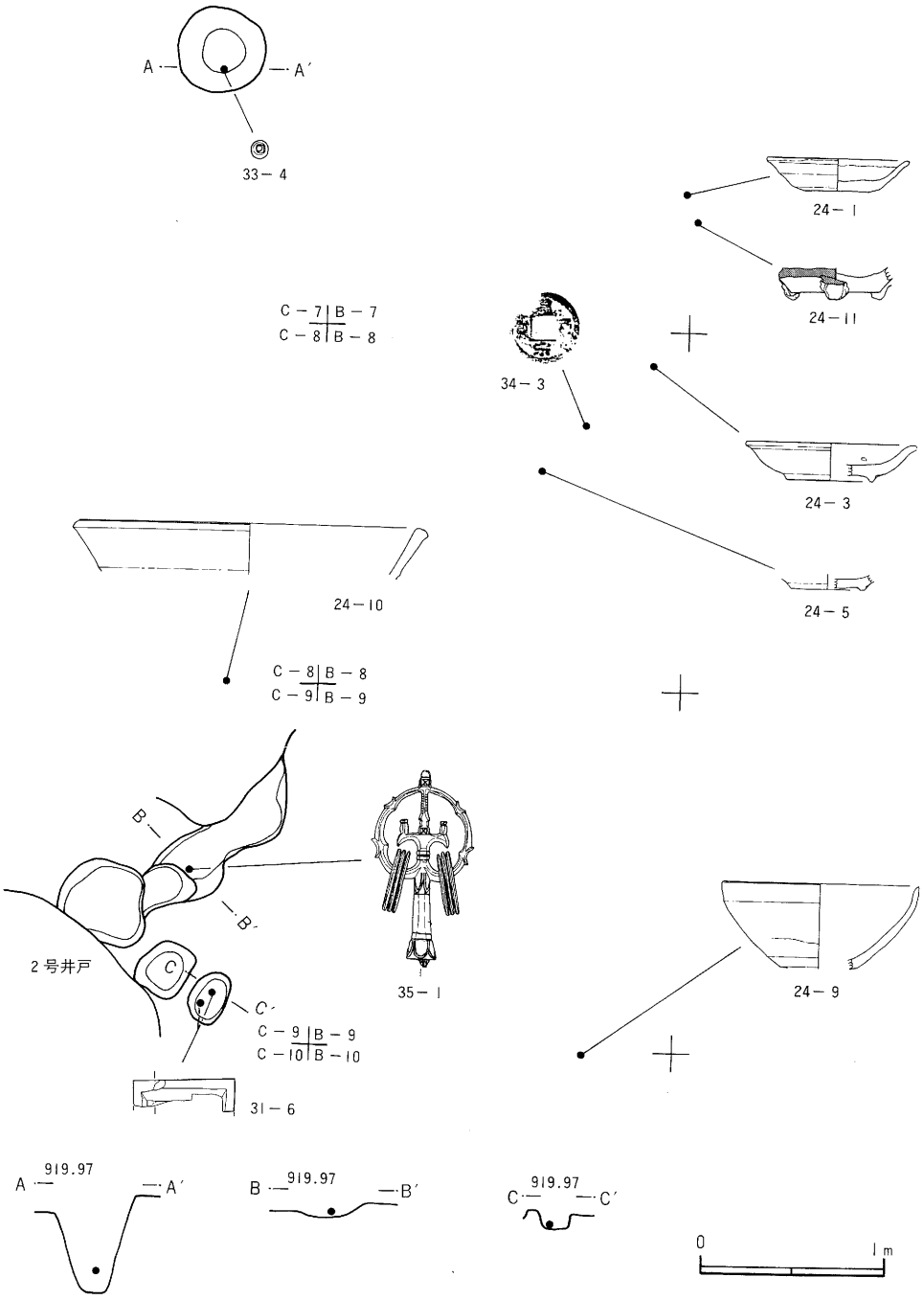
覆土は上層から礫が投げ込まれたような状態で多量に出土し、この中には石臼、石擂鉢片が含まれていた。下層にも礫が多量に投げ込まれていたが、上層のものと比較すると大きな礫が中心で、一抱もある礫が入っていた。

遺物の出土状況　覆土中より礫と一緒に石臼、石擂鉢片や内耳土器片、青磁片（第23図3）、常滑系甕片が出土している。また、近世染付磁器が1点混在する形で出土している。

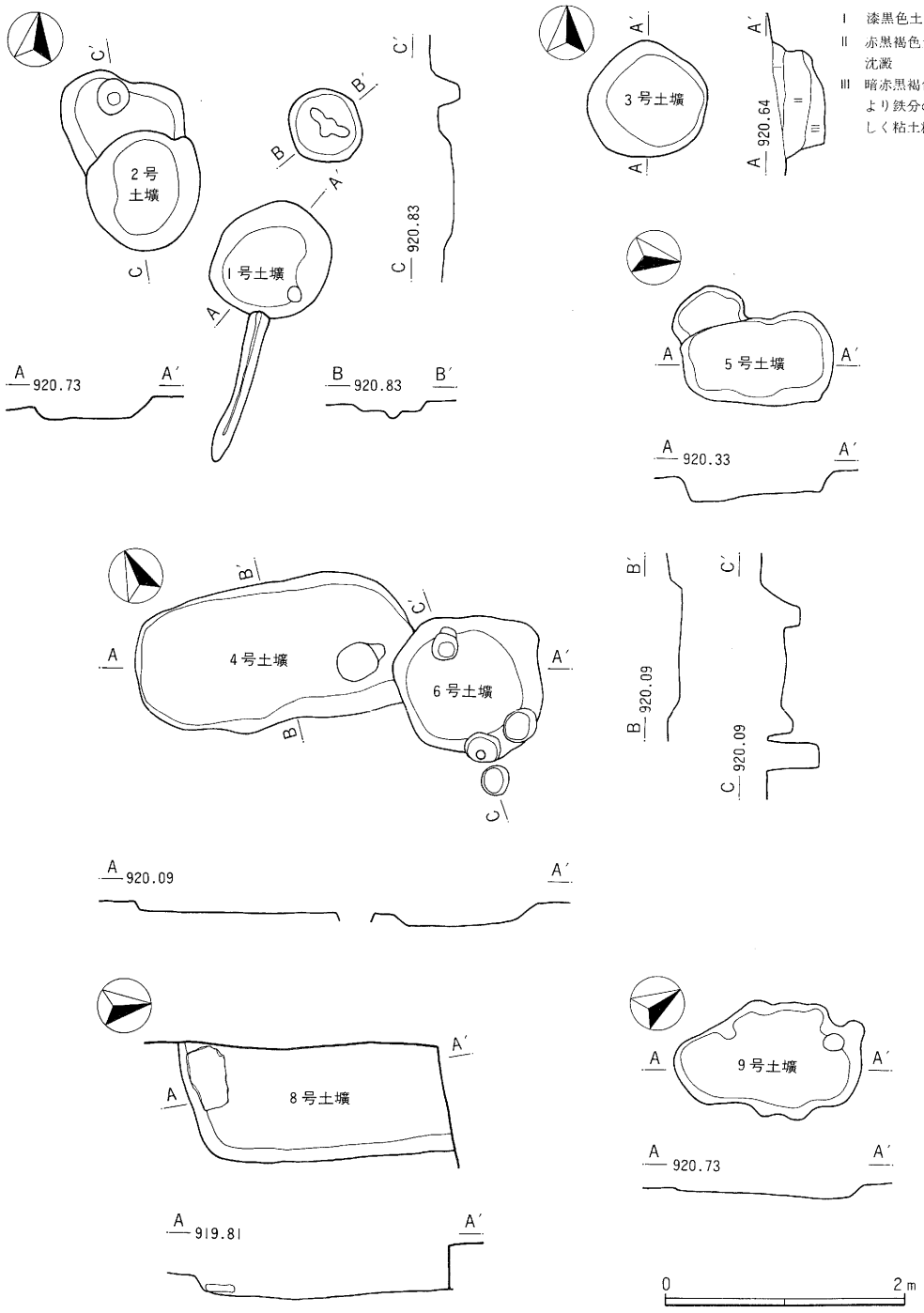
直接本址に関連があるかは不明ではあるが、第17図に示すように、本址北西脇の不整形の浅い溝状遺構より錫杖（第35図1）が出土している。

4．土　壙（第18図、図版第2）

土壙は9基が検出された。これら土壙の平面形態は円形(不整円形を含む)、楕円形、隅丸方形が認められ、特に不整楕円形、隅丸長方形のものが主体を占める。規模も直径80cm～2mまでばらつきのあるものである。特に第4号土壙は規模が大きなものである。深さも総じて浅く、立ち上



第17図　B－9・C－9グリット周辺の遺物出土状況（1/40）



第18図　第1号～6号・8号・9号土壙（1/60）

がりが不明瞭なものが主体を占めた。

伴出遺物が全く見られないものがほとんどで、個々の明確な所属時期については判然としないものが多い。しかし、他の遺構との重複関係等よりある程度時期が明確となったものもある。第4号・第6号土壙などは第5号建物址との関連や出土遺物より中世後半に属すると思われる。

土壙の分布は大きく分け3群より構成される。調査区東側の建物址と重複しない部分に占地する一群（第1～3・5・9号土壙）、第5号建物址と重複する一群（第4・6号土壙）、調査区西側に散在する一群（第7・8号土壙）がある。これらの土壙が建物址や溝址とどのような関連をもっていたかは土壙の時期が不確定なこともあり明確にはならないが、何らかの形で関連が有るものと思われる。第8号土壙の場合，第4号溝址の末端が土壙内に注ぎ込む形をとっていることも示唆的である。

発見された各土壙の諸属性については第9表のとおりである。

第9表　中世・近世土壙一覧表

土壙No.	調査区	形態 上面	形態 底面	規模 上面(m)	規模 底面(m)	深さ(m)	備考
1	C－18	不整円形	不整円形	0.96×1.09	0.66×0.76	0.08	
2	C－18	不整円形	不整楕円形	0.98×1.02	0.53×0.8	0.19	
3	C－16	不整円形	隅丸方形	0.96×0.97	0.71×0.77	0.42	人為的堆積
4	B－8	隅丸長方形	隅丸長方形	1.23×2.34	1.03×2.26	0.08	内耳土器片・灰釉陶器
5	C－13	不整隅丸長方形	隅丸長方形	0.78×1.28	0.63×1.08	0.21	
6	C－9	不整円形	円形	1.21×1.20	0.83×0.88	0.11	内耳土器片
7	E－1	不整楕円形	不整楕円形	1.13×——	0.58×——	0.57	
8	A－100	隅丸長方形	隅丸長方形			0.18	近代染付磁器
9	C－15	不整楕円形	不整楕円形	0.88×1.59	0.83×1.41	0.12	

5．溝　址

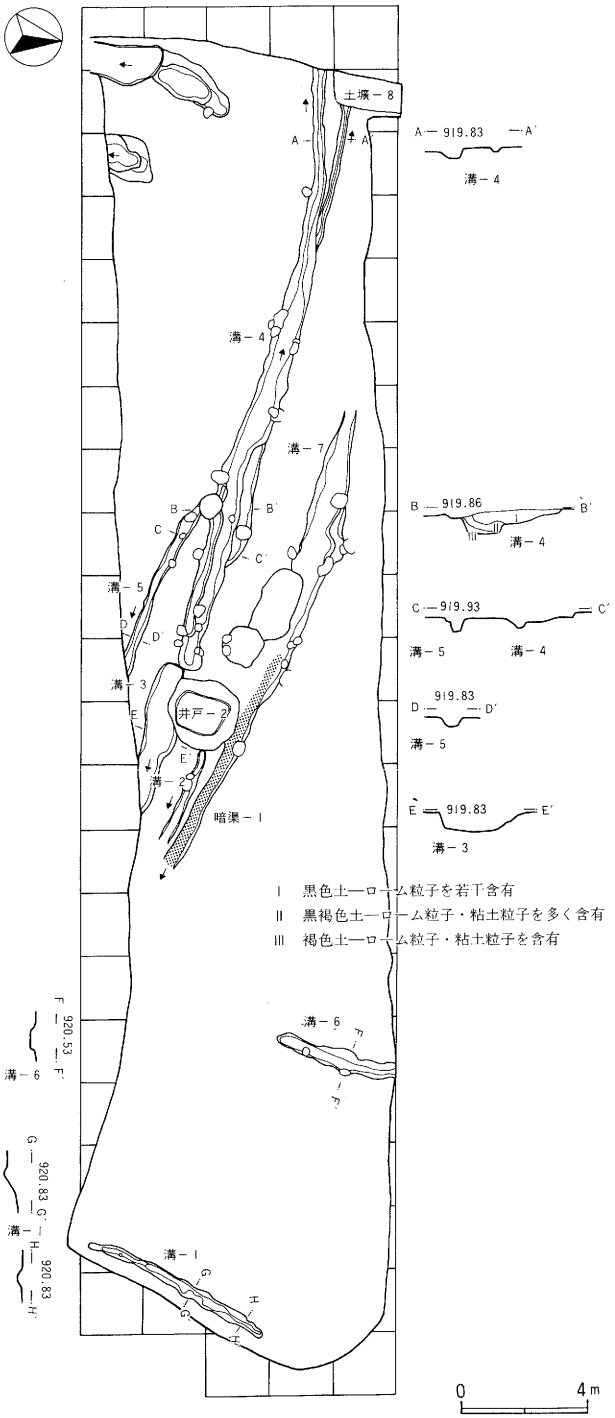
今回の調査により7条の溝址が検出された。全体的に幅の狭いものが多く、浅い掘り方をもつ。

溝址の分布は調査区の東西方向に縦走するものと、これに直行する形のものがある。北東から北西へ向かうものが2（第1・6号溝址）、西から東へ向かうものが3（第2・3・5号溝址）、東から西へ向かうものが1（第4号溝址）ある。これらの溝についてその土層より明確に流路と判明したものはなかったが、溝の傾斜等を考えると流路として用いられたものもあろう。また、区画を目的としたものもあると考えられる。

溝址内からは若干ではあるが遺物を出土している。それによると中世と近世に分けることが可能である。

第1号溝址（第19図、図版第2）

検出状況　C－19グリッドより等高線と直交する形で、南側に向かう溝が白山社に向かう農道に平行して検出され本址とした。



第19図　中世・近世の遺構
（溝址平面図1/240・溝エレベーション1/120）

遺構の構造　走向方向はN－23°－E、検出された全長6.24mで最大幅0.51m、深さ8cm、断面形はU字形を呈し、全体構造はしっかりとしていない。上端と下端のレベル差は32cmを測り、北より南側へ流路をもつ溝である。

遺物の出土状況　溝内より宋銭と思われる銭貨の小破片と、内耳土器片が出土している。

第2号溝址（第19図、図版第2）

検出状況　D－11グリッドを西より東に斜走する形で溝が検出された本址とした。

遺構の構造　走向方向はN－71°－W、検出された全長3.12mで、最大幅0.28m、深さ5cm、断面形は逆台形を呈し、上端と下端のレベル差は5cmを測り、流路は西より東側へゆるやかな傾斜をもつ。

遺物の出土状況　溝内より常滑系甕片（第26図12）が出土している。

第3号溝址（第19図、図版第4）

検出状況　C－10グリッドに検出された第2号井戸址の精査に伴いその存在が明確となった。

遺構の構造　走向方向はN－80°－W。検出されている部分の長さは4.66mで、最大幅1.02m、深さ25cmである。断面形は逆台形状を呈し、その掘り方はしっかりしている。上端と下端のレベル差は7cmを測り、

西から東へゆるやかな傾斜をもつ。本址北辺に重複する形で第２号井戸址が検出された。

遺物の出土状況　溝底部より近世擂鉢片（第28図１）、近世陶器片（第27図３）が出土しており、本址は近世に帰属する遺構と思われる。

第４号溝址（第19図、図版第２）

検出状況　Ｃ－７・８グリッドより西側へ走向する溝が検出され本址とした。

遺構の構造　走向方向はＮ－81°－Ｗ。検出された全長19.48ｍを測り、７条の溝の内最も長い。最大幅１ｍ、深さ33㎝、断面形は逆台形状を呈している。上端と下端のレベル差は、40㎝を測り、東より西へ流路をもつ。改修のためか溝に重複が見られる。また、Ｂ－２グリドで分岐し、一端は第８号土壙内に注ぐ形をとっている。

遺物の出土状況　本址よりかわらけ片、内耳土器片、美濃・瀬戸器片、近世染付磁器片が出土している。

第５号溝址（第19図、図版第２）

検出状況　Ｄ－７グリッドより溝が検出され本址とした。

遺構の構造　走向方向はＮ－83°－Ｗ。検出された全長5.76ｍ、幅0.33ｍ、深さ15㎝、断面形は逆台形状を呈している。西端が第４号溝址と重複をもつ。上端と下端のレベル差は12㎝を測り、西より東側へ流路をもつ。

遺物の出土状況　本址より近世染付磁器が出土している。

第６号溝址（第19図、図版第２）

検出状況　本址はＡ－15グリッドより溝が検出され、その存在が明確となった。溝の北端が調査区外となるために全容の把握には至ってはいない。

遺構の構造　走向方向Ｎ－17°－Ｅで第３号建物址とはぼ平行である。全体の平面プランは不整形で北端がやや彎曲する。検出された全長は3.94ｍ、幅0.66ｍ、深さ８㎝、断面形は逆台形状を呈し、上端と下端のレベル差は７㎝で、北より南側への流路をもつ。

遺物の検出状況　本址に関わる遺物の出土はない。

第７号溝址（第19図、図版第２）

検出状況　Ｂ－７グリッド周辺に溝が第１号暗渠址に続く形で検出され本址とした。

遺構の構造　走向方向はＮ－80°－Ｗで、東端で第１号暗渠址と重複する。第１号暗渠址は、本址の掘り方上に構築されており、本址は、暗渠址よりも古いものと思われる。全長は7.7ｍ、幅1.04ｍ、深さ23㎝、断面形は逆台形状を呈する。上・下端のレベル差ははとんどない。

遺物の出土状況　本址に直接関わるような遺物の出土は見られなかった。第１号暗渠址との重複関係より考えると、本址は近世以前に帰属するものであろう。

第10表　溝 址 一 覧 表

溝址No.	方　　向	全長（ｍ）	幅（ｍ）	深さ（㎝）	断 面 形	備　　考
1	Ｎ－23°－Ｅ	6.24	0.51	8	Ｕ字形	内耳土器片

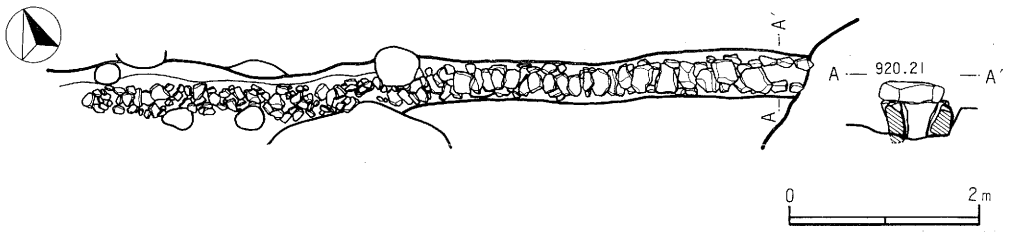
溝址No.	方　向	全長（m）	幅（m）	深さ（cm）	断面形	備　考
2	N－71°－W	3.12	0.28	5	台　形	常滑系甕片
3	N－80°－W	(4.66)	1.02	25	台　形	近世陶器片
4	N－81°－W	(19.48)	1.00	33	台　形	中世陶器片・近世磁器片・かわらけ片・内耳土器片
5	N－83°－W	(5.76)	0.33	15	台　形	近世磁器片
6	N－17°－E	(3.94)	0.66	8	台　形	
7	N－80°－W	7.70	1.04	23	台　形	

6．暗渠址

調査区を東西に縦走する形で暗渠址（所謂ガニ水道）が検出された。

第１号暗渠址（第20図、図版第４）

検出状況　Ｂ－９・Ｃ－10・11・Ｄ－11・12グリッドに東西方向へ縦走する帯状の集石が検出され、その存在が明確となった。調査当初は構造等が不明確だったために集石として取り扱ったが、その構築法が単なる集石ではなく、蓋石を有する暗渠址と判明したために、本址を暗渠址と改めた。



第20図　第１号暗渠址（平面図1/80・断面図1/40）

遺構の構造　暗渠址はＮ－71°－Ｗ方向に走り長さは7.6ｍを測る。これは現状の畑地割とほぼ平行である。流路方向は西より東に流れる。溝は幅41cm、深さ15cm、断面形が逆台形を呈する。溝の両側壁に沿い平偏な20cm前後の川原石を直立し並べ壁部を補強する。この上に平偏な30cm前後の川原石で蓋をし空洞部を作り出している。空洞部は約20cmの方形で、Ｃ－11・12グリッドの部分に於いては内部に土の堆積は見られず、空洞化していた。このような構造をとる個所は、Ｃ－11、Ｄ－11・12グリッドの部分である。他の部分では雑然と10cm前後の礫が帯状に集められているだけである。暗渠址には、小礫を含有する土が埋められていた。

遺物の出土状況　集石用礫として石擂鉢や常滑系甕片が用いられていたが、直接この暗渠址の時期を示すものではなく、むしろ暗渠址周辺にあったこれらの遺物を再利用したものと考えられる。この他に近世陶器甕片がＢ－９グリッドより出土しており、この遺物により本址は近世後半の遺構であると思われる。

第Ⅴ章　検出された遺物

第１節　中世以前の遺物

中世以前の遺物は平安時代土師器片、灰釉陶器片と、黒曜石剝片、砕片が出土している。これらは出土分布に一定の傾向がなく、出土層位も把握できず、中世以降の遺物と混然とした状態で出土している。

１．土師器

内面を黒色処理した土師器底部破片が１点出土している。高台を有していたと思われ、その剝落痕が認められる。色調は橙褐色を呈し、焼成は良好である。

２．灰釉陶器

８点が出土している。内訳は、口縁部２、体部下半５、底部１である。全て椀と思われ、１点は口縁が輪花状となる。これらの灰釉陶器は、胎土・焼成等より東濃産と思われ、平安時代末に属す。

３．黒曜石剝片・砕片

４点が出土している。混入物のない割合透明度の高い和田峠産の黒曜石である。

第２節　中世以降の遺物

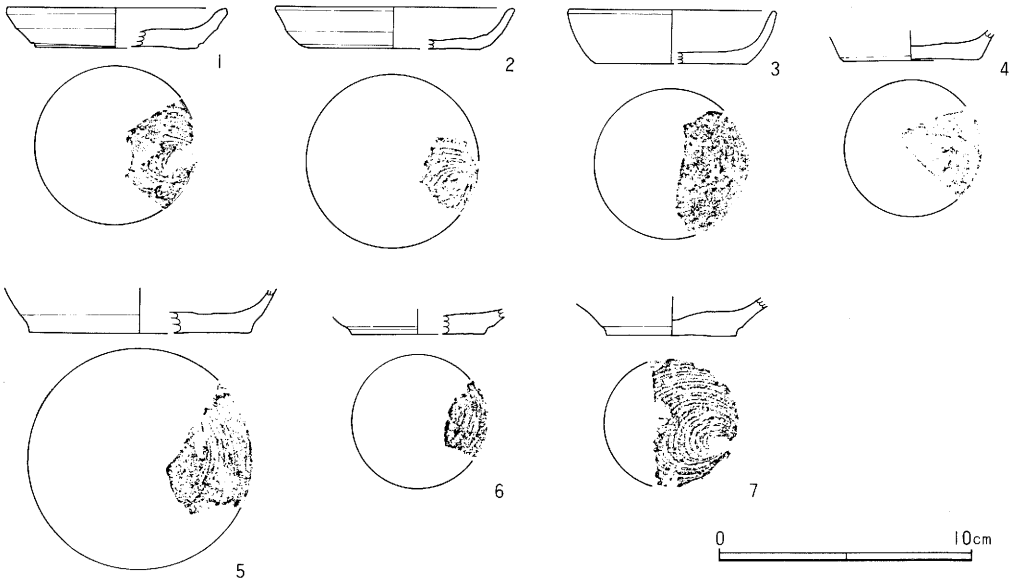
中世以降に属する遺物は陶磁器類、石製品、銭貨、金属製品、土製品が出土している。これらは、そのほとんどが遺構に伴わず、破片が主体を占めることもあり、所属時期を明確にすることに難をきたした。遺物はその属性により大別すると中世前半～中葉、中世後半～近世初頭、近世後半の遺物が含まれているようである。

１．中世の陶磁器類

中世の陶磁器類は土器質(かわらけ、内耳土器)、舶載磁器、国産陶器が出土している。全体の数量は162点で、主体をなすものは内耳土器で99点が出土している。

かわらけ（第21図、図版第５・６）

17点が出土している。内訳は、口縁部から底部３、口縁部５、体部片１、底部８である。全てロクロ成形で手捏ね成形によるものはない。この内図示できた資料は７点で、その内器形の全様が判明し得た資料は３点にすぎない。器形の判明した資料より考えると、体部が直線的に立ち上がるもの（１）と、やや内彎気味に立ち上がるもの（２・３）が認められ、前者の場合器壁が厚く後者の場合、器壁が薄い傾向を示した。この場合特徴的な器形を呈し、口唇部に面取りがなされたような強い稜を残し、口端が尖っている。内面整形は、内面外周見込み部にナデがほどこされているものだけである。底部処理は回転糸切りによる。３・４・５は糸切後故意にナデ整形を行



第21図　中世土器（かわらけ・1/3）

っている。所謂スノコ痕と思われる痕跡は観察できなかった。

胎土、焼成、色調は大別して2つのタイプに分けることができる。Aグループは色調が赤褐色を呈し、長石粒子、褐鉄鉱粒子を含有する（2～7）。Bグループは色調が乳白色を呈しAグループに比べ砂粒の含有が少ない（1）。

検出されたかわらけ内には油煙等の付着は見られなかった。

かわらけは調査内のある一定の範囲に散在する。遺構に関連したものでは第1号井戸址内より5点（1・6・7他破片2点）、第1号竪穴状遺構柱穴内より1点（2）、第5号建物址範囲内より8点、第7号建物址柱穴内より1点（3）が出土している。

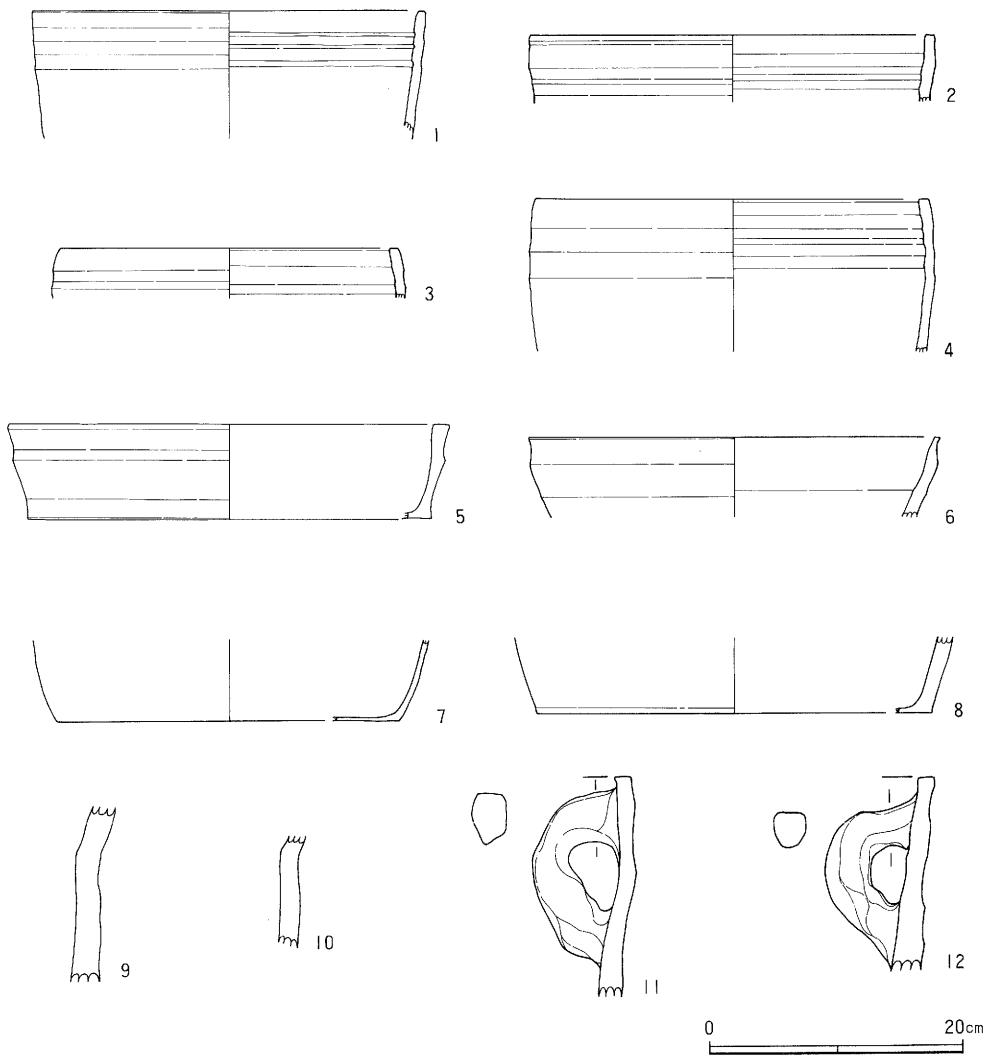
内耳土器（第22図、図版第5・6）

99点が出土している。これらは破片が主体で器形が判明したものはわずかで8点を図上復原できたに過ぎない。

大きな器形の差異は口縁部と、底部の立ち上がり、器高差などに見られた。

器高が高く口縁部が直線的に開くもの（1・2）、器高が高く口縁部がやや内彎気味となるもの（3・4）、器高が高く口縁部が外反するもの（6・9・10）、器高が低く口縁部が外反するもの（5）が認められた。底部形状にも底部際がやや張り出すもの（8）とそうでないもの（7）が認められたが、どのような口縁部形状を呈するかは不明である。

内外面の整形は口縁部に特徴的な痕跡が認められる。外面口縁部に3条程の横位ナデ整形を有するもの（2・4・6）、外面整形は横位ナデ整形、内面に数条の沈線が巡るもの（1）、外面に強い1条程の横位ナデ整形が行われるもの（5）がある。



第22図　中世土器（内耳土器・１～８は1/6・９～12は1/3）

胎土、焼成、色調は全て類似する傾向を示した。胎土中には白色細粒子、赤色細粒子を含有し、これらは粒ぞろいのものである。

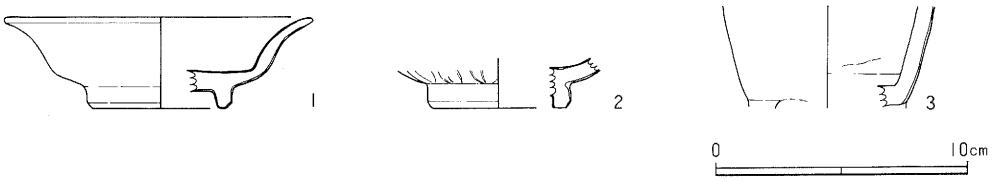
検出された内耳土器には、内外面に炭化物が付着している例が多く、この土器が日常具として頻繁に使用されていたことが窺える。

これらの内耳土器は口縁部等の状況より御社宮司遺跡第III・第IV期に属するものであり、15世紀～17世紀初頭の幅広い時期のものが含まれている。

出土分布の状況は中世陶器などと同様な傾向を示し、建物址が検出された範囲を中心に集中する傾向が看取できた。

舶載磁器（第23図、図版第５・６）

青磁が４点出土している。すべて龍泉窯系のもので、坏、碗、香炉？の器種が認められる。各々の特徴等より全て14世紀前半に属するものである。



第23図　中世舶載磁器（青磁坏・碗他・1/3）

坏：１は口縁部が大きく外反し、腰部で折れる器形を呈する。高台は断面が方形をなし、底面は、ヘラ削り調整がなされる。高台裏が露胎となる他は、内外共に施釉されている。釉色は淡青灰色を呈し、釉全面に大きな貫入と発胞が見られる。

碗：２は外面に蓮弁文様を削り出している。高台は断面が方形をなす。施釉は高台畳付、内外共になされており、高台脇が釉だまりとなる。釉色は緑青灰色を呈している。図示できなかったが大振りの碗の腰部破片が１点出土している。釉色は灰緑色を呈し、細かな貫入がみられる。

香炉：３は香炉の体部下半である。脚を有していたと思われ、その部分が剝落する。内面が露胎となる他は淡青緑色の釉が厚くかけられている。

舶載磁器は第５号建物址周辺に散在しており、建物址に関わる可能性が強い。

国産陶器（第24・25・26図、図版第５・６・７）

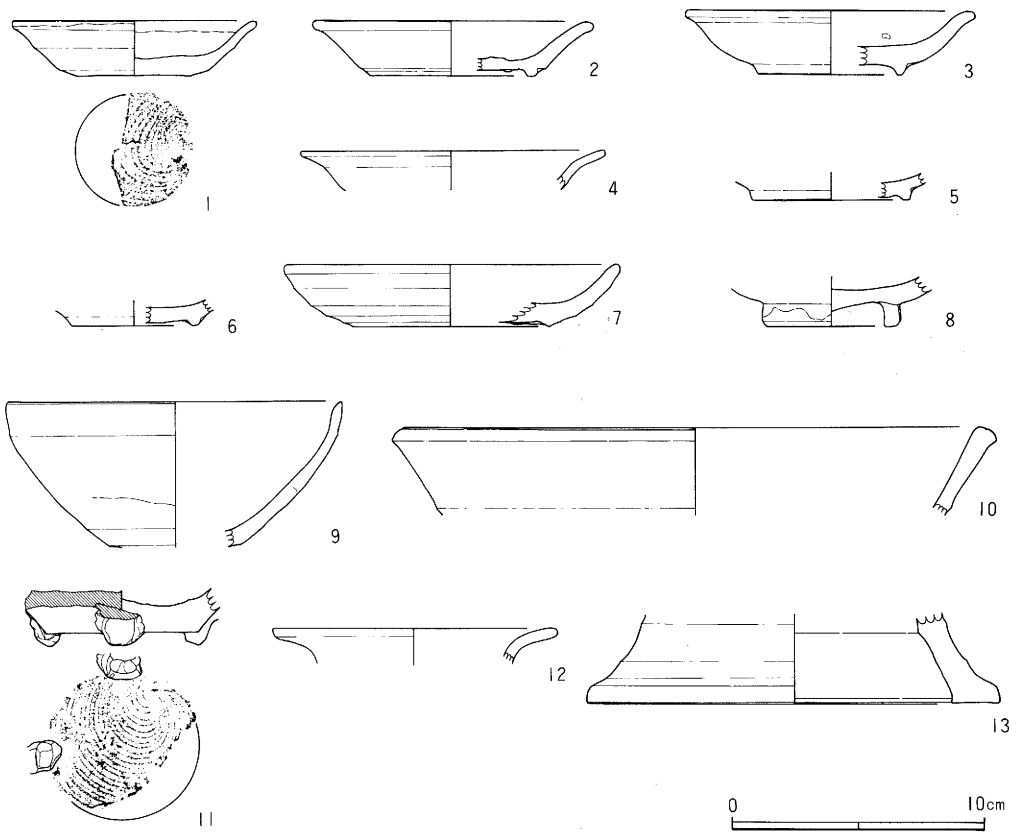
瀬戸・美濃系、常滑系の皿・椀・鉢・香炉，甕等の器種破片42点が認められ、釉も灰釉、長石釉、鉄釉があった。多くが細片で器形を復原することがむずかしく、14点が器形復原できたに過ぎない。

皿：大別して２タイプの器形が認められた。口縁部が外反するもの（１～４）、口縁部が内彎するもの（７）である。施釉状態が２種類みられ、１は所謂縁釉の小皿で、灰釉が施される。底部処理は回転糸切りによる。15世紀に比定されるものであろう。２～３、５・６・７は小さな削り出しによる高台を有し、全面に施釉されている。７の長石釉を除き全て灰釉が施されている。これらは16世紀後半のものであろう。

椀：灰釉と鉄釉の椀の破片が５点出土している。これらは１点を除き全てが鉄釉が施されている。９は天目茶椀である。割合大振りな器形をもち、黒茶の鉄釉が施釉される。体部下半は露胎となり、ヘラ削りの調整がなされている。瀬戸・美濃系の16世紀後半のものであろう。

鉢：捏鉢の口縁部と底部が１点ずつ出土している。10は捏鉢口縁部である。口縁部は断面が方形をなし、端部がやや張り，沈線を残している。胎土や調整等の様相より中津川系の捏鉢と思われ、14世紀に属するものであろう。

香炉：脚部を有する香炉底部が１点出土している（11）。底部処理は回転糸切りがなされ、三足



第24図　中世・近世の陶器（瀬戸・美濃皿他・1/3）

がつく。瀬戸・美濃系のものであろうか。

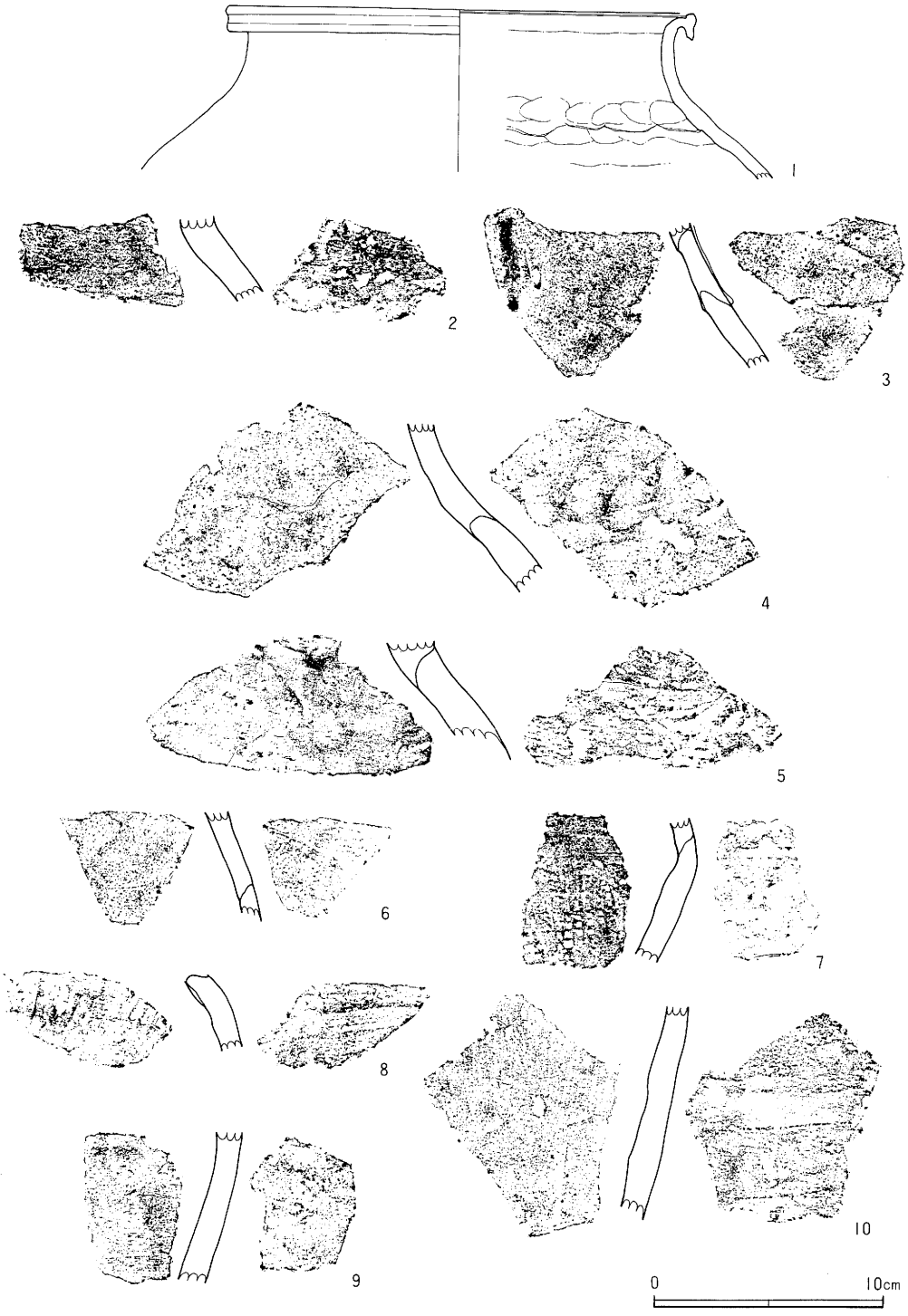
甕：全て常滑系の大甕片で12点出土しており、胎土、色調等より考えると6個体分の破片である。叩き目痕が2点認められる（7・10）。

1は口縁部である。口縁部が「N字形」の断面を呈する。4～8は肩部から胴部上半である。肩部が緩やかな傾斜をなし、胴部上半で最大の膨らみをもち、胴部下半へ折れる器形を呈する。9～12は胴部下半である。器形は直線的な立ち上がりをもつ。1・3・4は口縁内外面に緑黄色の自然釉が掛かり、2・9～12は光沢をもつ茶褐色を呈する。胎土中に石英・長石を多く含みざらつき、色調が茶褐色を呈するもの（1～4・6・7・9～12）と、白色細粒を含有するが割合ざらつきの少なく、色調が灰色を呈するもの（5・8）がある。焼成は両者共良好で、良く焼き締まっている。1は口縁部形状より13世紀後半～14世紀前半に属するものである。

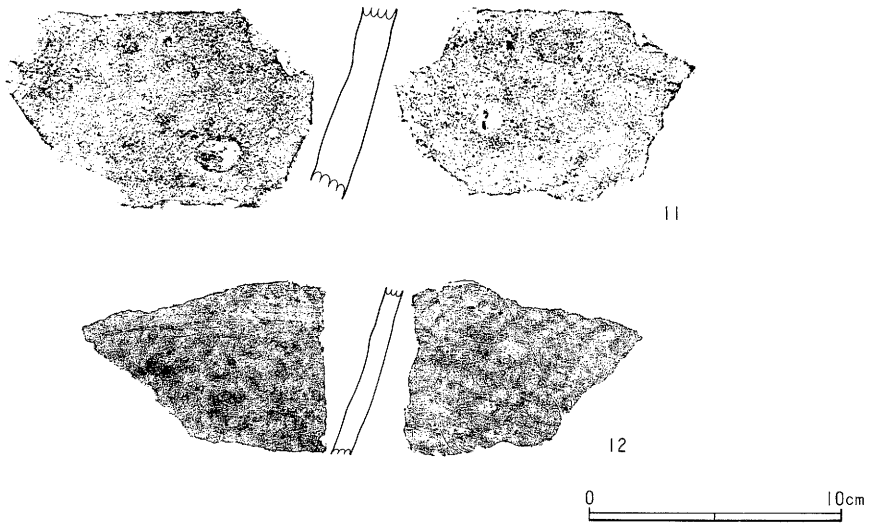
これら中世陶器の出土分布はB～D－6～10グリッドの範囲に集中する傾向が看取でき、この周辺に位置する建物址と関連をもつ可能性がある。

2．近世の陶磁器類

近世の陶磁器類は、染付磁器、陶器が27点出土している。細片が主体をなし器形を復原し得た資料はわずかである。



第25図　中世陶器（常滑系甕・１は1/6他は1/3）

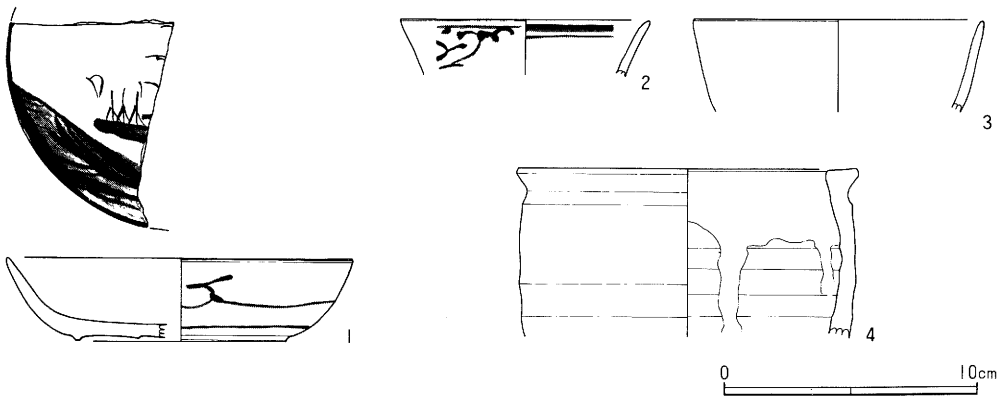


第26図　中世陶器（常滑系甕・11は1/3、12は1/6）

磁　器（第27図１・２、図版第８）

14点が出土している。内訳は口縁部から底部１、口縁部５、体部５、底部３である。細片が多いため器形を判断できた資料は少ないが、皿３、碗７、紅皿１が認められた。全て呉須による藍系統の染付がなされ、呉須発色には淡い青色、コバルトブルーに近いものが認められた。版型による摺込み等によるのもは見られない。

皿：３点が出土している。全て肥前系の製品であると思われる。１は口辺部が緩やかに内彎し、削り出しによる断面三角形の低い高台を有し、蛇ノ目高台となる。文様は口唇が錆となり、外面



第27図　近世陶磁器（1/3）

腰部に１条の圏線、唐草文を配す。内面には海辺文が配される。これらの磁器はその様相より18世紀後半に属するものであろう。

碗：７点が出土している。肥前系と瀬戸系の製品が認められる。器形の判明したものは１点だけである。２は口縁部が外反気味に大きく開く碗である。外面に唐草文、内面口縁部に２条の圏

線を配する。呉須発色等より肥前系磁器と思われる。

紅皿：型押しによる紅皿１点が出土している。型押しによる放射状沈線が外面に見られ、釉は白色釉が施されている。

これらの染付磁器は第２号井戸址、第３号・５号溝址、第１号暗渠址に伴う形で出土している。

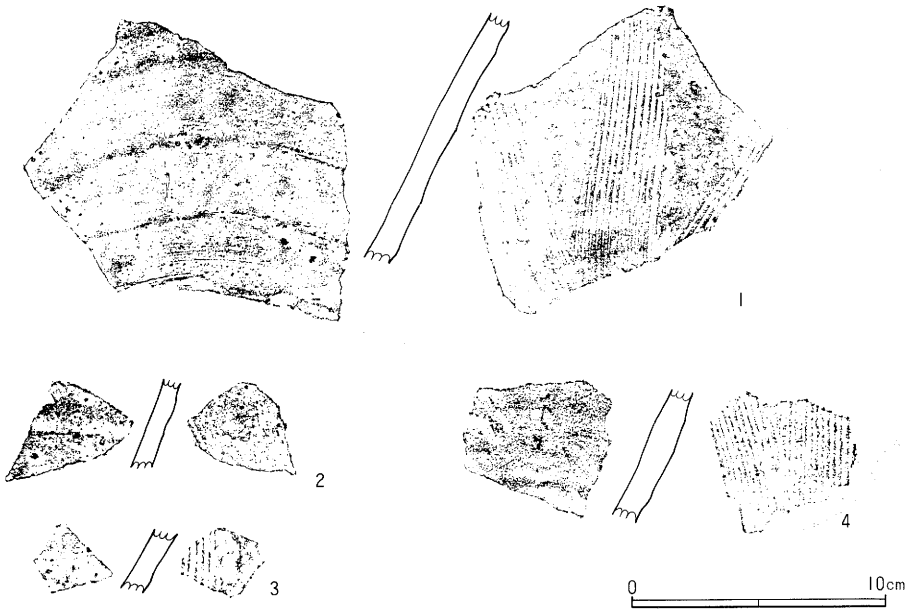
陶　器（第27図３－４・第28図１～４）

12点が出土している。埦、甕、擂鉢の器種が確認されている。

埦：６点が出土している、器形復原の可能だったものは１点のみで、他は細片が主体で器形の全様を把握することはできなかった。３は大振りの埦である。内外面に灰釉が施される。

甕：４の小形甕１点が出土している。外面と内面口縁部に鉄釉が施される。内面にロクロ成形痕が残る。

擂鉢：４点が出土している。内外面に鉄釉が施される。内部の櫛目は広い間隔をもって施され、１の場合13条以上の歯をもつ櫛を用いる。頻繁に使用されたと思われ、櫛目が磨滅する部分も見られる。胎土・焼成・釉色等より全て美濃系の擂鉢であろう。



第28図　近世陶器（擂鉢・1/3）

これら近世陶器は第３号、４号溝址、第１号暗渠址に伴う形で出土しており、分布状態は散在的でなく、ある程度のまとまりをもち出土する傾向が見られた。また、第27図１のように埋め土内よりのものもある。

第11表　中世・近世陶磁器観察表

挿図番号	出土地点	種別器種	法量(cm) 口径	器高	底径	時期	生産地	器形	製作法	釉・絵付・文様	胎土・焼成	備考
第21図1	第1号井戸址	かわらけ	8.6	1.6	6.3			体部直線的に立ち上がり口唇部尖る	ロクロ成形 回転糸切り		乳白色・堅緻・若干雲母 焼成良好	¼残
2	第1号竪穴状 P_2内	かわらけ	9.6	1.6	6.8			体部が内弯気味立ち上がり口唇部がやや外反	ロクロ成形 回転糸切り		橙褐色・長石、褐鉄鉱粒子 焼成良好	¼残
3	第7号建物址 P_5内	かわらけ	8.2	2.1	6.0			体部が内弯気味立ち上がる	ロクロ成形 回転糸切り		赤褐色・長石、褐鉄鉱、雲母粒子・焼成良好	⅓残
4	第4号溝址 B－6	かわらけ	—	(1.2)	5.3			体部が直線的立ち上がる	ロクロ成形 糸切後ナデ		橙褐色・褐鉄鉱、白色岩石細粒子・粉状・焼成良好	底部¼残
5	B－8	かわらけ	—	(1.8)	8.7			底部際でやや屈曲、体部直線的立ち上がる	ロクロ成形 糸切後ナデ		暗茶褐色・褐鉄鉱、雲母細粒子・粉状・焼成良好	底部¼残
6	第1号井戸址	かわらけ	—	(1.0)	5.3			底部際でやや屈曲、体部直線的立ち上がる	ロクロ成形 回転糸切り		淡黄褐色・褐鉄鉱、雲母細粒子・焼成良好	底部¼残
7	B－13	かわらけ	—	(1.6)	5.2			底部際でやや屈曲、体部外反気味に開く	ロクロ成形 回転糸切り		淡黄褐色・白色岩石、褐鉄鉱細粒子・焼成良好	底部½残
第22図1	C－8	内耳土器	31.1	(10.1)	—			口縁が直線的に開く 口唇断面方形	外口縁3条横ナデ 内口縁3条横沈線		茶褐色・白色、褐鉄鉱細粒子 焼成良好	口縁部破片
2	C－7	内耳土器	32.1	(5.3)	—			口縁が直線的に開く 口唇断面方形	外口縁3条横ナデ 内口縁2条横ナデ		黄茶褐色・白色、褐鉄鉱細粒子、ややザラつく・焼成良好	口縁部破片
3	第5号建物址 P_{35}内	内耳土器	26.6	(4.0)	—			口縁が内弯 口唇断面方形	外口縁横ナデ 内口縁横ナデ		黄茶褐色・白色、褐鉄鉱細粒子・焼成良好	口縁部破片
4	B－8	内耳土器	31	(12.0)	—			口縁が内挙 口唇断面方形	外口縁3条横ナデ 内口縁3条横ナデ		茶褐色・白色、褐鉄鉱細粒子 焼成良好	口縁部破片
5	D－10	内耳土器	34.7	7.5	31.6			口縁が強く外反 口唇断面方形	外口縁横ナデ 内口縁横ナデ		暗茶褐色・長石、石英粒子 焼成良好	
6	B－8	内耳土器	33.3	(6.3)	—			口縁が外反、口唇が強く外反	外口縁横ナデ 内口縁横ナデ		黄褐色・白色細粒子 焼成良好	口縁部破片
7	D－3	内耳土器	—	(6.5)	26.7			体部がやや挙曲をもち立ち上がる			黒茶褐色・褐鉄鉱細粒子 焼成良好	底部破片
8	A－6	内耳土器	—	(6.0)	31.1			底部際がやや張り出す			黄茶褐色・白色細粒子 焼成良好	底部破片
9	第2号井戸址	内耳土器	—	—	—			口縁が体部上半で折れ強く外反	内・内口縁横ナデ		茶褐色・白色、褐鉄鉱細粒子 焼成良好	口縁部破片
10	表　採	内耳土器	—	—	—			口縁が体部上半で折れ強く外反	外・内口縁横ナデ		茶褐色・白色細粒子・焼成良好	口縁部破片

挿図番号	出土地点	種別器種	法量(cm) 口径	器高	底径	時期	生産地	器形	製作法	釉・絵付・文様	胎土・焼成	備考
第22図11	A－11	内耳土器	—	—	—						焼成良好	把手
12	B－7	内耳土器	—	—	—						焼成良好	把手
第23図1	C－12	舶載青磁坏	12.1	3.6	5.3	14C前	龍泉窯系	断面形方形高台・腰部屈曲、口縁強く外反	ロクロ成形 削り調整	淡青灰色・大きな貫入と発泡	青灰色・堅緻、緻密・若干の黒色微粒子	
2	B－14	舶載青磁碗	—	(2.0)	5.3	14C前	龍泉窯系	断面形方形高台・体部弯曲をもち立ち上がる		緑青灰色・蓮弁文半肉刻り	灰色・堅緻、緻密	底部破片
3	第2号井戸址中層	舶載青磁香炉	—	(4.1)	—	14C前	龍泉窯系	脚付・体部直線的に立ち上がる		淡青緑色・大きな貫入 内底面露胎	白灰色・堅緻、緻密	底部破片
第24図1	B－4	陶器 皿	9.5	2.2	4.4	15C	瀬戸・美濃系	体部にやや丸味・口縁部が外反	ロクロ成形 回転糸切り	灰釉・淡緑色、貫入 内・外口縁の縁部に施釉	灰白色・白色、黒色粒子含有でザラつく	
2	B－4	陶器 皿	11.3	2.2	6.6	16C後半	瀬戸・美濃系	小さな断面方形の削り出高台、体部は直線的に外反、口縁部で強く	ロクロ成形 内・底重ね焼痕	灰釉・黄緑色、貫入、全面に施釉	白黄色・やや軟質	
3	B－8	陶器 皿	11.6	2.5	5.8	16C後半	瀬戸・美濃系	小さな削り出高台、体部は丸味をもち立ち上がり、口縁部外反	ロクロ成形 内面ピン痕	灰釉・淡緑色、貫入、全面に施釉・底外面露胎	白灰色・やや軟質	
4	A－6	陶器 皿	12.2	1.6	—	16C後半?	瀬戸・美濃系	口縁部が強く外反		灰釉・黄緑色、貫入、全面に施釉	灰白色・やや軟質	口縁部破片
5	C－7	陶器 皿	—	—	6.3	16C後半	瀬戸・美濃系	小さな削り出高台	ロクロ成形	灰釉・緑黄色、貫入、全面に施釉・高台脇に釉だまり	白灰色・やや軟質	底部破片
6	B－8	陶器 皿	—	—	4.9	16C後半	瀬戸・美濃系	小さな削り出高台	ロクロ成形	灰釉・緑黄色、貫入、全面に施釉・底外面露胎	白灰色・やや軟質	底部破片
7	第4号溝址 B－6	陶器 皿	13.4	2.5	7.9	16C後半	瀬戸・美濃系	小さな断面三角形の削り出高台 体部は丸味をもち内弯気味	ロクロ成形 底外面重ね焼痕	長石釉・白灰色、貫入、全面に施釉	白灰色・若干の長石粒子 やや軟質	
8	第2号井戸址 C－9	陶器 埦	—	(2.0)	5.2	16C後半?	瀬戸・美濃系	断面方形の付高台 体部は丸味をもち立ち上がる	ロクロ成形	灰釉・淡緑黄色、貫入、内外面に施釉・高台露胎	白灰色・若干の黒色粒子 やや軟質	底部破片
9	B－8	陶器 埦(天目茶埦)	13.3	(5.7)	—	16C後半	瀬戸・美濃系	体部は内弯気味に開き、口縁でやや内傾	ロクロ成形 体部下半ケズリ	鉄釉・黒茶色・体部下半露胎	灰白色・若干の黒色微粒	
10	C－9	陶器 鉢(擂鉢)	23.9	(3.5)	—	14C	中津川系	口縁断面方形で口端が張り1条の沈線	ロクロ成形		灰白色・長石粒子、黒色粒子含有・堅緻	口縁部破片
11	A－7	陶器 香炉	—	(2.2)	5.9		瀬戸・美濃系?	3脚・体部直線的に開く	ロクロ成形 回転糸切り		白灰色・長石粒子含有	底部⅔
12	第7号建物址 P_5内	陶器	11.4	(1.5)	—		瀬戸・美濃系	口縁部が大きく開く		灰釉・緑黄色、貫入、全面に施釉	白黄色・やや軟質	口縁部破片
13	A－10	陶器	—	(3.6)	16.3			脚端が強く張る	ロクロ成形	灰釉・緑黄色、貫入、外面に施釉	白灰色・微量の黒色細粒	
第25図1	第5号建物址 P_{30}内	陶器 甕	41.1	(14.2)	—	13C後半~14C前半	常滑系	「N」字状口縁・肩部が張る	輪積み成形 指圧整形	自然釉・緑黄色・口縁内外面	茶褐色・多量の石英、長石粒を含有	口縁部破片

挿図番号	出土地点	種別器種	法量(cm) 口径	器高	底径	時期	生産地	器形	製作法	釉・絵付・文様	胎土・焼成	備考
第25図2	C－9	陶器 甕					常滑系	肩部が緩やかな傾斜	輪積み成形 ナデ調整	自然釉・緑黄色、上部よりタレ	茶褐色・白色粒子含有	肩部破片
3	C－11	陶器 甕					常滑系	肩部が緩やかな傾斜	輪積み成形 強いナデ	自然釉・緑黄色、肩部外面	茶褐色・多量の石英・長石粒を含有	肩部破片
4	第5号建物址 P_{23}内	陶器 甕					常滑系	肩部が緩やかな傾斜をもつ	輪積み成形 指圧・ナデ		茶褐色・多量の石英・長石を含有	肩部破片
5	第5号建物址 P_{23}内	陶器 甕					常滑系	肩部が緩やかな傾斜をもつ	輪積み成形		灰色	肩部破片
6	表採	陶器 甕					常滑系		ナデ		茶褐色・多量の石英・長石を含有	肩部破片
7	D－10	陶器 甕					常滑系		輪積み成形 外面叩き目		灰色・白色粒子含有	肩部破片
8	第5号建物址 P_{23}内	陶器 甕					常滑系		輪積み成形 外面ケズリ		灰色	肩部破片
9	第2号溝址 D－11	陶器 甕					常滑系				茶褐色・石英・長石粒子を含有	胴部下半破片
10	第1号暗渠址 C－10	陶器 甕					常滑系		内面ケズリ 外面叩き目		茶褐色・白色粒子含有	胴部下半破片
第26図11	B－8	陶器 甕					常滑系		内面 指圧後ナデ		茶褐色・石英、長石粒子を含有	胴部下半破片
12	C－12	陶器 甕					常滑系		内面指圧 後ナデ		茶褐色・石英、長石粒子を含有	胴部下半破片
第27図1	E－18	磁器 皿	13.8	3.3	8.4	18C後半	肥前系	低い削り出高台・体部は丸味をもち緩く内弯	ロクロ成形 蛇ノ目釉ハギ	口銹・呉須染付・くすんだ藍 体部唐草文・内面海辺意匠	白色堅緻・緻密	
2	D－9	磁器 碗	9.9	(2.2)	—	18C後半	肥前系	口縁が大きく外反		呉須染付・くすんだ藍 体部唐草文・内面2条圏線	白色・堅緻、緻密	口縁部破片
3	第3号溝址 D－9	陶器 埦	11.6	(3.7)	—			体部に緩やかな丸味をもち強く外反	ロクロ成形	灰釉・黄灰色、貫入・全面に施釉	白灰色・割合堅緻	口縁部破片
4	B－9	陶器 甕	13.5	(6.7)	—			体部直線的に開く	ロクロ成形	鉄釉・茶色・外面内面口縁に施釉	白黄褐色・堅緻・若干の長石粒子含有	口縁部破片
第28図1	第3号溝址 D－10	陶器 擂鉢					美濃系	体部直線的に開く	ロクロ成形	鉄釉・暗茶色・内面13条以上クシ目・体部下半露胎	白灰色・やや軟質・長石、黒色粒子を含有	体部破片
2	A－2	陶器 擂鉢					美濃系		ロクロ成形	鉄釉・黒茶褐色	白灰色・やや軟質・長石、黒色粒子を含有	体部破片
3	B－2	陶器 擂鉢					美濃系		ロクロ成形	鉄釉・黒茶褐色	黄白灰色・堅緻・長石、黒色粒子を含有	体部破片
4	D－6	陶器 擂鉢					美濃系		ロクロ成形	鉄釉・黒灰色	黄白灰色・堅緻・長石、石英粒子を含有	体部破片

3．石製品

石製品は石臼４点、石擂鉢５点、砥石５点、硯１点、編物石２点、軽石製石碗１点、石英塊21点、海辺礫１点が出土している。これらは所属時期を示すことがむずかしく、中世～近世の幅の中で示すものとする。

石　臼（第29図１～５、図版第９）

石臼は第２号井戸址の範囲より５点が出土している。いずれも接合関係はなかったが、第２号井戸址内の埋戻しに伴い廃棄されたものである。

出土した石臼は全て上臼で、欠損品である。溝は３を除き、割合明瞭で溝数が９本以上のもので、全て６分画である。３の場合すり合わせ面に溝が見られず、すり合わせ部に放射状の溝をもつ特殊なものである。ものくばりが認められたものは２のみで、この臼が最も大きなものである。４は茶臼で挽き手穴周縁に方形の陽刻がなされている。石臼の欠損には人為的に上縁や側縁を欠いたと思われるものが含まれている。特に４の場合側縁部を人為的に剝離したような痕跡が認められた。井戸の埋め戻しに伴う廃棄と石臼の破壊の間には何らかの関連があろうか、興味深い問題である。

第12表　石　臼　観　察　表　　（単位はcm）

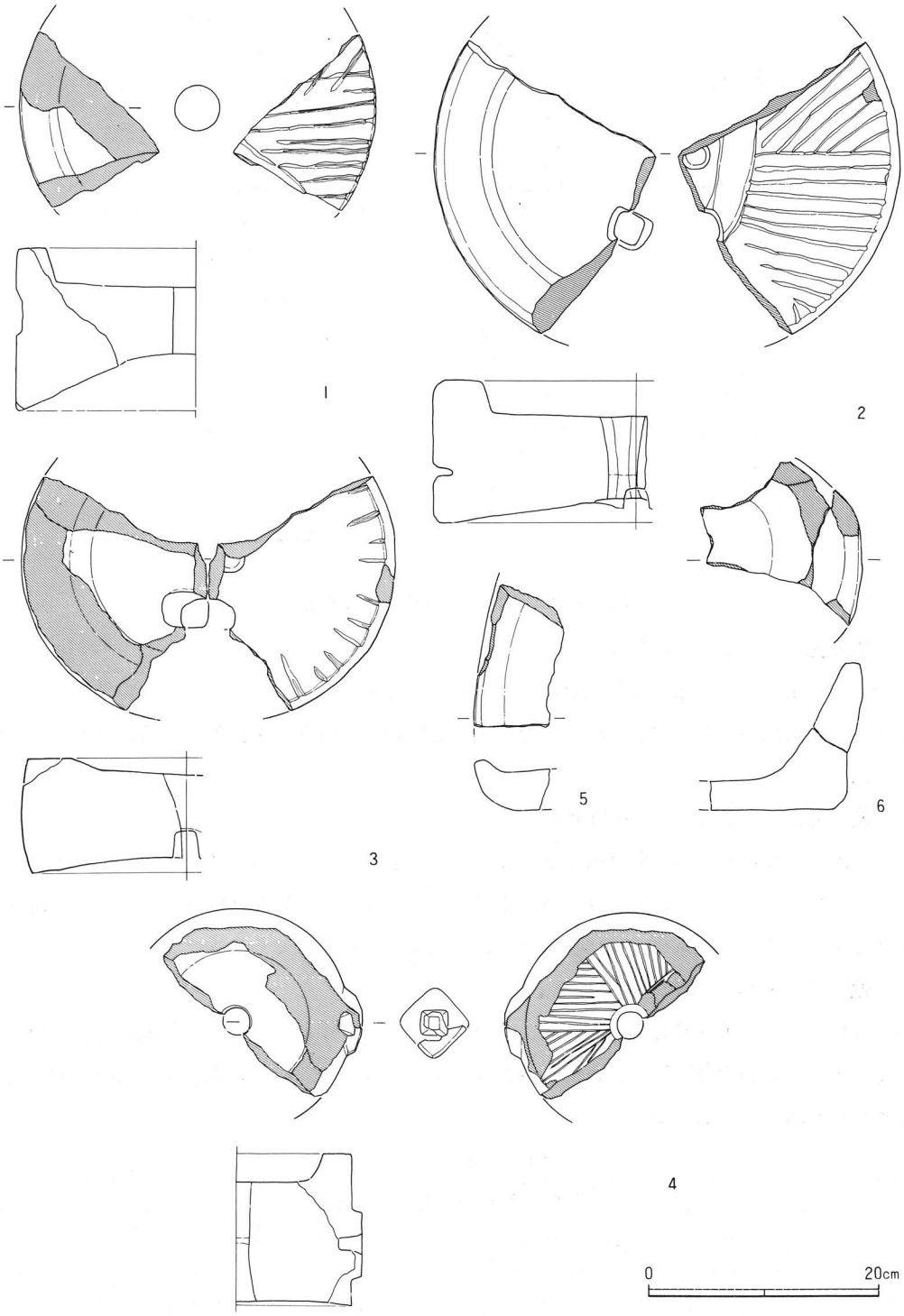
挿図番号	出土地点	半径	高さ	上縁高／幅 供給口直径	ふくみ	分画／溝数	石　材	残存部	備　　考
29－１	Ｃ－10 井戸２上部	15.6	14.2	2.9／3.4		－／９	安山岩	1/6	挽き手穴有
２	Ｄ－８	17.8	12.5	2.9／5.4 3.2	1.3	６／11	〃	1/3	ものくばり 挽き手穴有
３	井戸２	14.4	10.0	1.1／6.3 3.2	1.2		〃	1/4	
４	井戸２下部	10.9			0.4	６／11	〃	1/2	挽き手穴有 茶臼
５	Ｃ－10 暗　渠						〃		茶臼はんぎり部分

石擂鉢（第29図６・第30図７－８、図版第９）

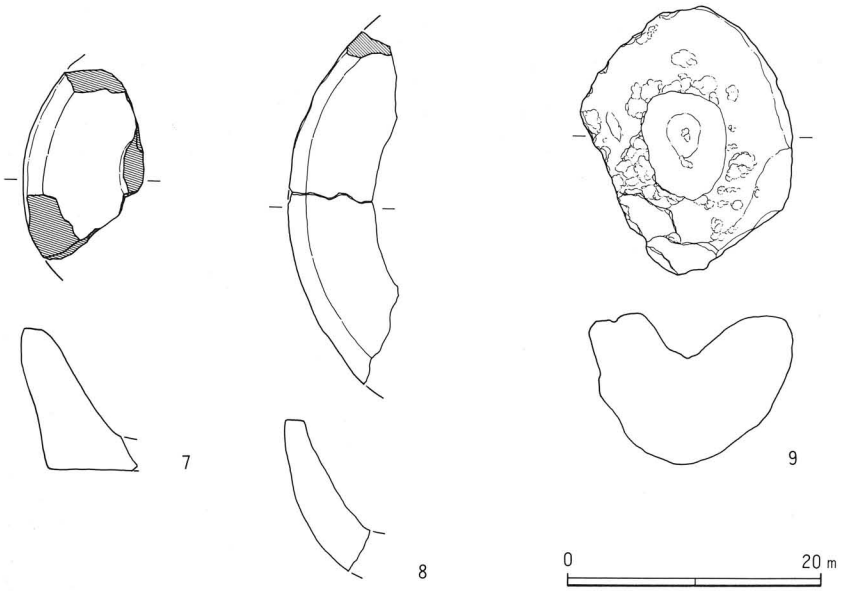
３点が出土している。全てＣ－９・10グリッドからで、第２号井戸址に関わる形で出土している。これらの内第１号暗渠址用の礫に用いられていたものと、第２号井戸址内のものが接合関係にあった。６・７は断面形が逆台形状を呈し、８はＵ字形をなす。６・７共に成形は丹念で、６は側面に数段の調整痕が認められる。接合状態より石擂鉢も石臼と同様に人為的に割られた可能性が考えられる。

第13表　大擂鉢・大凹石観察表　　（単位はcm・g）

挿図番号	出土地点	半　径	高　さ	深　さ	重　量	石　材	備　　考
29－６	Ｃ－10暗渠 井戸２内上層		12.9	9.8	881	安山岩	暗渠1、井戸2内接合、調整痕
30－７	Ｃ－９		11.2	8.4	994	安山岩	
８	井戸２内			(8.7)	1735	安山岩	接合
９	Ｃ－２ ピット内	21.1×16.7	12.0	3.7	1657	軽　石	大凹石



第29図　中世・近世の石製品（石臼・石擂鉢・1/6）



第30図　中世・近世の石製品（石擂鉢他・1/6）

大凹石（第30図９、図版第９）

９の１点が出土した。第８号建物址の柱穴根石として用いられていた。全形は自然形状をそのまま利用し、凹部の面だけ敲打等により整形を加えている。凹部は平面形状が楕円形を呈し，周縁に磨滅が認められる。

砥　石（第31図１～５、図版第９）

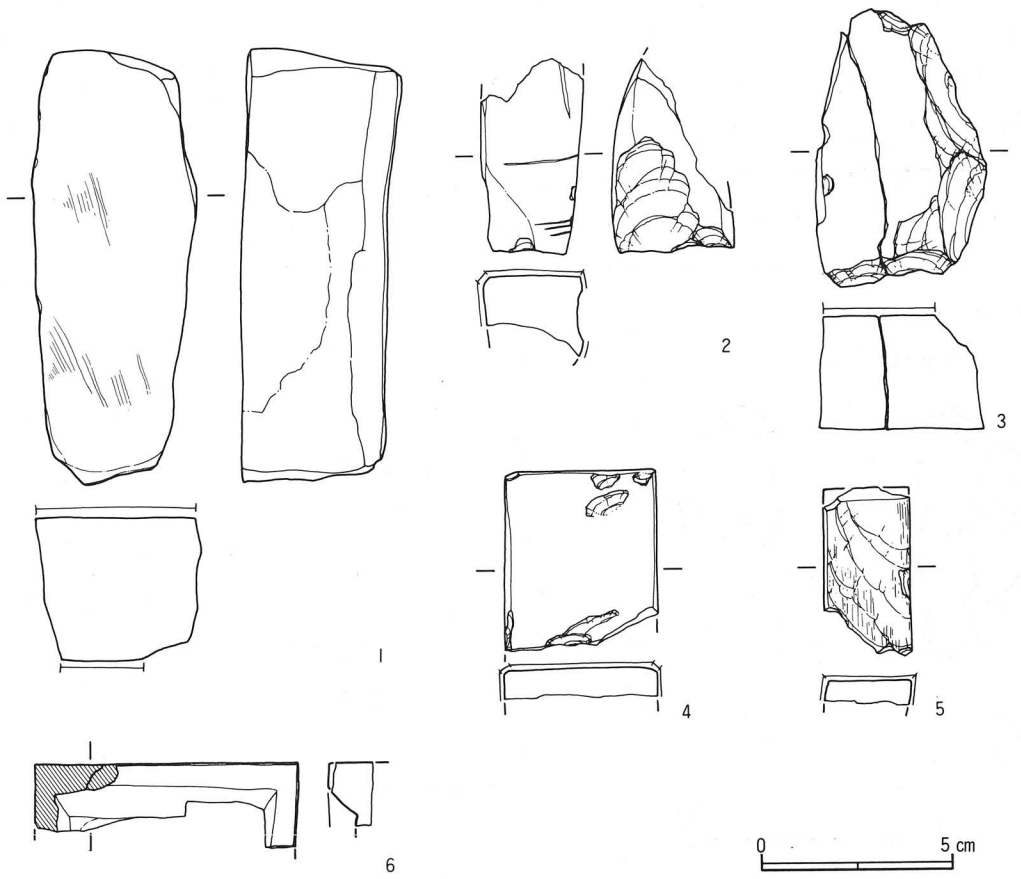
５点が出土している。３を除き研ぎ面を１ヶ所以上もち、形状は直方体を呈する。１・２は研ぎ面がやや膨らみをもっており、４・５は前者よりも研ぎ面が平坦な傾向を示す。形状や研ぎ面の状態等より、１・２は荒砥・中砥、４・５は仕上砥となるものであろう。

硯（第31図６、図版第９）

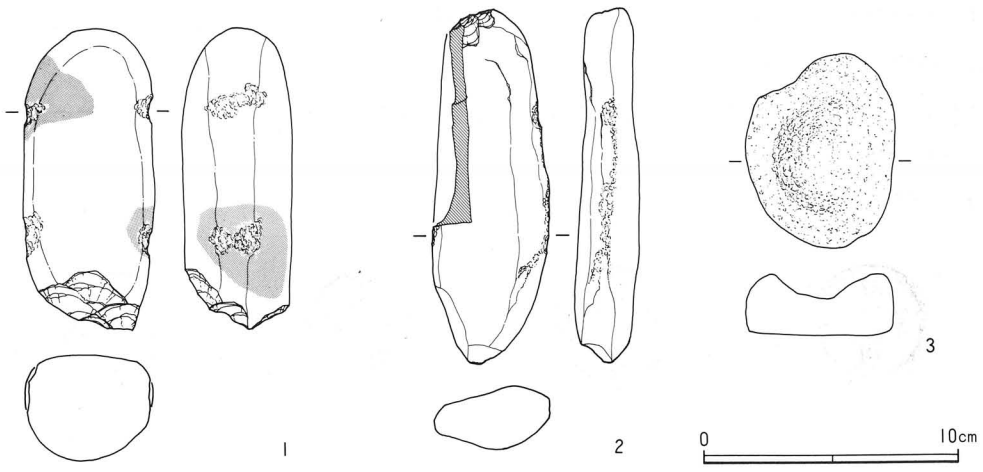
粘板岩製の硯で、第５号建物址柱穴内より出土した２点が接合している。部位は海部上端の縁の部分である。海部の掘り込み、縁部の稜共にシャープな作りである。幅７cmで側縁がやや内彎気味となり角部がやや張り出す。

第14表　砥 石 観 察 表

挿図番号	出 土 地 点	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量（g）	使用面数	石　材	備　　考
31－1	D－12	11.5	4.4	3.8	325	2	凝灰岩	
2	井戸２内	（5.2）	3.2	(2.1)	(41)	（３）	〃	
3	B－11柱穴内	7.3	4.4	3	117	1	〃	建物址４柱穴内
4	A－２	4.7	4.1	（８）	(24)	（３）	〃	
5	D－７柱穴内	4.4	2.3	(0.7)	(11)	（３）	〃	



第31図　中世・近世の石製品（砥石・硯・1/2）



第32図　中世・近世の石製品（1/3）

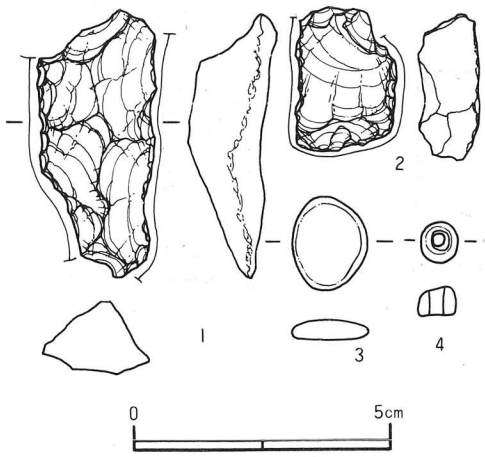
編物石（第32図１・２、図版第９）

Ｂ－８・Ｃ－10グリッドより２点が出土している。両者共長楕円形礫を用いている。礫端部に敲打痕が認められ、また、両側に敲打による抉入部を作り出している。１・２共にこの抉入部は両端に近い部分に２ヶ所認められる。１はこの部分にスス状のタールが付着している。

軽石製石碗（第32図３、図版第９）

Ｃ－９グリッドより１点出土している。7.7cm×5.8cmの軽石を原料とし、そのほぼ中央に4.5cm×3.8cm、深さ１cmの楕円形の凹を作り出し石碗状とする。底面、周縁の一部は整形のため研磨痕が見られる。

石英塊（第33図１・２、図版第８）



第33図　石製品（石英他・1/1.5）

本遺跡の場所では産出しない石英塊が21点が調査区内に散在する形で出土している。これらはその形状より、２タイプが認められる。剝片状となるもの５、塊状となるもの16である。これら石英塊の周縁には潰れ状の剝離が認められるものが多い。有力な根拠は見い出せなかったが、周縁に潰れ状の剝離が見られる点、火打ち石として石英を用いる点などより、出土した石英塊は火打ち石に関わるものであろう。

海辺礫（第33図、図版第８）

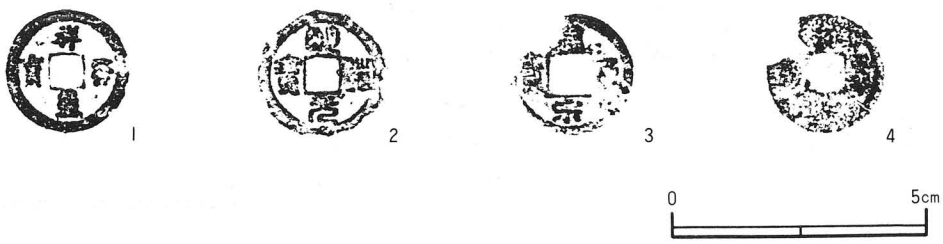
粘板岩の平偏な不整楕円形を呈する礫がＢ－８グリッドより１点出土している。

ガラス小玉（第33図４、図版第８）

石製品ではないがガラス小玉が第７号建物址の柱穴内より出土している。平面形は径８㎜のやや歪んだ円形を呈し、断面形は歪みをもつ。径３㎜の孔がほぼ中央部にあけられる。青色を呈し、割合透明度をもつ。

これらの石製品はその多くが、Ｃ－９・10グリッド周辺より出土し、特に第２号井戸址の埋め戻しに利用されているものが多い。

４．銭　貨（第34図、図版第８）



第34図　中世銭貨（1/1.5）

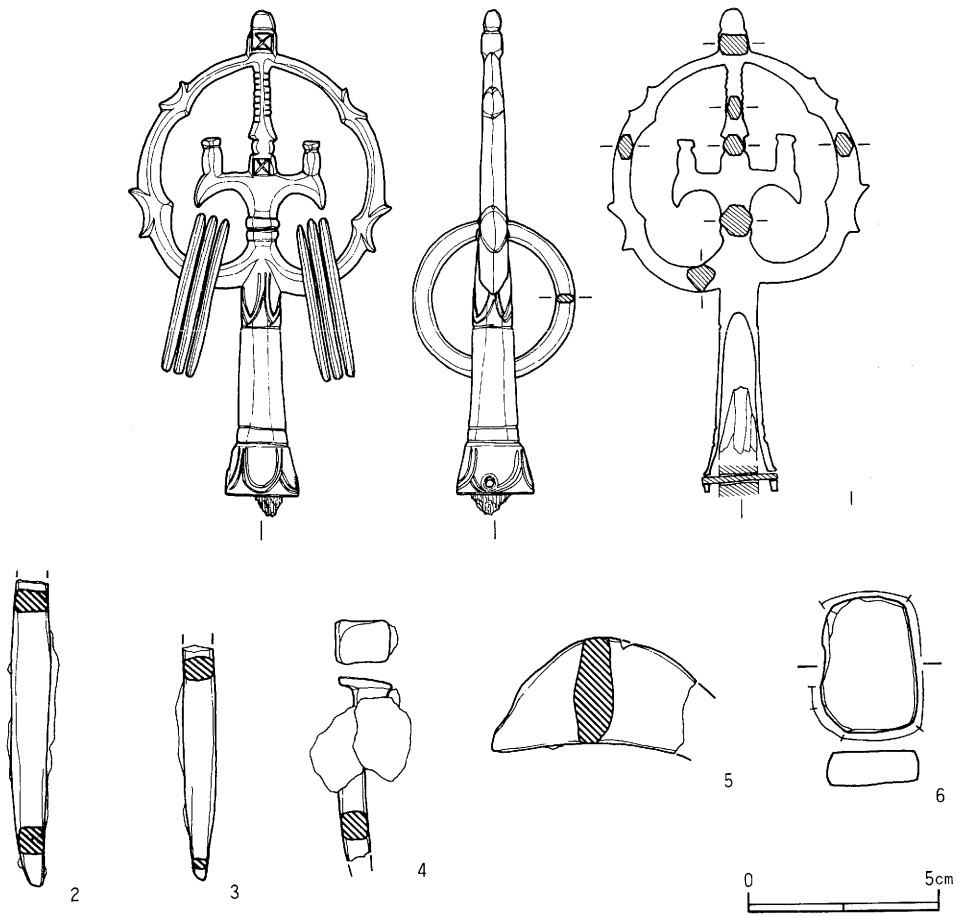
銭貨は５点が出土しており、その内種類が判明したものは３点である。内訳は祥符通寶、明道元寶、皇宋通寶で、この他に鐚銭１、銭貨破片がある。４を除き全て鋳造は良好である。

これらの銭貨は第５号建物址を中心とする範囲より出土している。

第15表　出土銭貨一覧表

挿図番号	出　土　区	銭　　名	初　鋳　年	計測値（㎜）		備　　考
				外縁	郭内径	
34－１	Ｂ－５柱穴内	祥 符 通 寶	大中祥符元年（1008）	29.5	6.5	楷書体
2	Ｄ--10	明 道 元 寶	明道元年（1032）	25.2	6.8	篆書体、裏郭磨滅
3	Ｂ－８	皇 宋 通 寶	宋元元年（1038）	24.1	8.5	楷書体、裏郭磨滅
4	Ｃ－６	―――	―――	23.5	6.9	鐚銭

５．金属製品・土製品



第35図　中世・近世の金属製品・土製品（錫杖・鉄釘他・1/2）

金属製品は錫杖・鉄釘等が検出されている。鉄製品は錆化が著しく、全てが破片のために原形を窺うことはできなかった。また、これらの所属時期を示すことはむずかしく、中世～近世の幅の中で示すものとする。

錫　杖（第35図１、図版第８）

錫頭部が１点出土している。鋳銅製であるが、錆化はあまり見られず、ほぼ完形を保っている。形態は外環縁の対象位置に三日月形突起を４ヶ所に配する。頂端部には五輪塔と思われる意匠の突起が付けられるが、空・風・火輪部分は欠損し、水・地輪部のみが残る。環内に塔が表現され、この脇に突起が付く。外径4.3cmの遊輪が左右に３個ずつつく。木柄部とのソケット部には、蓮弁と思われる線描が上下に配される。ソケット部は外径1.9cm、内径1.7cmを測り、先端を削り尖らせた木柄を差し込み、竹釘をもって固定している。重量は144ｇを測る。

このような遺物の出土例は少なく、時期を決定することは困難であるが、その製作法等よりみて近世に帰属する可能性が強い。

鉄　釘（第35図２～４、図版第９）

３点が出土しており、８ヶ所もの建物址が検出された割には少ないと言える。いずれも角釘で、内訳は先端２、頭部１である。全て錆化のために膨張している。４は鍛え伸ばした頭部を90°折り曲げたものである。これらの鉄釘は調査区内に散在する形で検出されている。

半月形鉄器（第35図５、図版第９）

形状が鎌の刃先に類似する鉄器が１点出土している。錆化のため膨張しており、刃部などを有していたかは不明である。

土製方形板（第35図６）

平面形状が隅丸方形を呈する土製品が１点、第８号建物址の柱穴より出土している。大きさは3.6cm×2.6cm、厚さ0.9cmを測る。内耳土器底部破片を用いている。周縁は一部を除き磨かれ整形が行われている。

第VI章　調査の成果と課題

第１節　山寺遺跡における中世遺構の変遷について

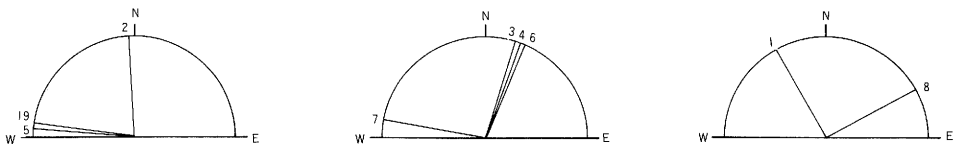
今回の調査により掘立柱建物址・竪穴状遺構・井戸址・溝址・土壙等が検出されたが、これらは厳しい重複をもち、伴出遺物が少ないこともあり、遺構の帰属時期を決定することは困難をきわめた。しかし、これらについて遺構内や周辺より出土している遺物より考慮すると、全般的に中世に帰属するものが主体を占める。これらの遺構が調査区内においてどのような変遷をしていったかについて若干考察を加えたい。

１．遺構の分布

掘立柱建物址群はある一定の範囲内に構成されていることが看取された。それによると、調査区のほぼ中央北から南方向に分布し、調査区外へその大半が続いている。柱穴状ピットの分布より見ると、建物址は東西方向へ延びるとは考えられず、特に東側部分は空白地帯となっていたものであろう。第８号建物址を除き、全て重複関係をもつ。これに対し溝址は建物址の分布に直行する形で東西方向に分布している。これらの多くが、近世に属しておりすべて建物址と有機的な関連を有していた訳ではないが、状況等より数条の溝址が建物址の区画等に関連があったものと考えられる。

２．遺構の重複関係

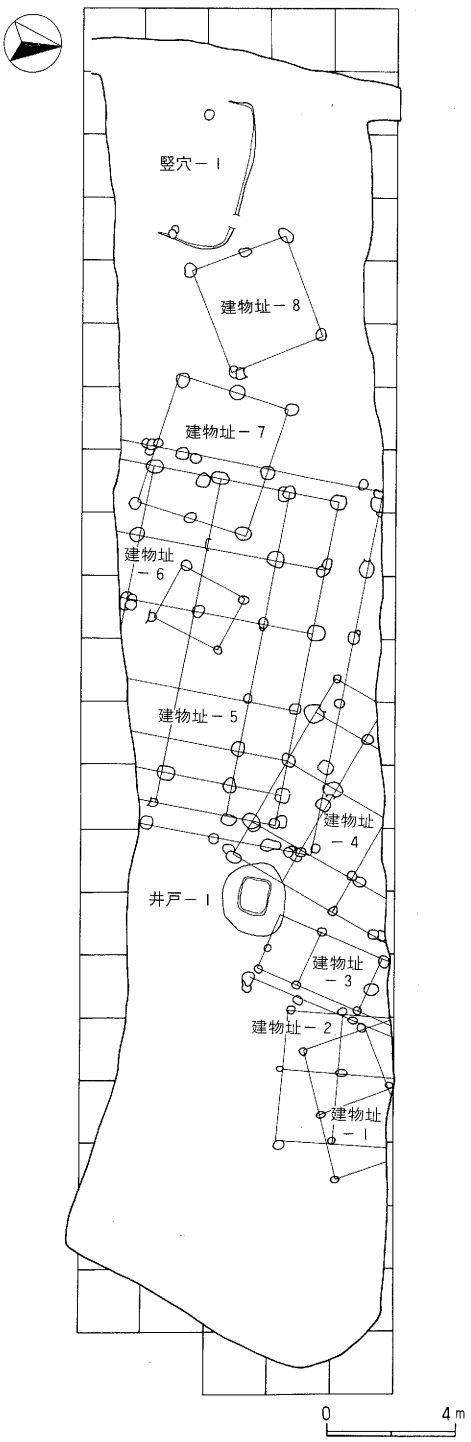
検出された遺構はそのほとんどが重複関係をもっていた。このことはこの地に長期に亘って生活が営まれたことを示している。重複関係をまとめると次のようになる。第１号建物址－第６号溝址－第２号建物址－第３号建物址－第１号井戸址－第４号建物址－第５号建物址－第２号～５号・７号溝址…第２号井戸址…第４・第６号土壙－第６号建物址…第７号建物址。これらについて新旧関係を把握できた遺構は少ない。第２号井戸址、第２号～５号・７号溝址、第４号・６号土壙は第５号建物址を切る形で構築されている。また、第４号建物址P_9は第５号建物址P_{13}と重複関係にあり、その調査所見によると、第４号建物址が第５号建物址を切る形で構築されていたことが判明した。以上の事柄より第５号建物址が最も古い時期に帰属するものとして捉えることができる。



Ａグループ　　Ｂグループ　　Ｃグループ

第36図　建物址棟の方位分類図

3．建物址の棟方向



第37図　中世・近世の遺構（1/240）

棟方向を大別すると、南北方向5、東西方向3である。棟方向が同方向でも第5号・7号建物址のように重複関係をもつものがあり、同棟方向でも帰属時期差があることがわかる。そのため、単に棟方向だけでなく桁行、梁行方向より分類すると3グループに分けられる。アグループは第2号・第5号建物址・第1号竪穴状遺構である。これらはある一定の距離をもち、第5号建物址と第1号竪穴状遺構は平行に、第2号建物址は直行する形で配されている。イグループは第3号・第4号・第6号・第7号建物址である。第3・第4号建物址は軒行がほぼ平行し隣接する。これに第6・第7号建物址が加わり、第7号は直行する配置をもつ。棟方向の傾向はアグループと同様な傾向を示す。ウグループは第1号・第8号建物址である。ア・イグループと棟方向に相違が見られ、第1号と第8号建物址は直行する形の配列をもつ。ア・イグループの建物址がある程度のまとまりを持っているのに対し、ウグループの配列は散在的な傾向を示す。

4．建物址の構造と規模

検出された建物址等で全容を把握し得たものは少なかった。しかし、検出された部分だけより考察すると次のように考えられる。A群、柱穴配置に歪みがあり、掘り方が浅いもので、桁行2間以上×梁行2間の建物（第1号・第2号建物址）、B群桁行3間以上×梁行2間で片側に廂をもつ長屋風建物（第3号建物址）、C群桁行3間以上×梁行2間以上で両廂をもつ大形構造のしっかりした建物（第4号・第5号建物址）、D群桁行1間×梁行1間の小形建物（第6号建物址）、E群桁行1間×梁行2間の長方形建物（第7号・第8号建物址）である。掘立柱建物址ではないが、

第１号竪穴状遺構のあり方はその規模・棟持ち柱のあり方よりＥ群と類似する点が認められる。

これらの群は調査区内に於いてある程度のまとまりをもっていた。Ａ群は調査区の北東隅、これに接する形でＢ群、Ｃ群は調査区のほぼ中央部を南北に、Ｅ群は南西隅に分布していた。

これらの建物址の性格を構造より考えると、Ａ群は簡単な柱構造とその面積より納屋・倉庫として性格をもったもの。Ｂ群は他の群の建物址と平面形状等に異なりが見られ、片廂をもつ点などより片方向（桁行方向）に開かれていた長屋風の建物が想定できる。これに類似する形態の遺構は海老名市上浜田遺跡ＳＢ３・ＳＢ４（國平　1979）、飯田市内御堂遺跡建物址II①（佐藤　1980）等に見られ、厩舎としての性格付けが行われており、本遺構も同様な性格をもつ建物であった可能性がある。Ｃ群はその構造より主屋としての性格が考えられる。Ｅ群はその構造・規模等より納屋・倉庫が考えられるが、柱構造よりＡ群と同様な役割を果たしていたとは考えられず、むしろ柱穴の構造がしっかりしている点などより、別の性格を有していた可能性もある。

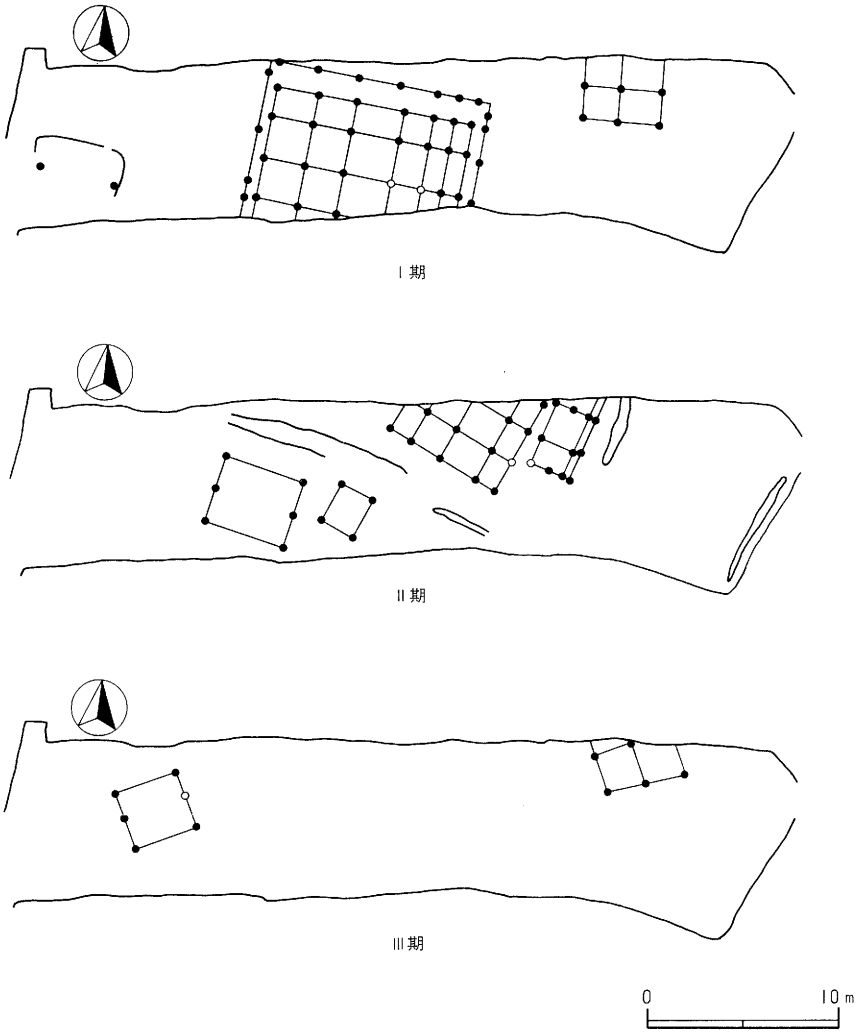
５．建物址の変遷について

以上のように分類された建物址等がどのように変遷してきたのであろうか。Ｉ期、重複関係より第５号建物址が最も古い時期に属する。棟方向からアグループの建物址がこれに伴う。Ｉ期はＡ（納屋・倉庫）、Ｃ（主屋）、Ｅ（納屋・倉庫）で構成され、大形の主屋を中心に両脇に納屋・倉庫が配される。II期は重複関係より第４号建物址が属し、イグループの建物がこれに伴なう。建物址はＢ（厩舎）、Ｃ（主屋）、Ｄ・Ｅ（納屋・倉庫）で構成され、建物数はＩ期に比べ増加する。建物配列に特徴が見られ、特に主屋と厩舎が並列し一群を構成する点が興味深い。納屋・倉庫が主屋群と離れ、これを区画するように溝址が設けられている。III期はＣ（主屋）がなくなりＡ・Ｅ（納屋・倉庫）だけで構成される。また、棟方向も変化し、建物配列も散在する。

井戸址が２基検出されている。これらは集落内でどのような位置にあったろうか。第１号井戸址は中世に第２号井戸址は中世後半～近世に廃絶されていることが判明している。しかし、これらの井戸址がいつ頃機能していたかを明確にできなかった。そこで、これらを建物址との重複関係より考えると、第２号井戸址は第５号建物址を切って構築しているため、Ｉ期以降に機能していたことがわかる。第１号井戸址は出土遺物より見ると、II期以前に埋め戻されていたと考えられ、後にII期建物址が構築されたと捉えることができる。

これを建物配置等と合わせて考えると、第１号井戸址は第５号建物址北東隅に位置し、併設されていた可能性が考えられる。第２号井戸址は、建物に付随するものと仮定すると、配置よりII期に帰属させることが妥当と思われる。井戸址内よりの近世磁器片は、井戸上に構築されている暗渠址と関連すると思われ、これより混在した可能性が強い。

長野県内において井戸址が建物址と有機的に結びついている例は少なく、県内の中世集落が中小河川および湧水地を背景に成立しているあり方（鋤柄　1986）とはその様相を異にしている。このことは建物址群が立地する台地斜面が、南側を流れる日影田川と直線距離で約130m、比高差約20mをもつことにも起因していると考えられ、また、台地斜面部は浅い掘り方でも水の湧出が容



第38図　中世遺構の変遷図

易なことなども関連しているものと思われる。

Ⅰ～Ⅲ期までの年代を直接決定でき得る資料が欠除しており、大枠での年代を示せるに過ぎない。

Ⅰ期、第５号建物址の柱穴根固め用として、「N」字形口縁を呈する13世紀後半～14世紀前半の常滑系甕片が用いられていた点などより14世紀前半以降に属するものと思われ、また、建物の組み合わせが、掘立柱建物址に竪穴状遺構が付属する形をとる点は、長野県内中世集落遺跡のあり方（鋤柄　1986）より15世紀以降の集落様相と類似しており、Ⅰ期を15世紀に比定するのが妥当であろう。

Ⅱ期の年代を直接窺えるような資料はなかったが、重複関係よりⅠ期15世紀以降、建物址周辺

に16世紀後半の陶器が広く分布する点などより、この時期が本期に該当するものであろう。

III期の時期を特定でき得る資料はなかったが、第1号暗渠址が構築され、水田造成が行われたと思われる18世紀後半まで下らず、II期に続くものとして捉えることが妥当であろう。

以上のように検出された建物址を中心をした遺構を概観してきた。それによると本遺跡の建物址群は、14世紀後半～15世紀・16世紀後半・16世紀後半以降の3期に変遷していくことが窺われた。しかし、年代的に不確実な要素もあり、また、調査範囲が道路敷に限定されていることもあり、集落構造全体の把握には至ってはいない。今後、文献等よりの裏付けも加え、遺跡の性格、歴史的背景などを考えていきたい。

國平健三　1979　「中世」『上浜田遺跡』　神奈川県教育委員会

佐藤甦信　1980　「屋敷跡」『内御堂遺跡』　飯田市教育委員会

鋤柄俊夫　1986　「長野県の中世集落遺跡について」『長野県考古学誌50』　長野県考古学会

第2節　山寺遺跡出土の中世陶磁器について

山寺遺跡からは中世から近世に亘る陶磁器が出土している。その量は多いとは言えないが、検出された中世陶磁器は八ヶ岳山麓部における中世遺構に伴う資料としては貴重なものである。そこで、遺跡内における中世陶磁器の概要について若干述べてみたい。

1．中世陶磁器の内容

今回の調査により得られた中世陶磁器は162点で、その内訳は土器質116点、磁器4点、陶器42点で、土器質のものが全体の約72%を占める。特に中でも内耳土器のような日常什器としての性格を有する器の頻度が高いことより、この地が寺院・神社址などではなく一般的な集落であったことを窺うことができる。

また、土器質の中でかわらけが17点出土している。この数量は茅野市磯並遺跡（鵜飼他1987）、諏訪市旧御射山遺跡（金井　1965）等と比較すると少ないが、他の中世集落遺跡のあり方と比較すると大差なく、むしろ一般的な傾向として捉えることができる。かわらけの出土状況は第1号井戸址内より5点が出土しており、他にこのように集中している部分は見られなかったことより、井戸址埋め戻しに伴い、かわらけをまとめて廃棄したものと考えられ、かわらけが集中して検出される傾向と類似している。このことはかわらけのもつ性格を示しているように思われる。

陶磁器は舶載磁器4点、国内産陶器42点が出土している。

市域において青磁・白磁・青白磁などの舶載磁器が検出されている遺跡は8ヶ所である。これらの内本遺跡と同様に八ヶ岳山麓部に立地する遺跡は棚畑遺跡、高風呂遺跡で龍泉窯系青磁蓮弁文碗が少量出土している。これに対し、沖積低地に立地する遺跡からは同安窯系青磁櫛描文碗、龍泉窯系青磁劃花文碗・蓮弁文碗・雷文帯碗，白磁碗・皿、青白磁合子など多種多様な舶載磁器が出土している。このような舶載磁器の量等の差は遺跡の性格や規模によるものであろうが、本遺跡の場合単に碗だけでなく香炉が認められる点に特徴がある。

国内産陶器については瀬戸・美濃窯系皿・埦・香炉、中津川窯系捏鉢、常滑窯系甕が出土している。量的には42点で瀬戸・美濃窯系皿が主体を占める。このあり方は一般的なあり方のようである。

2．中世陶磁器の時期について

第1節で述べているように、本遺跡は単一時期に存在したものではない。それは遺構の重複や時間幅をもつ陶磁器の存在より明確になっている。

陶磁器よりみると大きく3期に分けることが可能である。第1期、龍泉窯系青磁蓮弁文碗、「N」字形口縁をもつ常滑窯系甕などで、特徴等より13世紀後半～14世紀中葉頃に比定できる。第2期、瀬戸・美濃窯系縁釉皿、三脚香炉、中津川窯系捏鉢などであり、15世紀に比定できる。第3期、瀬戸・美濃窯系灰釉皿が相当し16世紀後半に比定できる。このような変遷のあり方は一般的な中世遺跡の陶磁器の変遷と共通するものである。

3．中世陶磁器の遺構との伴出関係について

直接遺構と伴出した資料は少ない。第1節5で述べたように建物址は第Ⅰ～Ⅲ期の変遷を示すことが明確になっている。時期も第Ⅰ期14世紀後半～15世紀、第Ⅱ期16世紀後半、第Ⅲ期16世紀後半以降が想定されている。

これを中世陶磁器の有り方より考えると、第1期13世紀後半～14世紀中葉頃に比定される遺構が検出されていないことになる。しかし、今回の調査区が遺跡全体の極一部分であり、調査区外に遺構が埋蔵されている可能性が高く、今後この時期の遺構が検出されるであろう。

第2期の陶磁器は第Ⅱ期建物址群の中で中心的な第4号建物址の南側に集中する傾向が認められ、この場が廃棄の場であった可能性が考えられる。

以上のように検出された中世陶磁器を概観してきたが、出土量が少量な点、筆者の力不足により詳細な分析を行なうことはできなかった。しかし、本遺跡内における中世陶磁器のあり方は一般的な中世遺跡のあり方と同様な傾向を示すことが看取できた。

鵜飼幸雄他　1987　『磯並遺跡』　茅野市教育委員会

金井典美　　1965　「長野県霧ヶ峯旧御射山祭祀遺跡調査概報」『考古学雑誌第46巻第1号』

第Ⅶ章　結　　語

山寺は、八ヶ岳山麓でも歴史的環境の豊かな地である。とくに八ヶ岳山麓での古代・中世の歴史を叙述する場合、そうした山寺の歴史的環境がその主要な柱として組み立てられる場合もある。ただその歴史的環境も、実証的な研究によって明らかにされてきた部分はごく少なかったように思われる。

今回の発掘調査では、我々に２つの大きな期待があった。それは、過去３回の発掘調査で明らかにされたと同じように、今回もまた平安時代の竪穴住居址が発見され、山寺の古代集落の様相について、新たな検討を加えられるようになること。もう１点は、発掘地点の場所から、山寺の口碑等、山寺の歴史的環境になにかしらつながる様な発見のあることであった。

発掘調査の結果、平安時代の２・３の遺物を除くと同時代の遺構は発見されず、掘立柱建物址８ヶ所、竪穴状遺構１ヶ所、井戸址２ヶ所、土壙９ヶ所、溝７ヶ所、暗渠１ヶ所と中世の陶磁器類を主に、それらに混じって近世の遺物が若干発見された。それらの遺構・遺物の個々については前章で詳しく記したところである。

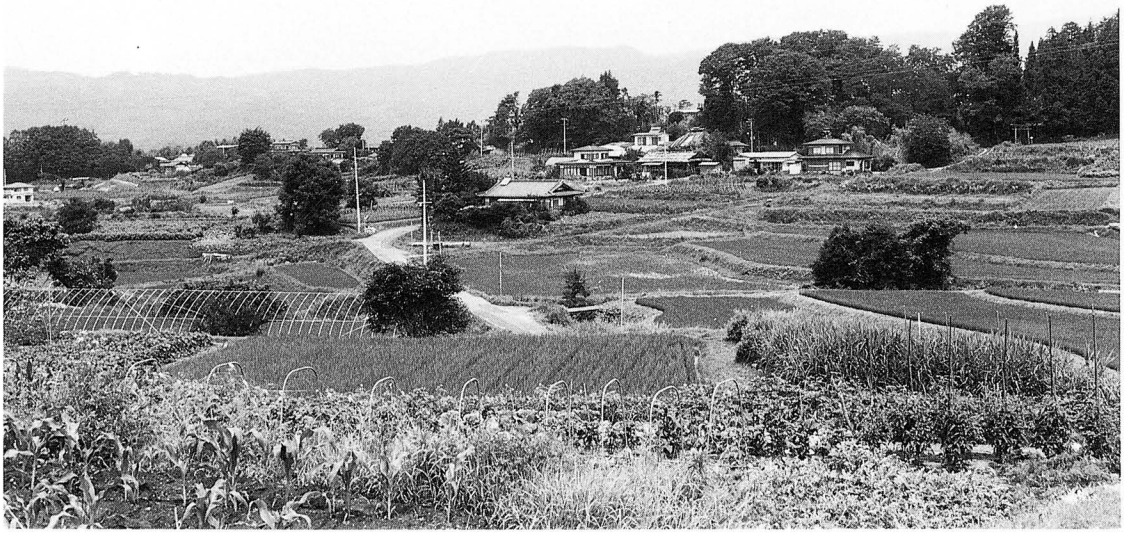
このうち発見された掘立柱建物址については３期の変遷が考えられている。Ⅰ期は納屋（倉庫）・主屋の組合せで年代的には14世紀後半から15世紀に比定される。Ⅱ期は厩舎・納屋・主屋で16世紀後半、Ⅲ期は納屋で16世紀後半以降にそれぞれ位置づけられると考察されている。

Ⅰ期の主屋と考えられる建物は総柱の大形な建物で、付属施設から見て屋敷を構成していたとみて間違いないであろう。Ⅱ期も同様と考えられるが、厩舎の存在から、Ⅰ期の大形の建物と同じように、これらはごく一般の庶民の住宅であったとはやや考えにくい内容をもつものである。また、掘立柱建物址以外の遺構についても、それらが以上の３期の変遷の中で考えられるものがあるなど、中世のある一時期の集落のあり方が部分的ではあるものの明らかにされたことになるのである。

発見された以上の建物址群が，小字名の「古屋敷」とどのような関連があるかについては将来の研究を期すとしても、両者がまったく無縁であるようには思われないのである。いずれにしてもそれらの建物址は中世に属するものと考えられ、古代から中世に至っても、この山寺の地に人々の生活があったことが明らかにされたことは大きな成果であった。

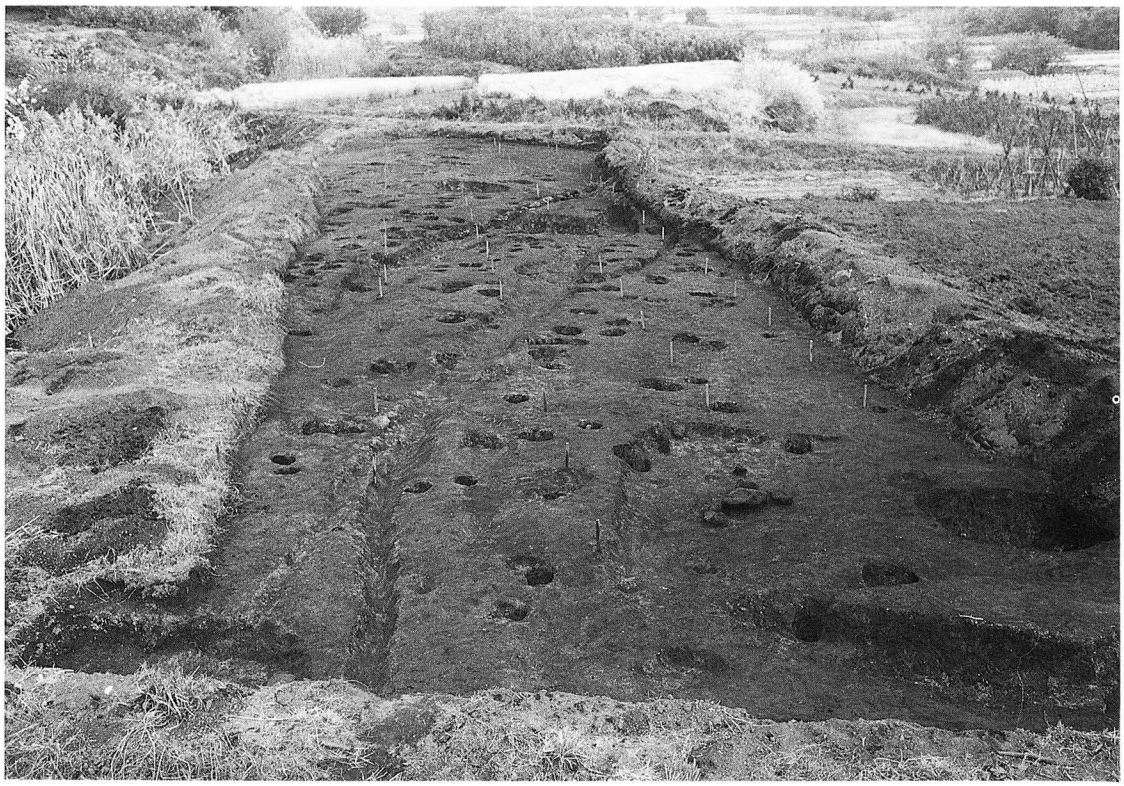
八ヶ岳山麓の中世については不明な部分が多い。もちろん考古学的にも中世の遺跡として調査研究された例はそれほど多くはない。そうした中で、もとより十分な分析・検討はなされていないものの、今回の発掘調査で得られた成果が、山寺を中心とした八ヶ岳山麓の中世の研究に欠くことのできない史料となるものと信じ、本調査の結語としたい。

図　　版



1. 遺跡遠景（南方向から）

2. 調査区全景（南方向から）

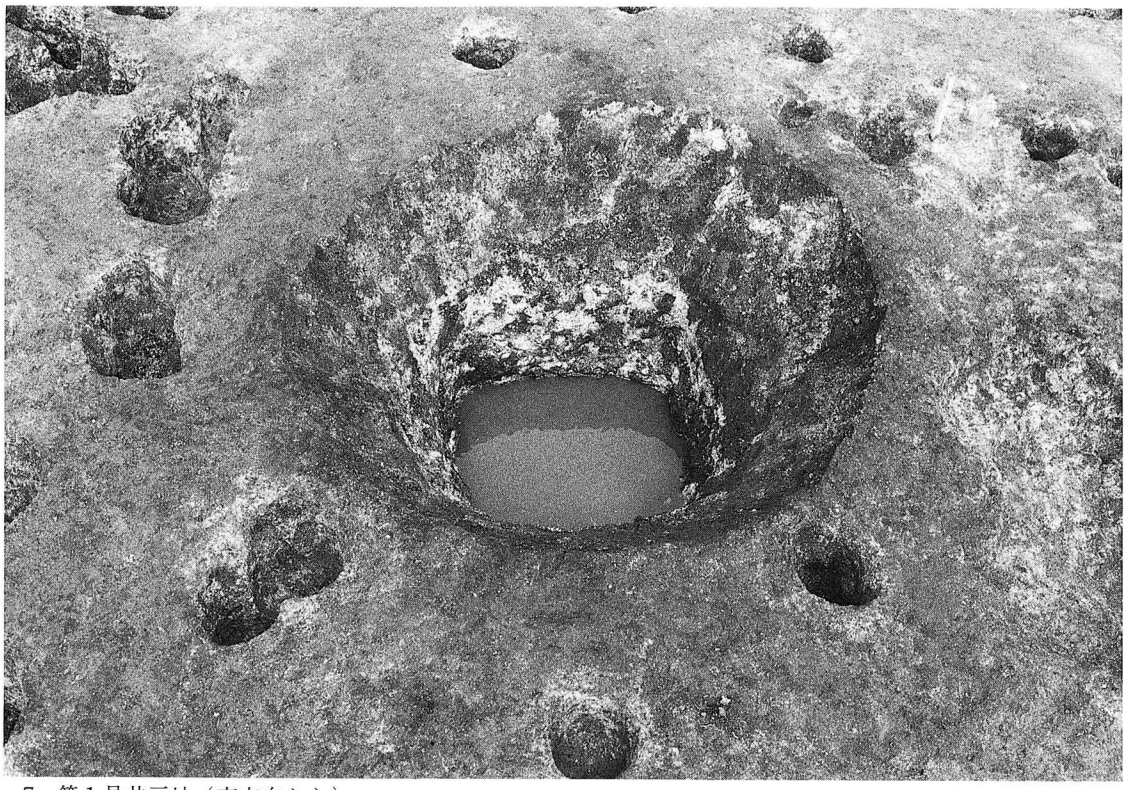


3. 遺構全景（西方向から）

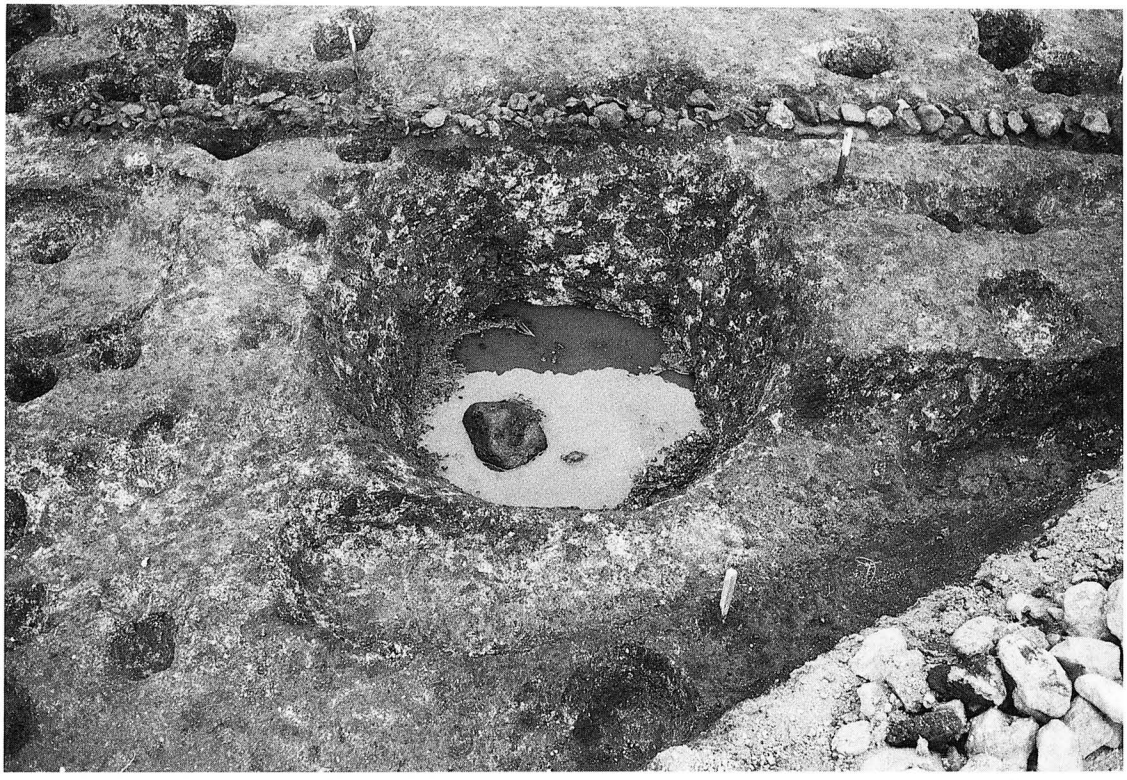
4. 第１号・第２号建物址周辺（西方向から）

5. 第３号建物址・第１号井戸址（西方向から）

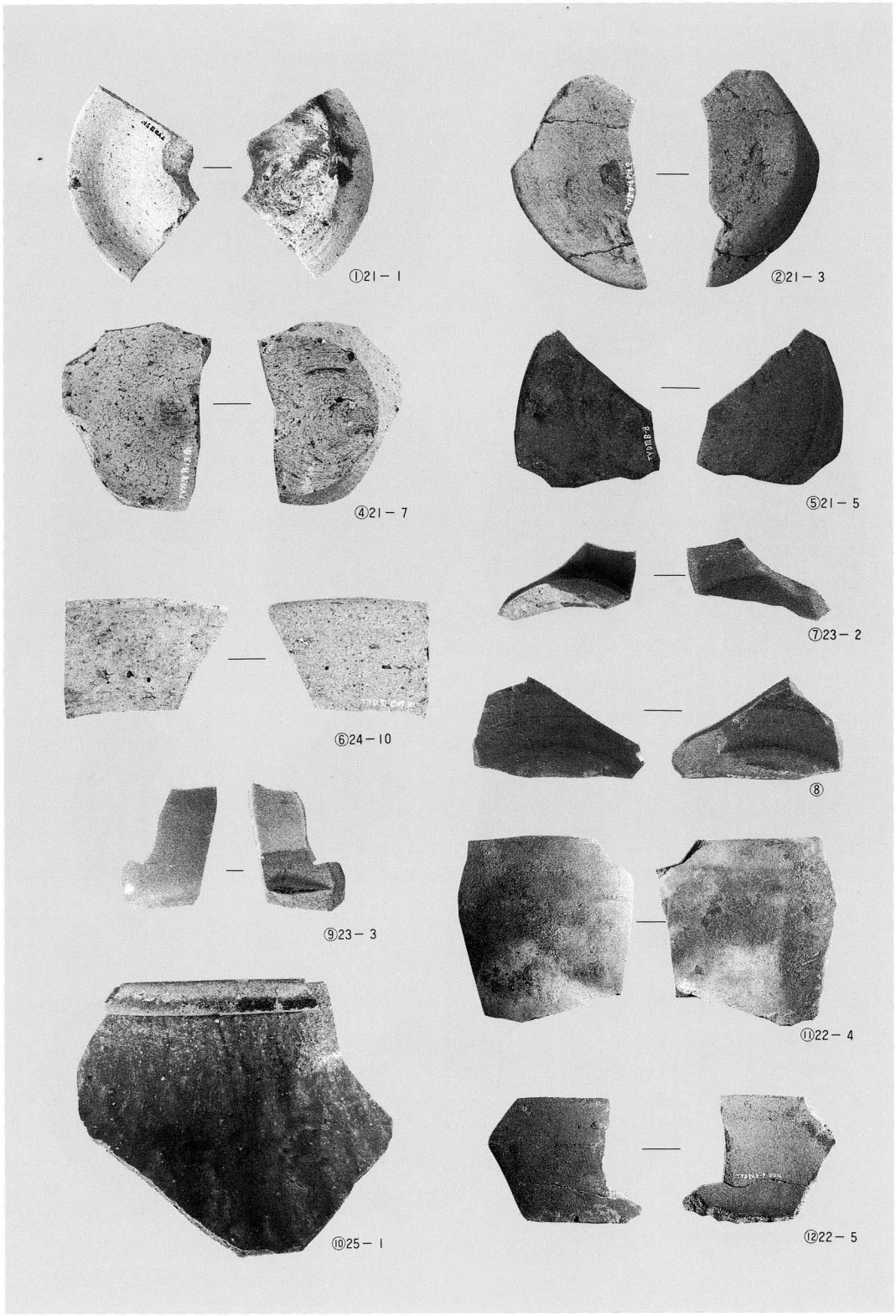
6. 第５号建物址・溝址（西方向から）



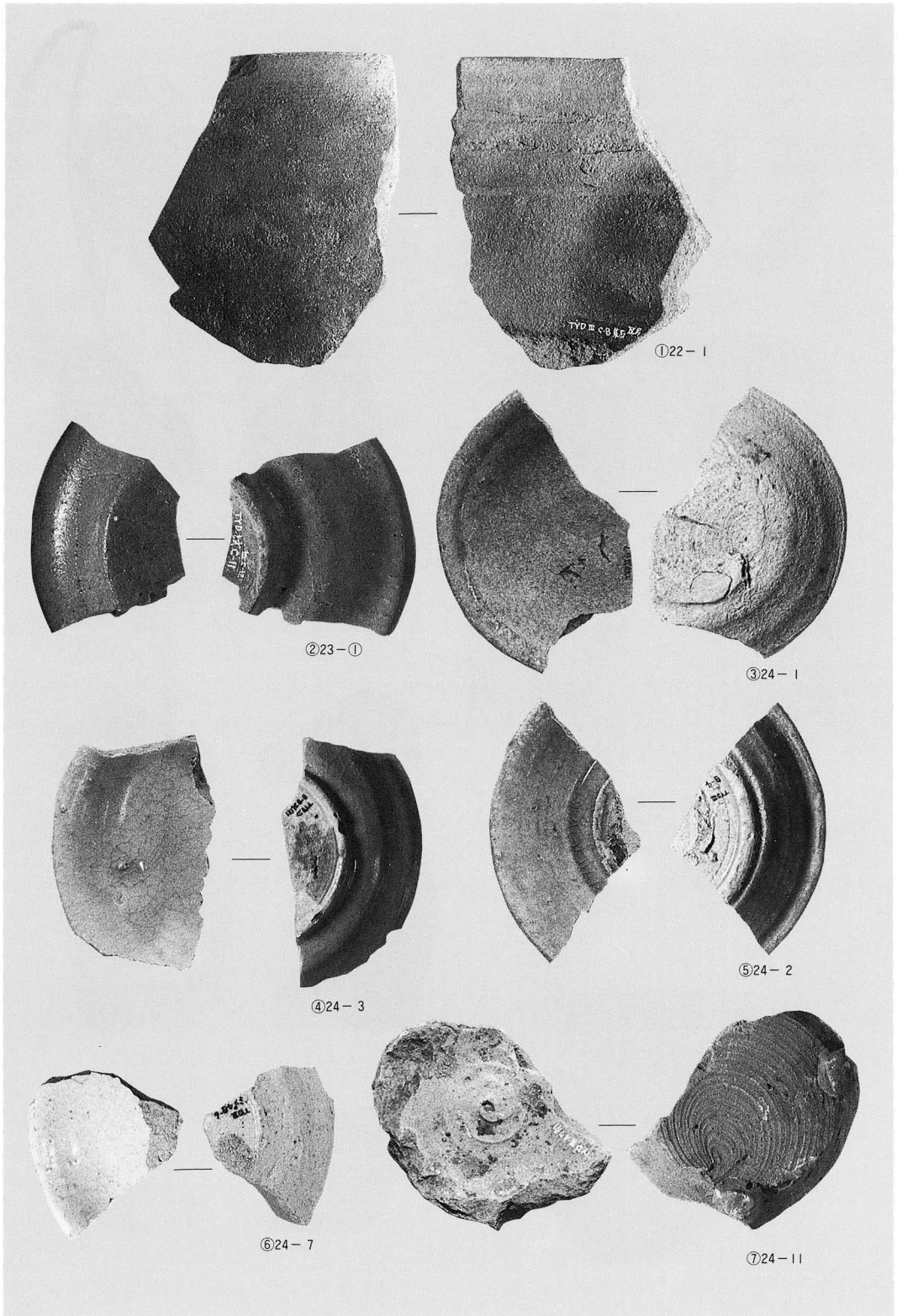
7. 第１号井戸址（南方向から）



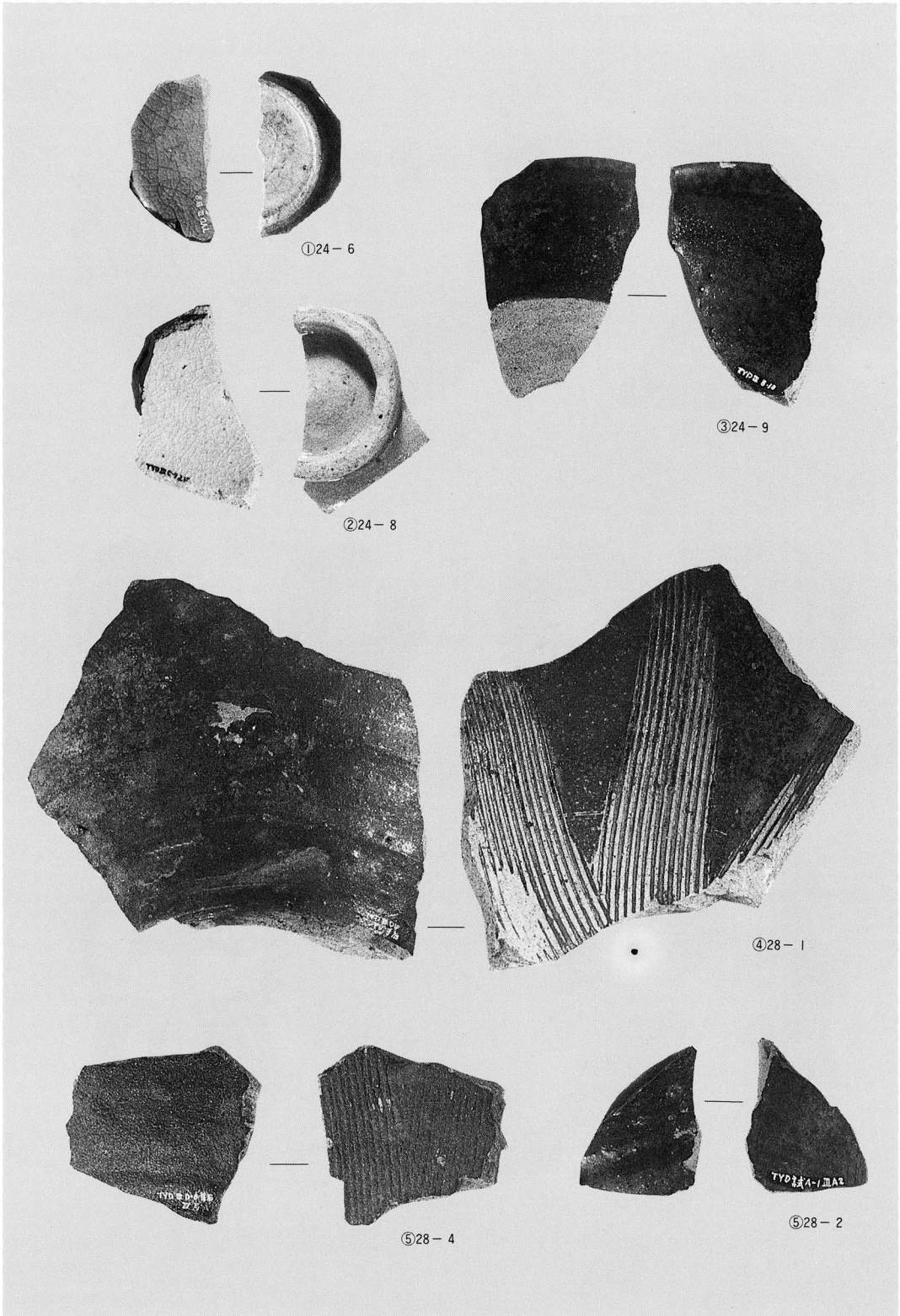
8. 第２号井戸址・第３号溝址（南方向から）



出土陶磁器類(1)（①～⑨1/2・⑩～⑫1/4）



出土陶磁器類(2)（①～⑦1/2）



①24－6

②24－8

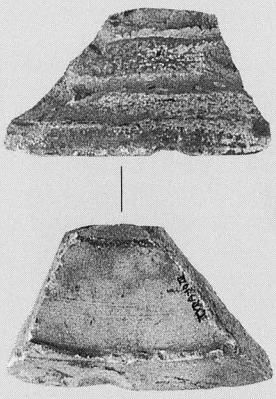
③24－9

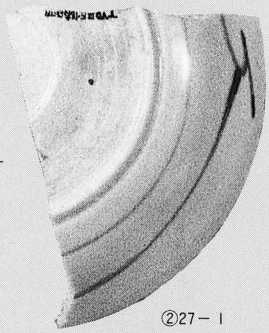
④28－1

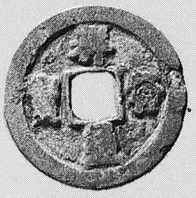
⑤28－4

⑤28－2

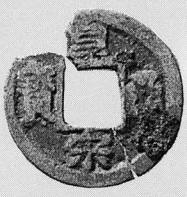
出土陶磁器類(3)（①～⑥1/2）

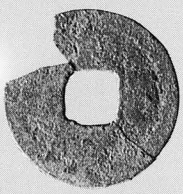

①24－13

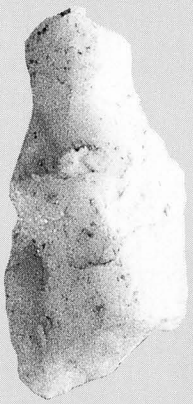

②27－1

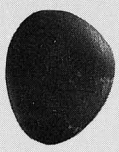

③34－1

④34－2

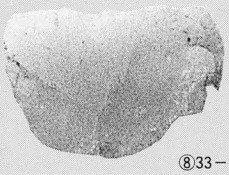

⑤34－3

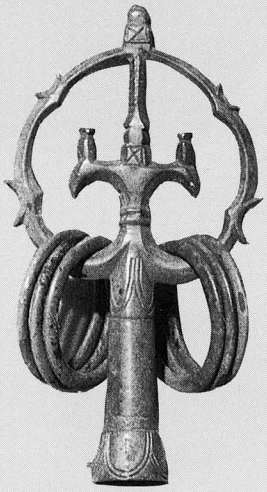

⑥34－4


⑦33－1

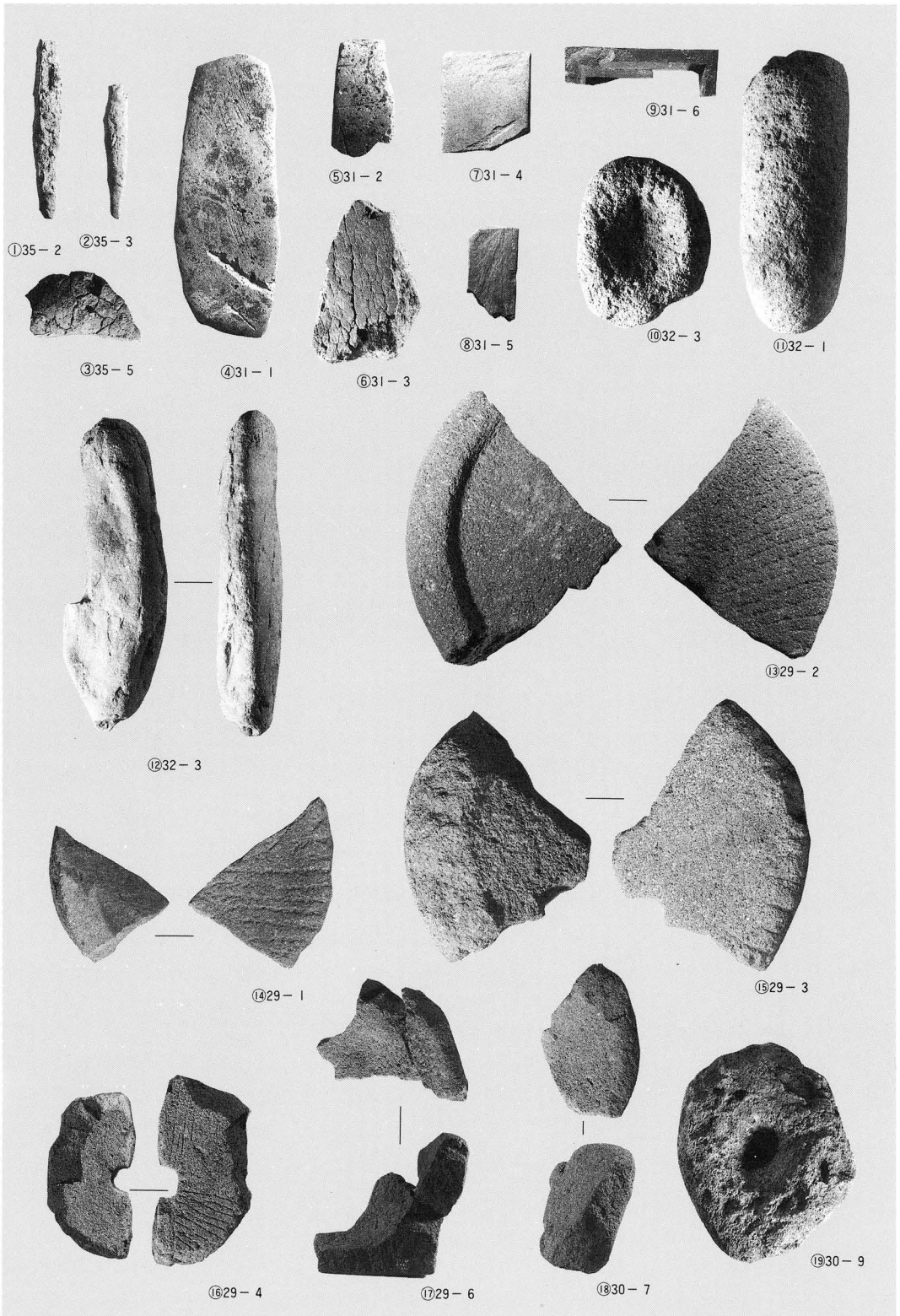

⑨33－3

⑩33－4


⑧33－2


⑪

出土陶磁器類・銭貨・石製品・金属製品（①・②・⑪1/2・③～⑩1/1 ）



出土石製品（①～⑫1/3・⑬～⑲1/6）

山　寺　遺　跡

——国道299号線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書——

平成元年３月５日　印刷
平成元年３月10日　発行

編　集　　長野県茅野市塚原２丁目６番地１
発　行　　茅野市教育委員会
印　刷　　ほおずき書籍株式会社